
INFINITE WITCHES **—無限の蒼穹を駆ける白き龍—**

シュウ禅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

INFINITE WITCHES | 無限の蒼穹を駆ける白き龍

【Nコード】

N4483X

【作者名】

シユウ禅

【あらすじ】

白騎士事件・・・その日を境に俺たちの世界は一変した。理不尽で歪んだ世界へと・・・
その5年後、歪んだ世界を破壊するかのように突如世界は異形の者たちに襲われた。
その者達の名はネウロイ・・・
この物語は一人の少年と空を駆ける少女達の物語

護りたいから俺は飛ぶ！！

この小説はストライクウィッチーズとインフィニットストラトスのクロスモノでオリジナル主人公が出ます。若干のアンチ要素が含まれます。作者はこれが処女作です。それでもいいという方は是非お読みください

EP・01 扶桑の白き籠（前書き）

ストライクウィッチーズとES インフィニット・ストラトスのクロスモノです。

作者はこの作品が初めてですので至らない点などもございますがそれでもよろしければお付き合い下さい。

EP・01 扶桑の白き龍

今日も太陽は世界を照らし続ける。

世界が例えどれほど凄惨な出来事が起きていても

平等に

無慈悲に

世界は今

滅亡の危機に瀕していた

「伏せるー！」

その声が届くのとほぼ同時、爆発音がその声をかき消すように響いた。

「くたばれ！！ネウロイ共！！」

「アハト・アハト8・8 cm砲射撃用意ー 撃てえ！！！」

その巨大な砲が火を噴く

次の瞬間目の前にいる黒い異形に砲弾がぶち込まれた。瞬間激しい閃光と轟音がその場にいる兵士達を襲う。

「やったぞー！！」

「敵反撃来ますー！！」

「司令部！Dフィールドにネウロイ6！ 繰り返す、Dフィールドにー」

「地雷原、突破されました!!」

「くそ、予備陣地へ後退!!」

その指示に従い、後方へと下がる兵士達。

しかしー

「走れ!走れ!!」

「急げ!」

「急ー」

逃げる兵士たちを空から赤き閃光が無慈悲に襲う

「ぎゃあ!!」

「フライング・ボット
飛行壺!!」

「くそオ……」

「多すぎる……」

一人の兵士が呟く……

その眼前には……

無数の黒き異形が人類をあざ笑うかのように立ち塞がっていた。

2039年・・・

その年を境に我々の世界は一変した

その変化を一言で表すとすれば、

我々は人類は互いに殺し合うことを楽しむ余裕を失った、ということだ！
遊戯

7

ネウロイーーー

突如出現した「異形の敵」

人類はこの黒き異形の者たちと種の存亡をかけた戦いを繰り広げる事になったのである

人類が敵対している敵、ネウロイ。

彼らは『瘴気』をまき散らし、大地を腐敗させる。

その強力な瘴気に人間は太刀打ちできず、死に追いやられる。

しかし、中には瘴気に打ち勝つ者たちがいた。

遙か昔より存在する魔力という力を持つ者

その者達は自らの魔力を機械によって増幅し、普通では持つことのできない兵器を軽々と操り、自在に空を飛び回り、敵の攻撃を障壁で受け止める

人々は尊敬の念を込めて彼女たちをこう呼んだウィッチ魔女と……

欧州―帝政カールスラント東部、ボズナニア

欧州で最も激戦区であるこの地では日々、地獄のような激しい戦闘が繰り広げられていた。

「C中隊！残弾確認！！」

「もうカンバン！！」

「再配分お願いします！！」

「……チっ！！」

C中隊隊長セシリア・グリンダ・マイルズは軽く舌打ちをする。

彼女たちブリタニア王国陸軍第四戦車旅団C中隊の周りは木々は倒れ、いくつものクレーターができていた

彼女たちの目の前には巨大なネウロイの姿。

その黒き体から伸びた砲塔が彼女達に向けられる。

「……！ 総員、障壁展開！！」

その瞬間、マイルズは部下に指示を飛ばす。

ネウロイの砲から赤い赤い光の奔流がC中隊を襲う

辺りに衝撃が走った

砂塵が舞い、彼女たちを包む。

「被害報告！！」

「全員、生きてます！！」

「よし！全軍、総攻撃！！、敵正面に全弾叩き込め！！」

次々と巨大ネウロイに無数の砲弾が叩き込まれる。

「マイルズ大尉！ 徹甲弾残量僅少！！」

「構うな、叩き込めえ！！」

なおも倒れぬネウロイ

「いい加減墜ちてええええええつ！！！！！！」

そしてついに

KYRAAaaaaa.....

甲高い、ネウロイの叫びがあたりに響くとネウロイはその巨体を光の破片に変えた。

「敵ネウロイ、破壊確認.....」

「ブリタニア王国陸軍第四戦車旅団C中隊よりHQ.....敵大型ネウロイを撃墜、Dフィールド制圧完了しました。」

『こちらHQ、これより代替部隊を送る。部隊到着後、補給に戻れ。それまで現状を維持されたし』

「了解、交信を終了します。」

「.....ふっ」

ほっと息をつくマイルズ。

「大尉、司令部はなんと」

そばに控えていた彼女の副官が声をかける

「代替部隊の到着後、補給。それまで現状を維持せよ、だそうよ」

「そうですか、これで少しは休めますね」

「ええ……中隊円周防衛隊形！各員周辺を警戒せよ！！みんな悪いけどもう少し頑張って！！」

「……了解！！」

指示に従い、円周状に固まる中隊の隊員たち。

しかし、その動きにいつもの精彩さはなかった。

平時であれば、マイルズは緩慢な動きをした部下を怒鳴り散らすところであるが彼女はその気にはなれなかった。

（……みんな相当疲れてる、無理もないわね。）

黒海付近に大規模怪異が発生し、欧州に侵攻を開始したのは今から八か月前の2039年4月のことである。

平和に酔っていたオスマルクを瞬く間に占領し、大国カールスラ

ントに電撃的侵攻を開始したのである。

欧州各国をはじめ、世界は震撼した。

現在、カールスラント・オストマルク国境では絶望的な防衛線が繰り広げられている。

ネウロイの侵攻は激しく、このままではカールスラントも席捲せっけんされてしまうのは時間の問題と思われていた。

世界各国から援軍が送られてはいるが、強大なネウロイを食い止めるには至っていない。

彼女たち、ブリタニア王国陸軍第四戦車旅団C中隊もその送り込まれた援軍の一つであった。

（派遣されてからというものの、あちこちに狩りだされてるくに休みを取ることもできなかつたわね）

彼女たちはネウロイのカールスラント侵攻初期から参戦し、今現在もこうして前線に立ちつづけ、欧州防衛の一端を担っている。

それ故に連戦に次ぐ連戦により部隊の疲労も蓄積されていた。

（けどこの作戦さえ終われば後方で久しぶりに休暇がもらえる。・・・お休みももらったら何しようかしら？）

彼女たちが周辺を制圧したことでほぼ八割がた今回の侵攻作戦は成功したといえる。

他の戦域も時期に制圧されるだろう。

この作戦の成功の暁にはカールスラントの首都、ベルリンで役3か月ぶりの休暇を取れることとなっている。

隊のみんなでベルリンを観光するのもいいかもしれない……

そんなふうはこのあと休暇のことを考えていると

「ま、マイルズ大尉！ う、上を見てください！！！」

部下の一人から突然悲鳴のような声で報告が入る

「どうした!？」

上を見上げてみると……

「そんな……」

空にひととき巨大な存在が彼女達の前に現れる

巨大な白鯨を思わせるシルエットの巨大なネウロイが小さな僕をつれそこに君臨していた

巨大爆撃型ネウロイ・ディオミディア

最近現れるようになった敵の新型だ

突如として現れた強敵に隊員たちの顔が絶望に染まる

彼女たちは装甲歩兵だ。陸上の敵は何とかできても空にいる敵はど
うにもできない。

ディオミディアがその身についている機銃を彼女たちに向ける。

もう駄目だ……………

そう思ったとき、

どこからか砲弾が飛来し、ディオミディアに直撃する。

『こちら代替部隊だ、遅くなって済まない』

無線機から代替部隊の隊長と思わしきの太い男性の声が聞こえる

「あ、ありがとうございます!!」

『これより敵の注意をひきつける!!君たちはその間に撤退を!!』

「で、でもそれじゃあ!!」

魔女ウィッチでもない者が敵の攻撃を食らえば一溜まりもない。

彼らは文字道理死にいくようなものだ

『魔女君たちは我々の希望なんだ！！こんなところで命を無駄にするな
！！』

そう叫ぶ代替部隊の隊長

「……すぐ戻ってきます、だから絶対に死なないでください！
」

マイルズはそう答えるのが精いっぱいだった

『気にするな、いい女を待つのは男の甲斐性さ。さあ、行けえ！！』

「はい！！全軍後退！！」

そう叫び後退しようとするマイルズ

しかし……

ディオミディアから一条の閃光が走り、代替部隊を襲った。

その攻撃で代替部隊の戦車のほぼ半数が壊滅。

「そ、そんな！！」

さらにマイルズたちを逃すまいと無慈悲にその砲塔を彼女たちに向け、放つ。

「くう、・・・・・・・・!!」

何とか障壁で防ぐが押されるマイルズ。

「もう、駄目・・・・・・・・」

今度こそ終わりだ・・・・・・・・そう思った瞬間

一条の雷光がネウロイを貫く

瞬間、激しい轟音と共にネウロイは光の欠片となって消えた。

「・・・・・・・・え？」

一体何が起きたのだろうか。

あまりに唐突な出来事に呆然としてしていると突如インカムに若い男の
声が入ってくる。

「大丈夫か、その陸戦ウィッチ！」

声のする方を見上げると、そこには一人の少年がこちらに降りてきた。

年齢は15、6といったところか、背は170cm半ば、扶桑人特有の艶やかな黒髪がところどころはねており、髪だけを見れば年相応かそれよりも下に見える。しかしそれなりに容姿が整っているのに加え、強い意志が宿る蒼く澄んだ瞳が大人びた雰囲気を出していた

「こちら、義勇^{ぎゆう}統合^{とうごう}戦闘^{せんとう}飛行^{ひこう}隊^{たい}隊長^{ちやうじやう}、緋村^{ひむら}優^{ゆう}刀^{とう}大尉^{だいうじ}だ！そっちの指揮官は誰だ？」

「は、はい！！ブリタニア王国陸軍第四戦車旅団C中隊セシリア・グリンダ・マイルズ大尉です。助けていただきありがとうございます」

「いや、こちらこそ遅れてすまない。今全線域がしっちゃかめっちゃかでデカブツを発見するのが遅れた。マイルズ大尉は今のうちに戦車部隊の怪我人の救出、手当てを頼む」

そういつて優刀は肩にかけていたリュックサックを下ろす。

「メデイカルキットまで・・・いったいどこから？」

「何、近場に補給所があったからな、来るついでにもしかしたら、

と思ってもって来たんだ。あと……マルセイユ!!」

そう上空に向かって叫ぶと上空を警戒していたウィッチが一人おりてきた。

その手には武装コンテナがぶら下がっていた。

「あと弾薬もついでにおいていく」

「いたりつくせりね。」

『優刀!!』

突然無線に少女の音が響く。

「武子、どうした?」

『三時方向から敵第三波!!すぐ戻ってきて!!』

「了解、今戻る!!」

「新手?」

「ああ、あとは俺たちが相手する。航空型だけみたいだからな、今のうちに怪我人をつれて後方へ下がってくれ」

「後武運を!!」

優刀は敬礼をして空へと去っていく

「あの噂は本当だったのね。」

「はい。最初はびっくりしましたけど、男のウィッチメールウィッチ、一Waib Drache《白き龍》は実在したんですね。」

魔法を使えるのは圧倒的に女子が多い、

しかし、極稀に魔法力を生まれながらに持つ男子が現れる

今日の前に現れた少年もその一人である。

しかし、彼が有名なのは魔法が使える男子だからではない。

「オストマルク撤退戦において、迫りくるネウロイの軍勢を抑え込んだ扶桑の英雄……」

オストマルクの都市、クラカウより民衆がカールスラントに避難する折、ネウロイが大規模侵攻をしてきたことがあった。あわやカールスラントにまで侵攻されるところまできた。その時、部隊を率いて難民防衛に当たったのが緋村優刀率いる扶桑国軍遣欧艦隊義勇飛行中隊であった。

その時に多くの難民を救ったこと功績からカールスラントの人々から畏怖と尊敬の念を込めてこう呼ばれるようになった

一Waib Drache《白き龍》と……

「下原、敵の数は？」

「はい、距離110000、高度15000、数は小型種12、中

型種3です。」

下原定子少尉の報告が入る。

「なんだ、いつもの雑魚どもか。」

下原の報告を聞いたドミニカ・S・ジエンタイルがめんどくさそうにつぶやく

「ちよつと大将、不謹慎よ。」

その不謹慎な発言にエディータ・ロスマンが頭を抱えながら苦言を呈す。

「まあエディータ、大将の言うことももつともだ。ここ最近は特に張り合いがないのが多くてつまらん。」

「ラルまで……」

「ところで優刀、彼女たちはどうだった？」

いつの間にか横についていたヴァルトルートクルプンスキーが意地の悪い笑みを浮かべて聞いてきた

「ああ、伯爵の予想通り、可愛い子ぞろいだったよ。」

「それはよかった！ 優刀あとで一緒に彼女たち食事に誘いに行こうよ！」

「……伯爵、お願いだからやめて」

クルプンスキーの彼女らしいいつもの調子にこの部隊の副隊長、加藤武子が頭を抱える

「さてと、おしゃべりは終わりだ………加藤隊はロスマン隊と共に小型機の牽制を、残りのモノは俺と共に中型をつぶすぞ！
……化け物どもに我々の恐ろしさを思い知らせてやれ！！」

「了解！！」「」

年若い少女たちの凜とした声が蒼き戦場に響き渡る。

優刀の合図とともに少女たちはいっせいに行動を開始する。

「定子ちゃんついてきて！、エディータ、フォローよろしく！」

「了解！！」「」

真っ先に行動を開始したのは加藤。

僚機である下原に声をかけ敵にめがけて一気に急降下する。

加藤と下原は持っていた機銃を小型の一群に掃射する。

敵は突如頭上から降り注いできた銃弾になす術もなくその身を撃ち抜かれる

エディータとその僚機であるエーリカ・ハルトマンがタイミングを見計らい、続いて降下する

加藤と下原を追いかけていた敵が更に上空からくる二人に気づくが時すでに遅く、反撃しようとして試みるもそれよりも早くエディータとハルトマンが銃弾を叩き込む。

予期せぬ第二波に敵は対処するまもなく次々落ちていく。

当初確認された敵はその数を12から8に落とした。

加藤たちが小型をひきつけてできた隙間を6つの影が一気に駆け抜ける。

駆け抜けた後には数はさらに減り、5

「ジェンマイル隊は右の、ラル隊は左を頼む！」

「了解」

「ああ、任せろ」

6つの影が一気に加速する。

接近に気付いた敵が表面につく機銃を掃射するが6つの影は華麗にすり抜ける。

ジエンタイルの後ろについていたフェデリカ・N・ドツリオが前に躍り出てその身に持つ大型の機関砲を構え、中型に襲い掛かる。

その強力な火力に敵は抗うこともできず、その身を削られる。

すると、ひときわ深く削られた場所から突如赤い宝石のような物体が姿を現す。

「大将、お願い!!」

「任せろ」

ジエンタイルはさらに加速、

その赤い宝石めがけて矢のように飛んでいき、肉薄、

「墮ちろ」

赤い宝石にそのまま拳を勢いよく叩き込む。

拳を叩き込まれた赤い宝石はなすすべなく砕け散る

次の瞬間、

砕け散った宝石に呼応するかのように中型に亀裂が入り、その身を

無数の光る破片に変えた。

「やれやれ、大将も豪快だね。まさか拳でコアを潰しちゃうなんてさ。」

「奴らしいといえば奴らしいけどな。クルプンスキー、そろそろ仕上げるぞ」

「OK、ラル」

そういつて二人は中型にとどめを刺すべく向かっていく。

相対するは彼女たちのゆうに10倍はあるつかという巨大な怪物。

しかしその身は傷だらけであり、今にも崩れ落ちそうである。

GYAaaaaAAAAAa

声にならない咆哮を上げ、

向かってくる彼女たちを落とそうと、機銃を放つが二人は華麗な機動ですべてを躲し、銃弾を放つ。

そしてついに、

「これで、終わりー！」

クルプンスキーが装甲を削り、ついに中型のコアを露出させる。

その隙を逃さずラルがコアを貫く。

「ふ、他愛ないな」

そういつて髪を書き上げるラル。

次の瞬間、

背後で敵が崩れ落ちる体を光の破片に変えた。

G Y a o o o O O O O ! ! !

残る一体になった敵は仲間の敵を取ろうとその攻撃を更に強める。

その銃弾の嵐の間を華麗にすり抜けて敵の身を削る影があった。

「そこだ、食らえー!!」

その間をすり抜け機銃を次々と潰していく少女、ハンナ・ユステイ
ーナ・マルセイユ。

しかし彼女は先のラルやドリオのようにその装甲を削るようなこ
とはしない。

かのじよは機銃だけを狙い破壊している。

そのはるか上空から敵に向かい突撃していく一つの影。

優刀だ

その少年が手に持つのは銃ではなく、一振りの刀。

その姿に気付いたのか、敵は男に向かって機銃を掃射する。

しかし、少年はそのすべてを見切り最小の動きで躲す。

刀を上段に構え勢いを殺さず、敵に降下

「もらったぁああ!!!」

そのまま敵を一刀のもとに両断。

二つに分かれた敵は音を立て、その身を光り輝く破片に変えた。

「ネウロイ、全滅を確認!!」

マイルズは副官から歓喜の報告を聞く。

マイルズはその報告を聞き微笑み一言つぶやく

「Waib Drache《白き龍》が私たちを助けてくれたの
ね・・・」

「義勇統合戦闘飛行隊、任務完了。これより帰還する!」
RTB

2039年

それは、何の前触れもなく人類の前に現れた。

それを我々はネウロイと名付けた。

ネウロイがどこから、何のために来たのか誰にも分からなかったが、彼らによって人々は故郷を、国を追われたのは確かだった。

しかし、彼らに対抗する者たちが現れた。

人々は彼女たちをこう呼んだ

ウィッチ
魔女と・・・

これはウィッチ達と共に空を駆ける一人の少年の物語・・・・・・・・

EP・01 扶桑の白き龍（後書き）

どうも初めまして、シユウ禅です。

以前からやりたかったストライクウィッチーズ（以下SW）とインフィニット・ストラトス（以下IS）のクロスものがやっとできました。

すいません・・・とか言いながらこのEP・01

ISのイの字も出てきません

ISファンの皆様ごめんなさい。

今回はプロログなのでオリ主やその周りのウィッチという存在の説明を優先した結果ISを入れる余地がありませんでした。

たぶん、篝やら、セシリア、IS学園の子達の登場はもう少し先になります。

4、5話はたぶん優刀達、義勇統合戦闘飛行隊の周りの世界観と情勢の説明の回になると思います。

あ・・・でも、あの子はみんなに先行して出るかな？

さて、今回出てきたウィッチですがはつきり言います。

ほとんどアニメには出てきていません

アニメに出てきていたのは今回名前だけでできたハルトマンだけです。(あとマルセイユも一話だけでてます)

マルセイユやマイルズは原作者のフミカネ氏の同人誌、「アフリカの魔女」シリーズのキャラです。

他のキャラは島田フミカネ氏のサイトに掲載されている *World Witches* のキャラです。彼女たちがどんなキャラかはそちらのほうを見てください。

あと何人かはちゃんとメディアに出ています。

この作品のモットーは

ウィッチ達を可愛く、かつこよく書く

ISとSWではあまり待遇の良くない男たちにも活躍の場を

という感じですよ。

さて、このあとがきも書き終わりのテンションそのままに書いてしまったのでなんだか長くなってしまいました。

優刀がこの先どのような物語を彼女たちと繰り広げるのか、彼女達のかわいい姿をお届けできるよう頑張りたいと思います。

以上、シュウ禅でした。

EP・02 義勇統合戦闘飛行隊（前書き）

どうも、シユウ禅です。

遅くなりました

と、いうわけで第二話です。

それではどうぞ！

EP-02 義勇統合戦闘飛行隊

俺の名前は緋村優刀。

扶桑国空軍大尉

このカールスラントで義勇統合戦闘飛行隊を率いている世にも珍しい男のウィッチメルウィッチだ。

義勇統合戦闘飛行隊は各国のウィッチを集めて結成された航空ウィッチ部隊だ。

各国の精鋭を集めた部隊とは謳われているが、正確に言えば各国から派遣されたウィッチの寄せ集め部隊というのが本当の所だ。

そんな女子だらけの部隊に男が一人。

他の男連中から見ればおいしいシチュエーションのように見えるのであるが

正直言って彼女たちをまとめ、指揮するのは大変な仕事である事の上ない。

もちろん、彼女たちといるのは楽しいし、かけがえのない仲間だとも思っている。

俺には俺なりの苦労がある、ということだ。

「うん」

午前11時30分

書類を見ながら俺は一人うなり声をあげていた。

「変な唸り声をあげて一体どうした優刀」

そういつて声をかけてきたのはグンドユラ・ラル

カールスラント空軍所属のウィッチで、優秀な航空魔女が所属するJG52の中でも指折りの腕利きだ。

うちの隊の中でも視越し射撃の腕は一、二を争い、年若い隊員からは頼れる姉のように慕われている

「最近ネウロイの装甲が固くなってきただろ、なにか使える武装はないかなと思ってさ」

「なるほどな・・・確かに固かったな、あいつは」

ここ最近のネウロイは急激にその性能を伸ばし始めてきた。

今までは小銃でも十分に貫けた装甲が防弾装甲に変化していたり、再生機能を持っている中型も多くなってきた。

それで何か使えそうな武器があるなら物資の補給の発注と一緒に頼んでみようと思ってカタログを見ていたというわけだ

「いまは何とかなっているが、防弾装甲持ちの小型が出てきたら今のままじゃ手に負えなくなる」

その言葉にラルもうなずく

「だが一番厄介なのは、あの兵器だろうか？」

「ああ、」

そうである。

ネウロイが進化したことで得た厄介な力。

光学兵器である
ビーム

やつらはいまだ人類でも実用できていないビームを使うようになった。

古くからSFの世界で使われている強力な兵器が現実になって我々を襲ってきた

正直言ってこれが怖い。

記録ではビルをまるまる消滅させたとか。

破壊ではない、消滅。

この世界から存在が消えてなくなったのだ。

「今はまだ防げる程度だからいいが、そのうち防げなくなるぞ。」

「今でさえ防ぐと魔法力をこっさり持つてかれるもんな」

今は何とか障壁で防げるからいいがそれもいつまでできるか……

この世界から跡形もなく消えるとか勘弁願いたい。

「どうにかならんもんかね」

そんなふう二人で頭を悩ませていると……

グ~~~~~

何やら奇妙な音が鳴った

「……今のつて」

そう言っつてラルの方を見ると

「違う。私じゃないぞ」

即、否定するラル

その顔はほんのり赤かった

「じゃあ、いったい誰が……あ」

ある部屋の一点を見る

そこはこのオフィスに置かれている応接用のソファアの所であった。ただし応接用とはいっても、今まで本来の目的で使われたことはない。ちゃんとした応接室はほかに用意されている。

大体は隊員が寛いだりするのに使っている以外は今のところ使われていない。

いつもは武子や下原などあたりが気を遣い掃除をこまめに行っつておりそこそこ綺麗なのだが

今日はその真逆

ビールやらワインやらの空き瓶が大量に置いてあった。

昨日、部隊の年長組で飲んでいてそのまま片付けず就寝。

朝片付けようとも思ったのだが、急いで先日の作戦の報告書を作らねばならなかったのでそのまま放置しっぱなしだったのだ

そのゴミ置き場の中心から何かがムクリと起き上がる

「んんんんっ、朝か・・・」

「おはようさん大将」

起き上がってきた相手、ドミニカ・S・ジエンタイルに挨拶する。

彼女の名前はドミニカ・S・ジエンタイル

リベリオン合衆国の精鋭部隊第八航空軍に所属するウィッチだ。

気怠げな振る舞いが目立つが、その実は即断実行、意気と情熱の熱血魔女

その思い切りの良さや面倒見の良さからついたあだ名が「大将」

「ああ、おはよう……ところでボス、今何時だ？」

「今11:45だ」

「……もうそんなになるのか。ほかの奴らは？」

「エディータは新人三人の訓練、武子は非番、伯爵は……どこ行っただんだ？」

「さあな。あいつも今日は非番だからな、どっかそこらへんで女の子をナンパしてるんだろう」

「だろうな」

「まあ、伯爵は置いといて……ボス、なんか食べるものないか？」

「冷蔵庫に何かしら入っているだろ？ 適当に自分で作れ」

「……了解」

そういつて隣接される給湯室に入っていく。まあ、給湯室といっても窓際に仕切りを敷いて冷蔵庫とガスコンロをつけただけの簡易的なものだが。基地の給湯室は遠いので仕方がなく簡易的に作った。

そもそも義勇統合戦闘飛行隊が使っているこのオフィス、元々はミールディングルームだったので少々広い。

スペースが余っているのでちょうどよかったのだ。

「じゃあ、私はコーヒーでも入れてくるか」

ラルも席を立ち、給湯室に向かう。

給湯室にはきちんとしたコーヒーミルがおいてある。

コーヒーにこだわりのある武子とラルがわざわざブリタニア製の手動式ミルを取り寄せた。

しかも二つ。

ラル、武子がそれぞれ買い求めたらしい。

一つでいいじゃんと思うのだが、ミルによってはだいぶ味が変わること

まあ実際、二人の淹れたコーヒーはインスタントより格段においしいので文句はないのだが

しばらくするとドミニカは料理を乗っけて戻ってきた。

リベリオン合衆国の国民食、ホットドックである。

「優刀」

「サンキュー」

ラルからコーヒーを受け取り一口

「うまいな」

「そうか」

満足そうに微笑むラル

「ところで二人は何の話をしていたんだ？」

自分の席でホットドックを食べながらドミニカは先ほどの話を聞いてきた

「最近、敵が頑丈になってきただろう？」

「それで何かいい武器はないかって話をしてたんだ」

「なるほどな……」

「リベリオンでなんか使えそうな武器ってないか？」

「そうだな……」

あまり興味なさそうに返すドミニカ。

この態度だけを見ればあまり人の話を聞いていないようにとられるかもしれないが、

そんなことはない。彼女はちゃんと聞いている。

気だるげなのが彼女が一番リラックスできる状態なのだろう。

彼女はきちんと仕事をしているので問題はない。

「どうだったかな、あまり覚えがない。機関砲じゃダメだろ？」

「ああ、どつちかというとり回しのいい機関銃の方がいいかな」

「じゃあ、ないな。今はどれも一緒だ」

「そうか」

「いつそのこと、ショットガンでも使うか。リベリオンにいいのがある」

「でもそれだと装填数が少なくて長時間戦えないぞ？」

「無駄弾を撃たなきゃいい。至近距離で当てれば問題はない」

「確かにそうだがハイリスクだな」

「やっぱり、機関銃が航空歩兵が持つには一番いいってことか・・・」

「そうなるな、しばらくは戦い方を工夫して、戦っていくしかないな」

事実こうやって自分の意見をきちんと出してくれる。

三人であーでもない、こーでもないと次々に案を出していると

「失礼します、緋村大尉はいらっしゃいますか？」

「ああ下原か、どうかしたのか」

外で訓練をしていた下原定子が執務室に顔を出した。

この時間であれば、いつもなら訓練が終わり次第そのまま食堂に移動しているのに、何か用だろうか。

「はい、整備小隊の土田曹長が時間があればご足労願いたいと。」

どうやら伝言を頼まれたようだ。

「さっさと来いってことか。」

「・・・おやっさん」

土田曹長

統合戦闘飛行隊のストライカーユニットの整備を担当する整備小隊の長。

基本的に整備中隊の切り盛りする最上級下士官というのは現場の叩き上げで登り詰めた人物が多い。

そんな百戦錬磨の人物に俺みたいなひよっこ大尉が逆らえるわけが無い

事実上の出頭命令である

「はあ・・・言ってくるか」

「そうだな」

そういつてラルと執務室を出ようとする

「私も行くぞ」

ドミニカも席を立ちともに行くこととしていた

「いいのか？今日非番だろ？」

「特にやりたいことも決まってるからな、暇つぶしにはちょうどいい」

「そうか、じゃあ下原留守番頼めるか？」

「はい、任せてください」

「じゃあ、言ってくる。」

下原に見送られ、三人は執務室を出て行った

「ご足労いただきありがとうございます」

オフィスを出て格納庫に赴くと格納庫の前で土田曹長が直立不動で待ち構えていた

「あゝ、堅苦しいのは抜きでお願いします」

正直言つて土田曹長に敬語で話されるのはきつい。

何せ扶桑海軍変から自分のユニットを見てもらっているのだ。そんな人物に敬語で話されるのは背中がかゆくなってしょうがない。

「いえ、部下の手前もありますから。」

即答である

確かに曹長より階級が上の大尉がペコペコ頭を下げていたんじゃない。部隊の士気にもかかわる

「……わかった、それで用件つてのはもしかして頼んでいた件か？」

「はい、とりあえずいろいろうちの者たちで試してみたんですが……」

そういつて格納庫の奥へと案内される

案内された先には巨大なモノが鎮座されていた

ーISSだ

正式名称『インフィニット・ストラトス』

宇宙空間での活動を想定されて作られたマルチフォーム・スーツである。しかし当初の目的である宇宙進出は一向に進まず、様々な思惑から兵器へと変わり、さらに『スポーツ』へと落ち着いたーーー
ーーー 所謂、飛行パワードスーツだ。

しかし、『スポーツ』へと収まっただけのISSだが、その既存の兵器を凌駕するスペックを持って余りすぎて、スポーツという枠にすら収まらず、軍事力の要となってしまうのである。

そんなスポーツ用品なのか兵器なのかもいまいち定義が定まらないモノがなぜこの格納庫の片隅においてあるのか？

答えは簡単。

うちの部隊にISSを使える人物がいるからだ。

「ドツリオ中尉！大尉が来ましたよ！！」

曹長が叫ぶとISSの後ろから一人の少女が顔を出す。

「Ciao、優刀。報告書は片付いたの？」

そういつて陽気な笑みを向ける彼女の名前はフェデリカ・N・ドッ
リオ

ロマーニヤ公国出身のウィッチでISのロマーニヤ公国代表候補と
いう風変わりな経歴の持ち主である。

国家代表とはISの世界最強を決める世界大会『モンド・グロツソ』
が二年に一度行われる。その大会に出場する選手のことである。

要するに代表候補と言つのは国家代表のIS操縦者のその候補とし
て選出される人達の事である。簡単に言うとエリートだ。

「フェデリカ、どうだ量子変換システムの方は？」

「うーん、とりあえずサンプリングは終わったんだけどね。はい、
これがそのデータ」

目の前にディスプレイが表示される。

「うーん…へえ、思っていたよりも展開のエネルギー消費が少ない
な」

出されたデータの内訳に驚く

「ええ、しかもこれマガジンありよ。」

「すごいな、展開に一秒しかかからないなんて驚きだ」

予想どおりといえば予想どおりの結果に驚く五人。

頼んだ件というのはストライカーユニットにこの量子変換システムを搭載できないかということだった。

三人が見ていたのはISの機能の一つ、量子変換システムの稼働サンプリングデータであった。

試しにカールスラント航空ウィッチの正式装備であるMG - 42を量子変換して展開させてみたのだが、予想以上の良い結果に思わずほおが緩む。

量子変換システムを使うことができれば戦闘に携行できる武装も多く出来るようになる。そしてら継戦能力もずっと長くなって多様な作戦行動もとれるようになる。

正直言って航空ウィッチは積載^{ペイロード}限界が低く、携行できる武装が少ない。最初から装備していた分のマガジンを打ち尽くせばあとはせいぜい予備のマガジンを一つ持てるかどうかだ。

それでは装甲の厚い大型のネウロイが多数出現している欧州の戦いはこれからどんどん苦戦を強いられるのは目に見えている。

フェデリカが使用しているMG - 151のような大型の兵装は強力ではあるが取り回しに難がある。

「量子変換システムに登録できる兵装はこの分だと4つぐらいか？」

今までだとせいぜい一丁か二丁だけである

そついった事情から今回のテストの結果は上々ともいえる。

「ストライカーユニットに搭載できるか？」

「大丈夫だと思うけど、魔力配分をいじらなきゃいけないから今乗っけるエンジンのままじゃ余力がなくてスペックダウンは免れないわね」

「出力不足か・・・」

確かに、搭載することができるとはできるようだがこれでは他の性能が下げなくてはいけない。

持てる兵装が多くなることは重要だが、だからと言ってほかの性能を削るといふ行為はあまりしたくない

「使えると思っただけだね」

「そういえばフェデリカは実戦で使わないな、どうしてだ？」

ふと、ドミニカはフェデリカがISを使わない理由が気になったのかフェデリカに尋ねた。

「ああ、それはね・・・」

グウーーーーーグウーーーーー

突如、格納庫に外から耳を切り裂くようなけたたましいサイレンが鳴り響く。

「敵襲!？」

「まさか、おととい作戦があつたばかりだぞ!？」

「大尉、司令部から連絡がー!!」

下原が電話を持って駆け込んできた。

「はい、緋村」

「ボニンだ」

電話の相手はJG52の飛行隊指令フーベルタ・フォン・ボニン少佐からだつた。

「いったいどうしたんですか？」

「ああ、先ほど全魔女支援要請が入つた」
フロックンアロー

全魔女支援要請が出るなんて多々事じゃない。

「いったいどこから」

「カールスラント・オラーシャ国境沿いを航行する輸送機からだ。どうやら避難民をカールスラントに護送している最中に襲われたらしい。」

「リバウの航空隊が護衛にあたっているんじゃないんですか？」

「どつちやら違つらしい」

オラーシャからカールスラントへの護送任務であるなら航続距離の長い零式艦上戦闘脚を装備している扶桑遣欧艦隊所属のリバウ航空隊が当たっていると思っただんだが・・・

どうやら別の部隊が当たっているらしい。

「今はうちの第二中隊も第三中隊も出払っていて出せる部隊がお前の部隊だけだ。・・・いつてくれるか？」

「了解です、ただちに出击します」

「今、クルピンスキーに指令書を持たせた。詳細は奴に聞け」

「伯爵が・・・？」

意外な名前が出てきたのでふと引っかかる

たしか伯爵は今日は非番だったはず。・・・まさか

「少佐・・・まさか」

「・・・ちょうど奴好みのいい酒が手に入ったんでな、安心しろ、まだ開けていない。奴は素面だよ。後でお前も飲みに来い」

どうやら昼間から飲み比べをしようとしていたらしい。

ヴァルトルート・クルピンスキー

無類の酒好き女好きの享楽主義者で楽道家。

すらりとした長身と優雅な身のこなしからついたあだ名が「伯爵」
勇猛果敢、敢闘精神に溢れるあまり必要以上にネウロイに接近しユ
ニットを壊す部隊内のクラッシャー。

飄々とした性格で怒られたって気にしない。大概のことは笑って流
す。

朝から姿が見えないと思っていたら指令室にいたのか。

「……………本当でしょうか？」

指令に念を押して確認する。

「当たり前だ。酔っ払いを飛ばせられるか」

「わかりました。信じましょう」

「では頼む」

電話が切れると同時に、伯爵が駆け込んできた。

「優刀、出撃だよ！ 指令から連絡は？」

「今聞いた！」

「はいこれ、指令書。」

そういつて指令書を渡してくる

目的地はここからずいぶん離れている。増槽をつけていくか

「曹長!?!」

「了解です、てめえら!?!出撃準備だッ!?!回せッ!?!」

「おおっ!?!」

土田曹長が声を挙げ、部下の整備兵に指示を出す。

次々に滑走路にストライカーユニットの発進台が並べられる。

「優刀!」

滑走路に出ると武子が真っ先についていた

その後ろにエディータ、ハルトマン、マルセイユがこちらに向かって走っているのが見える。

「いったいどうしたの!?!」

「スクランブル緊急発進だ!?!ネウロイ敵が避難民の乗った輸送機を襲っている。これからオラーシャ方面に向かう。」

「オラーシャの? こっちよりもリバウ航空隊の方が近いような気がするけど……」

「考えるのは後だ先生！大尉、速く出撃しよう！！」

「ああ！！」

マルセイユが自分のユニットに飛び乗りエンジンに火を入れる。他の隊員も出力を上昇させる。

自分もユニットー零戦ーに飛び乗り銃を手に取る

「義勇統合戦闘飛行隊、出るぞっ！！！！」

EP・02 義勇統合戦闘飛行隊（後書き）

どうも、シユウ禅です。

何とか一週間以内に二話目投稿できました。

本当はもう少し前に投稿するつもりだったんですけど、今週なぜかいろいろ忙しくて週末の投稿になりました。

これからは何とか週一で投稿出来たらなあ、と思います。

今回は、ISのあの人たちが登場です。

それではまた。

EP・03 IS インフィニット・ストラトスー（前書き）

三話目です。

一話と二話が長すぎたように感じたので今回は少し短くなっています。

それと今回からやっとIS組が登場します。

それではどうぞー！

「けど、護衛についているのはいったいどの部隊なのかしら？」

目的地に向かう途中、右横を飛んでいた扶桑国空軍、加藤武子が疑問を口にした。

「さあな・・・通常だったらリバウ航空隊が当たると思うんだが」

扶桑国遣欧艦隊所属リバウ航空隊

リバウ航空隊が装備する零式艦上戦闘脚は長距離航行に優れており、その為オラーシャからの護衛任務であるならばリバウ航空隊所属のウィッチが適任だ。

であるはずがそのリバウ航空隊ではなくほかの部隊が当たっている。

ではオラーシャのウィッチ、または戦闘機部隊が当たっているのだろうか。

先ほど司令部からの新しい情報によるとそちらも違うようだ。

「まあ、行けばわかることだ」

「そういうこと」

左横のラルの意見に同意する

ここであれこれ予想を立ててもしょうがない。

百聞は一見にしかず

現場に行けばわかることである

「そこに助けを求める人がいるならば助けに行く。そしてその力をより多くの人々の為に使う、それが俺たち？ウィッチ？だ」

その言葉にうなづく隊員たち。

例え何があるうとも人々を守るために戦う・・・それが俺たちウィッチだ

「こちら、オラーシャ連邦第583輸送機部隊！ 我、ネウロイの攻撃を受けつつあり！！至急応援を求む！！繰り返す！！我ネウロイの攻撃を受けつつあり！！至急応援を求む！！」

オラーシャの乾いた空の下、三機の輸送機が黒き異形から逃げ惑っていた。

「くそ！！来るぞ！！」

一条のビームが一機の輸送機を襲う

「粉くそおおおおっ！！！！」

ハンドルを思いっきり右に逸らし 機体を右に向ける

その機体の船艇下部をビームがカスめる

「き・・・奇跡だ・・・」

『だ、大丈夫ですか！？』

通信から聞こえてきたのは女性の声。

「何とかな！それよりも早くネウロイを落としてくれ！！こっちは避難民が乗っているんだ！！そんな急激な機動は何度もできない！！！」

『は、はい！！』

それを最後に通信が切れた

「くそ！！なんでこんなことになっちまったんだ！！」

「いつもならリバウ航空隊のウィッチ達が護衛についてくれているのになんで今日に限って！！」

いつもであればリバウにいる航空ウィッチの部隊が護衛にあたってくれるはずなのだが今回に限って違う部隊が当たっていた。

彼女たちも何とか頑張ってくれているが、その動きは扶桑の精鋭といわれるリバウ航空隊と比べると格段に見劣りする。

「くそ、このままじゃ・・・!!」

「機長!!」

「どっした!!」

「っ、通信です!!」

「ど、どこからだ!!」

「ウィッチからです!!」

その言葉は喜びに満ちていた

「なんだと!! よし! つなげ!!」

『こちらリバウ航空隊、竹井少尉です!! そちらにあと10分で着きます! だからあともう少しだけ持ち堪えてください!!』

「————お安い御用だフロイライン!! 待っているぞ!!」

そう言っつて通信を切る機長

「ふ、ふふ・・・副長」

「はい・・・!!」

「あと10分! あと10分で我々の戦友が来てくれる!! それまで
なんとしても生き残るぞ!!」

「はい!!」

絶望の色に染まっていた瞳には今や希望の光が宿っていた。

「はあああっ!!」

掛け声とともに突き出された巨大なランスがネウロイに突き刺さる。

「くらいなさいっ!!」

次の瞬間ランスに内蔵された四連ガトリングガンが火を噴き、ネウロイを内部から破壊した。

「これで三機!!」

息をつく間もなくそのまま次の標的に向かって飛翔する水色の機体。

その水色の機体はいま欧州で多くみられるウィッチの使用するストライカーユニットとは大きく違った

確かに人の形をしているが、手足は一回り大きく、全長は優に3メ

ートルはあろうかという大きさ。

そうーイーISである。

世界最強の兵器とされるISが今、ネウロイと交戦していた。

しかし……

「きゃあー!!」

「いや、こないで!!」

そのISで構成された部隊はいま、窮地に立たされていた。

「山田先生!!」

青い機体を装備していた少女、更識楯無はこの部隊を指揮する人物、山田真耶に声をかける。

「更識さん!どうかしましたか!!」

「このままでは全滅です!増援はまだ来ないんですか!？」

「は、はい!今通信が入ってあと10分でリバウの航空ウィッチが来てくれるそうです」

「そうですか……」

増援が来るまであと10分

楯無のかおが曇る

このままじゃあと10分も立たずに全滅する。

その時

二人の間に一条のビームが走る

「くっ!!」

楯無はガトリングガンを、真耶はアサルトライフルをネウロイに向かって放つ。

二人の攻撃を受けたネウロイはその身をむなっしく光の粒子に変えた。

「先生、このままじゃ!!」

「はい、わかっています!!」

楯無が懸念していることは他の隊員達の事であった。

いや、

正確には彼女たちは軍人ではない

彼女たちはIS操縦者を養成する機関、IS学園に所属する学生である。

ではなぜ学生とされる彼女たちがこの戦場にいるのか。

その理由はISという機体にある。

ISはそもそも、宇宙で活動するための装備として開発されたのだがいつの間にもやら世界最強の兵器として軍事力の要とされた。

今回の大規模怪異発生に伴い欧州の防衛の為に世界中ISも世界中から派遣された。

彼女たちIS学園の生徒もその部隊の内の一つであった。

楯無含め、派遣部隊に選ばれた生徒は皆、各国の代表候補性や、学園でも選りすぐった優秀な人材ばかりだ。

しかし、皆実践の経験はない。率いている山田先生すら実践は初めてなのだ。

そのような誰も実践経験者のいない中での出撃。

敵は派遣以前に渡された資料によると小型のラロスという機種が15機。

機種としては旧式に分類されるのだが、その旧式にすら生徒たちは手こずっている有様であった。

このままではまずい……

楯無はそんな予感がしていた。

そして、その予感不幸にも的中してしまう。

「も、もういやあああああつ！！！！」

「ちょ、ちょっと待ちなさい！！」

突如、生徒の一人が錯乱し、戦闘空域から逃げようとした。

敵がその隙を逃すわけもなく

「……避けてえつ！！」

ネウロイは容赦なく逃げようとした生徒の背中に機銃を放つ

「きゃああああつ！！」

無残にも背中から撃たれ落下する生徒

「よくもつ！！」

ガトリングガンをラロスを放ち撃ち落とす

「もういや……」

「あたしまだ死にたくない！」

まずい！！

楯無がそう思った時、すでに遅かった。

仲間の一人が落ちたことで最後まで保っていた緊張の糸がぷつぷつ

と切れてしまったのだ。

死ぬかもしれないという恐怖

その恐怖が皆に伝染する

皆戦うことを放棄してしまった。

戦意を喪失したのを感じたのか、ネウロイは戦意を失った生徒の横を通り過ぎ輸送機に攻撃を仕掛けようとする

「みんな!!! しっかりしてください!!!」

真耶が攻撃しようとしたネウロイを撃墜し、彼女たちを立ち直らせようとするが一度恐怖に支配されてしまえばそこからすぐ立ち直るのは困難を極める。

楯無は戦えなくなった仲間をそのままにして一人戦い続ける。

「先生!!! 生徒よりも輸送機を!!!」

「けど、更識さん!!!」

「ISには絶対防御があります!!! たとえ落とされても命には危険はありません! それよりも輸送機を守らないと!!!」

「そ、そんな・・・更識さん」

楯無の無常ともいえる言葉に真耶は困惑の声を挙げる。

「先生！！しつかりしてください！！ あの輸送機には罪のない民間人が乗ってるんですよ！！ 見殺しにするつもりですか！！」

「！！！！」

楯無の言葉でようやく我に返り自らのやるべきことを思い出す真耶。

「更識さん！！私たちが増援が来るまで敵の注意をひきつけます！！」

「はいっ！！」

「他のみなさんはまず自分の身の安全を考えてください！！ まだ戦えるっていう人は私についてきてください！！」

そう言ってネウロイの集団に攻撃を仕掛ける麻耶たち

何人が二人に触発され攻撃に加わる。

そうして麻耶たちはネウロイに攻撃を仕掛け足止めする。

しかしたかが数人では足止めするには限界があり

「しまった！抜かれた！！」

一機が真耶達を抜いて輸送機へと向かう。

「更識さん！！」

「はい！！」

楯無がその後を追いかける。

「このおおおっ!!」

ネウロイに向けてガトリングガンを放つが当たらない。

そしてついにネウロイは輸送機をその射程にとらえた

「だめええええっ!!」

楯無が叫ぶがネウロイは止まらない

ネウロイが輸送機に向けて機銃を放とうとしたその時

ネウロイに向かつてはるか上空から銃弾が降り注ぐ。

思わぬところからの攻撃にネウロイは何もできずに光る欠片となり
消滅した。

「え?・・・」

予想外の出来事にあっけにとられる楯無

「わはは、よし命中」 あの距離で全弾命中なんて、私ってば最強ねー!」

「はっはっはっはっ!! 相変わらずいい腕だな! 義子!!」

「何とか間に合ったみたいね・・・」

声が出たかと思うと楯無の頭上を疾風のように駆け抜ける三つの影

「こちら扶桑国遣欧艦隊288航空隊、竹井醇子少尉です!! これより貴官らを援護します!!」

EP・03 IS インフィニット・ストラトスー（後書き）

ついに登場しましたIS組！！

やっとです。

しかもしょっぱなから最強の生徒会長、さすが、生徒会長！強い！！

………とはいきませんでした。

扱いが結構不遇になってしまった。……ごめん、楯無さん

いや、IS好きですよ？ ブルーティアーズとか、打ち鉄とか、ラファールとか、かつこいい機体がたくさんありますから！

けど、扱いが不遇とか言ってるけどなんだかんだで楯無さん、ネウロイを旧型の小型とはいえ5機落としてますから普通にエースです。しかも初の実戦で。ちなみに現実でもSWの世界でも合計で5機以上落とすとエースって呼ばれるようになります。

そうやって考えるとドイツのパイロットはすごいですね、撃墜数三桁叩き出しているのはほとんどがドイツのパイロットです。日本にも一人三桁を越すトップエースがいます。

……あまり素直に喜べることではないんでしょうが。

話がそれました。

今回の第3話、ISファンの皆様からはもしかしたらお叱りを受けるかもしれませんが。

この作品のIS、最強って言ってますが、無双のような活躍はしません。機体のレベルを下げたとかそういうつもりは作者の中にはありません。機体は間違いなく時代最高峰の性能を持っています。優刀が作中で言っていたように使える機能が満載です。

それでも今回、生徒が落とされたのは単純に使い手の問題です。

一応、彼女も設定では代表候補生だったんですけどね。話の展開の都合とか、この作品の土台的なものとか考えたら第三話、IS勢があまり活躍できなかった。

最後のなりますが、ご意見ご感想の方、お待ちしております！

ではまた次回！！

EP・04 魔女とIS Apart (前書き)

すいません、遅れました

というわけで、第4話です。

今回は少し長めになりそうなので二つに分けました。

それではどうぞ

Ep-04 魔女とIS Apart

「こちら扶桑国遣欧艦隊288航空隊、竹井醇子少尉です！！これより貴官らを援護します！！」

目の前の少女が高らかに叫ぶ

「……………魔女」
ウィッチ

私はその光景を見て、知らず知らずのうちにそう呟いていた。

ウィッチ
魔女……………

遙か昔よりこの世界に存在する魔法という不思議な力を持った者たち。

しかし魔法といってもいきなりどっかに瞬間移動とか、怪しい術で悪魔を召喚したりとかは出来ない。

出来ることといえば、少し障壁を張ったり、遠くにある物を少し動かしたりする程度であり役には立たない。

そんな役に立つかどうかの力を持つもの……………魔女

しかし、彼女たちのその力はネウロイに対しては絶大な驚異であり、ことネウロイ戦に対しては人類の切り札ともいえる存在である。

そんな存在が今日の前にいる。

「この部隊の指揮官の方は誰ですか？」

「は、はい！ IS学園欧州派遣部隊隊長、山田真耶です。」

突然声をかけられ、声を裏返して返事をしてしまった。

声をかけてきた向こうの隊長を見る。

向こうの隊長のその若さに驚く。

「あ、あなたが隊長ですか？」

「はい、そうですが？」

年は14、5といったところである。

そんなまだ年端もいかない少女が部隊を指揮してこの戦場にいるということに驚かない人間はいないだろう

「扶桑国遣欧艦隊288航空隊、竹井醇子少尉です。ネウロイは我々が相手をするので輸送機の護衛をお願いします。」

「え！でも、そちらの人数は3人だけのようですが。それならば我々も一緒に……」

「そちらの隊員は見たところによるとPTSDを起こしています。戦闘続行するのは不可能です。」

そう言つて生徒たちのほうを見る竹井少尉。

そこには金切り声ですすりなき、金縛りで動けなくなった生徒たち、無表情になり何かを呟き続ける生徒の姿があつた。

「あなたたちは今はここを一刻も早く離れるべきです。このままでは生徒は持ちません」

「!?!」

「ここは我々だけで十分ですので早く退避を」

そう言つて仲間の元へ戻つていく

「……………先生、ここは彼女たちの言つ通り輸送機の護衛に回るべきです」

いつの間にかそばに来ていた更識さんにそう提案される

確かにその通りだ。

このままでは生徒がみんなつぶれてしまう。

部隊を預かつたものとして隊員のことを考えるともう限界だ。

此処は彼女の言葉に甘えるべきだ

「…そうですね、みなさん！私たちは輸送機の護衛に専念します！
万一敵が来た場合は慌てず騒がず私に報告！！私が相手をします！
！・・・動ける人は動けない人のフォローに回ってください！！」
私は生徒たちに指示をだし、離れてしまった輸送機に向かった。

「ふう、ようやく往ったわね」

離れていくISの部隊を確認した醇子はほっと一息をつく。

もしかしたら隊長もPTSDになっていないかと思ったがどうやら
正常な判断はできるようだ。

そこへネウロイが攻撃を仕掛けてくるが・・・

「・・・甘いわ！！」

その攻撃を軽やかに躲し、手にもつ九九式二号二型改13mm機関
銃でネウロイを落とす。

「まずは一機・・・！！ 美緒、後ろ！！」

そう醇子が叫び視線を上空に向ける

美緒と呼ばれた少女の後ろに敵が張り付いていた。

少女を落とそうと機銃を放とうとするが、突如ネウロイの正面から少女の姿が消える。

「はあああつー!!」

ネウロイの上空から少女が、その手に握った扶桑刀がきらめく。

両足を複雑に動かし、後回転の要領で一瞬で宙返りをして相手の上を取ったのだ

「貰った!!」

上空から急降下し、そのままネウロイを一閃、敵を両断する。

「これで二機!!」

「後は……義子!! 二時方向の敵をお願い」

「ん、了解」

竹井の指示に気のない返事で返す少女。

地表に背を向けた状態から一気に降下する

降下した少女の先には敵が4機。

そこに向かって恐れることなく一直線に落ちていく

敵に突っ込みながらすれ違い様に次々とネウロイに銃弾を叩き込む

「終わり〜」

少女が通過した後、次々とネウロイは光の破片に変わった。

「ふう……終わったか」

「ええ、二人とも周囲を警戒して」

すべての敵を倒した三人はそのまま上空を周回して残敵がないか警戒する。

「しかし……彼女たちが例の部隊か」

上空を警戒していた坂本美緒飛曹長は心底つまらなそうに呟く

「ええ、IS学園選りすぐりの精鋭部隊っていう噂だったけど……」

「てんで駄目じゃん」

「しかし、なんでまたあんな訓練兵ばかりの部隊を送り込んだんだ？」

「少しでも実績がほしいんでしょう？向こうは怪異が発生してからその開発費に見合う戦果を残せていないみたいだしね」

「それで訓練生の部隊まで送ってくるか？」

「ただでさえ機体の数が少なくて前線に回せる機体がない以上、少しでも使えるなら送って実績を上げたいのよ。なんだかんだで今一番ISを保有しているのはIS学園のようだし。一応代表候補生は軍で一通りの訓練は受けているみたいだけど……」

坂本と竹井は遠くで輸送機の護衛に当たっているIS部隊に目を向ける。

初の実戦を経験したということもあり緊張が抜けていないのか、IS学園の生徒の飛ぶその姿はフラフラしておりかなり危なっかしい。

「あれでか？…… あれだったらまだ戦闘機のほうが全然役立つぞ？」

「軍にもメンツというものがあるのよ、国民の血税で賄っている軍事費の大部分を開発費に使ってるのよ？それなのにいざって時に全く役に立ちませんでした、なんて口が裂けても言えないわよ」

「確かにそうかもしれないが……」

「だからって訓練生を送ってくる上層部の考えなんて私には理解できないけど」

「あんなものにお金をかけているんだつたら、こつちに補修部品の一つでも送ってほしいものだ。現場は倉庫で埃を被っていた旧式の戦闘機や戦車を引つ張り出して使っているんだぞ。」

ISが軍事転用され防衛の要となった後、軍事予算の多くはISの開発費に回され、既存の兵器である戦闘機や戦車の新型機開発計画は凍結、または縮小を余儀なくされた。その為、現在欧州戦線では10年から20年前の旧世代の戦車や戦闘機を使っている。更に補修部品の生産ラインも縮小してしまった為、補修部品がまったくと言っていいほど足りない。今や前線では足りない部分をどうしようかと整備兵が日々頭を悩ませているというのが現状である。

「だけどさすが醇子だね。」

「ああ、よく輸送機がここのルート通るとわかったな」

「ええ、まさか本当にこのルートを通るなんて思わなかったわ。」

元々、今回の任務は彼女たちの部隊が行うはずだった。しかし、任務に入る直前、他の部隊が行うとされ中止を言い渡されたのだった。

何か嫌な予感がした竹井は自身の部下であり、親友でもある坂本美緒飛曹長、西沢義子飛曹長と共に哨戒任務の名目で普段は飛行しない空域に向かった。そして輸送機は竹井が予想した通りの航路を取っていた。

「なににせよ、輸送機が無事でよかったわ。」

「はっはっは！そうだな！」

「じゃあ、さっさと帰ろうよ。私お腹がすいた〜」

「駄目よ、少なくとも安全圏まではついていないと。輸送機をこのままにしては置けないわ」

今、竹井たちが飛んでいる空域は人類側の勢力圏ではあるがしばしばネウロとの交戦が行われる空域に近いため、安心はできる空域ではない。

「うえ〜、めんどいな、もう。」

げんなりする義子

「そういわないの。……………さてと、二人とも弾薬の方はまだ残ってる？」

「ああ」

「問題なし」

「よろしい、……輸送機部隊、これより我々も護衛へつきます。よろしいですか？」

『ああ、頼む。』

「山田さん、よろしいですね?」

IS部隊の方にも確認を取る

『は、はい!お願いしま………!! 竹井少尉!』

「どうしました!？」

突如、インカムの向こうから真耶の悲鳴が聞こえてきた。

『よ、4時方向に大きな機影!………お、大きい』

「なんですって!？」

竹井はその方向に目を向ける

そこには

巨大な黒き影が竹井たちをあざ笑うかのように悠然とこちらに向かって飛行していた。

Ep-04 魔女とIS

Apart

(後書き)

リバウの三羽鳥、登場!!

Bpartへ続きます

「竹井少尉、新しい敵が！」

「こちらでも見えています。・・・山田先生。そちらで戦えるのはどれくらいいますか？」

「私を含めて4人です」

「そうですか・・・」

竹井は顎に手を当て思案する。

真耶はああ言っているが実際の所は数に入れていいかどうかはかなり怪しい。

IS学園の生徒たちは客観てきに見ても、もう戦うのは限界だろうしかし、あの大型を相手にするにはウィッチ三人ではまず無理だ。

大型単体であれば時間がかかるが何とか倒せるだろう。

しかし大型の周りには小型機が数機、護衛についている。

しかも、今回は避難民を乗せた輸送機もいる。

まだ交戦距離には入っていないものの、足の遅い輸送機をつれて逃げるといふ選択肢もとれない

「……山田さんたちに輸送機を守ってもらおうか？」

「いや今の彼女たちでは心もとない。」

「竹井が思案していると」

「山田先生！！ た、大変です！」

「突然生徒の一人が声を荒げる」

「ど、どうしました！！！」

「8時方向に機影を確認しました！！その数……10！！！」

「ま、まさか……敵の増援！？」

「その報告を聞いた真耶の顔がみるみる青ざめていく」

「一直線にこちらに向かって来ます！」

「オールウェポンズフリー全機全兵装使用自由！！ 我々で迎撃します！！！」

「半ば悲鳴のように指示を出す真耶。」

「待ちなさい！！！」

「迎撃体勢に入るIS学園を制す竹井」

「美緒、？ 視える？？」

「ああ、問題ない」

竹井の問いに簡潔に答える坂本。

そう言って、右目の眼帯を外した。

眼帯に隠されていた右目の魔眼が赤く光る。

「日月旗を抱く白い龍のマーク……優刀だ」

「ということは義勇統合戦闘飛行隊ね」

「それって、あの義勇統合戦闘飛行隊ですか!？」

その名を聞いて驚く真耶。

そこへ……

「竹井、済まない遅くなった」

編隊を離れ一人の少年が竹井たちの所まで飛んできた。

「お久しぶりです、緋村大尉。」

「はっはっは！久しぶりだな、優刀」

「美緒も元気そうだな」

「やつほくホムラ大尉」

「・・・西沢、ホムラじゃない、緋村だ」

おおよそ軍隊のあいさつとは思えぬフランクさであいさつを交わす
4人。

そんな中、IS学園の生徒たちの方から小さなつぶやきが聞こえて
きた

「え・・・男？」

「なんで男がいるのよ」

「男のくせに」

「本当に増援なの？」

そのつぶやきを聞いた坂本は生徒達を睨み付ける

何かを言おうと振り向こうとするが・・・

肩を掴まれることで止められた。

「優刀・・・」

「いちいち相手にするな、毎度のことだ。」

そう言ってため息をつく優刀。

「しかし……」

「いいさ、それが彼女達の？常識？なんだろう？」

「……わかった」

「……山田先生、生徒たちを連れて向こうへ行ってももらえますか」

「え、でも……」

「我々であの大型をどうするか話し合いますので周辺にこれ以上敵の増援がないか見張っていてください。」

「わ、分かりました……」

何かを言おうとする真耶だったが、自身を見る竹井の冷たい目に何も言えず、従うしかなかった。

「・・・すみません、緋村大尉。いやな思いをさせてしまいました」

「いいさ、それよりも今はあの大型だ。」

そう言っつて大型のいる方向に視線を向ける優刀

「ああ、でどうする？我々全員で当たるか？」

「いや、全員で当たるには後ろが心配だ。ここはうちの隊だけで当たる。竹井たちは最終防衛ラインについてくれ。撃ち漏らすと、後ろの警戒を頼む。」

「了解です」

「やれやれ、味方を警戒しなくてはならんとはな」

「最悪、あいつらがパニックになったら撃ち落としたって構わない。連中には絶対防御があるからな、たぶん死にはしないだろ。」

「本気か？」

「ああ、撃ち落としてもここは人類の勢力圏内だ。陸戦型にやられることはない。上層部もコアが無事なら文句は言わないだろうし。なにより一番怖いのは奴らがトチ狂って輸送機を危険にさらすことだ。指揮官のあの様子じゃとてもじゃないけど何か起きたときに部下を抑えられんだろう」

「そうですね」

「奴らは一応学生だぞ？いいの？」

「ISなんて代物を使っている時点で学生だからなんて言い分通用しない。ISが国の防衛力であることを知っていて自らが使うことを選んだんだ。その選択をした時点で人を護る側の人間であって、護られる側の人間じゃない。それが嫌ならISそんなんもんを使うべきじゃない」

「うへへ、いくら死にはしないからって人に銃を向けるのは嫌だな」

「誰だつて嫌に決まっている。けど俺たちは軍人だ。民間人を護るのが仕事だ。相手がなんであれ、民間人を危険にさらすのであれば倒す。それだけだ。」

「そうだな……我々も覚悟をしなければいけないか」

「すまないな……ここで起きたことのすべての責任は俺がとる。」

「いいさ、気にするな。あんな連中のために誰がお前に責任を取らせるか」

「美緒の言うとおりです。大尉に責任なんて取らせません、後ろは私たちに任せてください。」

「そういうことだよ氷室大尉」

「ありがとう、三人とも……あと西沢、俺は氷室じゃない、緋村だ」

「わははははっ」

「じゃあ、ここは頼んだ。竹井」

「御武運を!!!」

互いに敬礼を交わし、優刀は先行していた編隊に戻っていった。

「下原、敵の正確な数は？」

俺は編隊に戻ると下原から敵の詳細を報告してもらおう

「はい、高度9000、距離11000に小型機が15機、先行してこちらに向かってきています。その後方に大型が一機接近してきています」

「そうか・・・」

下原の報告を聞き俺は作戦を考える。

「よし、部隊を二つに分ける。まず、俺とジェンタイル隊で敵小型編隊に突入、牽制。大型への道を作る。一呼吸おいて加藤は残りの隊員を率いて大型の相手を頼む。」

「了解」「」

「.....」

隊員から返答が返ってくるが大将 ジェンタイル は返答を返さず一人、ある一点をじっと睨んでいる

「大将、どうした？」

「.....いや、なんでもない。すまなかった。了解だ」

俺の言葉に返答を返すも、ジェンタイルはまだ心ここに非ずといった風だ。

「なんでもないことあるか。そんないかにも悩んでいますって顔してる奴と一緒に敵陣の中に入ったでいけるか。」

「……済まない」

「で……どうした」

「……胸糞悪くしてしょうがないんだ。」

一拍おき、ジエンタイルは口を開く。

「何が？」

「あいつらだ」

そう言っている方向に視線を向ける

「さっきのあいつらの物言いが気に食わなくてな」

「……ああ、そういうことか」

先ほどのES学園の生徒の俺に向かったの陰口をどうやら偶然聞い

てしまったらしい。

「・・・あいつら、ボスに向かつて？男のくせに？なんてふざけたこと言っただぞ。ISを使えるからっていい気になって、普段はえぱり腐っているくせにいざ戦闘になっただら何の役にも立ちはない、そんな奴らがずっと前線で戦い続けたボスに？男のくせに？だと？一体あいつらは何様のつもりなんだ」

普段の彼女の姿からは想像できないほどの怒りを表すジェンタイル。隣を飛んでいたフェデリカがかなり驚いた顔をしている

それはそうだ。彼女がこんなに怒っているところを隊員の誰も今まで見たことない

「ボスたち、男の人達だつて皆、今もこの戦場で必死に戦っているんだ。家族を、国を、護ろうと、必死で戦っているんだ。そこに男も女も関係ない。私たちと共に戦っている？戦友？だ。その？戦友？をあいつらは貶したんだぞ？そんなの許せるか！」

「大将・・・」

「世界最強の兵器であるISを使えるのは女しかない。だから女は偉い？だから男は私たちに跪け？はっ、恐れ入るよ。だったら今すぐこの世界を救ってみる、世界が救えないなら多くの命を救ってみる。それすらも出来ないで、敵を前にびくびく震えてビビッていた奴が前線で命を懸けて戦ってる仲間に向かつてエラそうな口叩きな！！」

「大将・・・もういいよ」

「ボス、いいわけないだろ。あいつらはコケにしたんだぞ！！私たちの仲間を！！」

「大将、いいんだ。？俺たち？は大将達がそう思っていてくれるだけで・・・それだけで十分だ」

そう、？俺達？は彼女達がそう思ってくれているだけで十分だ。

彼女の言いたいことも痛いほどよくわかる。

ISが登場してから世界は変わった。世界最強の兵器、ISはなぜか女性にしか反応しなかった。その為、女と男の社会的パワーバランスは崩れ、この世界は女尊男卑の世の中になり、男は女よりも弱い生き物と言われるようになった。

ISによる女尊男卑の世界になったことで被害を一番受けたのは間違いなく軍に籍を置く者たちだろう。

特に空軍、戦闘機パイロットたちはその一番の被害者といえる。

役割の大部分はISに取って代わられ、その規模の縮小を余儀なくされた。

それでも今も大部分の軍人は男である

もちろん男にはISを扱う事は出来ないし、俺のように魔法力を持

つ男子は本当に稀にしかない。

でも俺は今の欧州がこうやって何とか持ちこたえているのは特別な力も持っていない彼らのおかげだと思っている

きつと戦っているのがウィッチャやISだけであつたらとつくに世界はネウロイの手に落ちていただろう。

皆が力を合わせているから今もこうして戦っていられる。

そんな共に戦っている俺たちの仲間を、IS学園の生徒は貶したのだ

俺だつてそんなの許せるはずがない……………だが。

「しょうがないさ……………彼女たちはまだ本当の？戦場？を知らないんだ」

そう、彼女たちは知らない

戦場というものがいったいどれだけ過酷で悲惨なのかを……………

絶えず響く銃声

人々の泣き叫ぶ声

人の焼ける匂い

町が燃えていく様

真っ赤に燃える空

そこに浮かぶ黒き影・・・・・・・・

それらの前では男も女も関係ない

皆、等しく命を奪われる

それが戦場・・・・・・・・

そんな光景を彼女たちは知らない。

だが、俺は知らない方がいいと思っっている

そんな経験はもう二度と起きない方がいいに決まっっている。

「俺は彼女たちがそれを知らないことは仕方がないと思っっている。」

「だから、俺たちは彼女たちの言うことなんて気にしない、ただ俺たち軍人はやることをやるだけだ。・・・けど、もしそれを知ってしまっても尚、同じことを言うようであつたら・・・は許さない」

「ボス・・・」

「だから・・・大将が、少なくともウィッチの皆が俺達、男のことを共に戦う？戦友？と思ってくれているのなら、それだけで十分だ。」

そう言っつて大将に向かって笑いかける。

「ふ、・・・当たり前だ。ボスは私たちの隊長だ。誰もが認める私たちの最高の隊長だよ」

そういつてふつと笑みを見せるジェンタイル。

「やっぱり大将はそうじゃないと。そうやって笑っっている方がしか

め面よりずっと似合う。やっぱり美人は笑っていないとな」

その言葉にきよとんとする大将。

周りに微妙な空気が流れる

あれ？

もしかしてまた何か俺やつちゃったか？

100

「ぷッ、ふふふふふ、あはははっ！！ さすが優刀！ 言うことがちがうな！このジゴロめ！」

「ちよ、痛っ！何すんだよラル！」

いつの間にか真横に来ていたラルが人の肩をバシッと強くたたいて軽快に笑う。

「誰がジゴロだ！誰が！」

「まったく自覚がないのか？ だったら余計達悪いな天然ジゴロ！」

「天然ジゴロ!？」

「まったくもう……これだから扶桑の人間は」

ロスマンが呆れたように頭を振る

「大将が羨ましいわ。私にも誰か言ってくれないかしら」

頬に手をやり、はあ、とわざとらしいため息をつくフェデリカ

その肩をちよんちよんとつつく影、

「あら何、伯爵？」

「フェデリカ Quanto sei bello! Non t
i faccio dormire per tutta l'an
otte………《君はなんて素敵なんだ！ 今夜は
寝かさないよ………》

「おそらく、クルピンスキーは口説き文句であろうセリフをロマーニ
ヤ語でフェデリカに囁く。

「あら伯爵ロマーニヤ語上手ね」

フェデリカはそれを軽くいなす

「残念、行けると思っただけどね」

そういうクルピンスキーの顔は大して残念そうではなかった。

「伯爵には悪いけど、私ノーマルなのよ。というわけで……
優刀！今の伯爵の言葉を言ってくれないかしら!？」

「フェデリカ、何言ってるの!？」

「ねえロスマン先生、伯爵はなんて言ったの？」

ローミーヤ語が解らなかったハルトマンはロスマンにその意味を聞く

「フラウはまだわからなくていいのよ」

ロスマンは笑顔でそう答えるが額に青筋が浮かんでいる。

あ、すげー怒ってるな。

「はいはい、もうその辺にきなさい。敵とあと少しで接敵するわよ」
ちょうどいいタイミングで武子が締めてくれた。

「了解だ」

そう言って話は終わりとはかりに前を向く。

まったく、クルピンスキーとドツリオに感謝しなくちゃな。

「よし皆、準備はいいな!! これより戦闘を開始する!! 我々と出会ったことを奴らに後悔させてやれ!!」

「了解!!」

その言葉を聞くよりも早く俺とマルセイユ、ジエンタイル、ドツリ
才の四人は敵群に向けて最大戦闘速度で呐喊する。

突出した俺たちを先頭の小型ネウロイは当然狙い撃つがその攻撃を
体を少しひねることで紙一重で躲す。そのまま敵に向かって両手に
持つMG34の銃弾を打ち込む。

まず一機

その両隣にいた敵を左はジエンタイルが、右をマルセイユが撃ち落
とす

そのまま敵編隊を真っ二つ割る様に突撃、抜けたところで左右にブ
レイク。二つに分かれた敵編隊の背後をそれぞれ強襲する。

「今よ!」

武子達が絶妙なタイミングでその隙間を次々と駆け抜けていく

そしてその勢いを殺さずに大型のネウロイに向かっていった

これで大型は大丈夫だ。

しかし敵もそう簡単に武子たちを行かせようとしない。

敵の一機が急旋回し、武子たちの後を追おうとする

「そうはさせない!!」

追おうとする敵を撃ち抜く

今度は敵の一機がこちらに向けて銃弾を放つ

その攻撃を障壁で防ぎ、編隊の周りを大きく迂回するように旋回しながら攻撃を放った敵を撃ち落とす。

そのまま編隊の側面に向かって突撃、向かってくる一機を銃で牽制、その横を通り抜ける

そこへ・・・

「マルセイユっ!!」

「はあっ!!」

マルセイユが上空から攻撃を仕掛ける。

そのままなすすべもなく撃ち落とされる敵

そのまま低空へと抜けていくマルセイユ。

敵の一機がマルセイユを脅威と感じたのか、そのあとを追いかける。降下速度も加わって敵はどんどんマルセイユに勢いよく近づく。

ついに射程にとらえようとしたとき、

「甘い!!!」

マルセイユはロールしながら機首を上げ、弧を描く螺旋を描がきながら飛行する特異な機動を取る。

マルセイユがその機動を取ったことにより、勢いがつき過ぎていた敵はそのままマルセイユを追い抜いてしまった。

「もらったっ!!!」

敵の背後を取ったマルセイユはその隙を逃さず敵に機銃を叩き込む

「これで三機目!」

残りは小型は9機。

、右の編隊に向けて攻撃を仕掛けるジエンマイルとドツリオ。

二人は敵編隊に反撃の隙を与えまいと勢いよく呐喊する。

ジエンマイルは自身の前方にいる敵の攻撃を気にしないといった風にそのまま敵に突っ込み続ける。

そのまま至近距離まで近づき……

「くらえ！」

右手に持つショットガン、レミントンM870を敵の機首ギリギリのところまで発砲。

敵は粉々に碎け散る

「ふむ、威力は問題なし」

銃を一回転させて排莖、次弾装填。

そのまま、次の自分に向かってくる敵に撃ち込む。

次の敵も粉々に砕け散る。

「ち、連射性と射程、速度が問題か・・・やはり航空機動戦にはあまり向かないな」

そういうとレミントンM870を肩にかけ、背負っていたM249を左手に、ホルスターからデザートイーグルを抜き右手に持つ

次々と敵機がジェンタイルに向かって攻撃を仕掛ける

「今の私のは最高に機嫌が悪いんだ、落とされたくないやつは近づくな・・・」

「大将怖すぎるわよ。・・・まあ気持ちは分からなくないけどね」

ジェンタイルの斜め後方についていたドゥリオは自身に向かってくる敵をM151で撃墜しながらつぶやく

「さてと・・・彼女たちに教えてあげようじゃない。自分達が思っているほどあなたたちはすぐくないって事を」

ドツリオは一体の敵に目をつけると一気に加速し突撃する。

敵は撃ち落とさんと機銃を放つがドツリオはなんてことないようにその攻撃を体の重心を移動させることで攻撃をかわす。

そのままの勢いで狙いを定め、銃弾を叩き込む。

「まずは一機目！」

上昇、そして次の標的に狙いを定めて急降下、敵にぶつかりそうになるほど近づくまで銃弾を叩き込む。

「これで二機、次！」

次の標的に向かおうとするが、

「・・・上!?!」

上空から敵機が一機、ドツリオに強襲する

その攻撃をシールドで防ぐ

「いい攻撃ね・・・けど!」

ドツリオは手に意識を集中させる。次の瞬間、彼女の手には光が集まり、その手に剣の形を成していく。

109

「それじゃ私は落とせないわよ!!」

その手に現れた剣で迫るネウロイを両断する。

「あと、一機!」

最後の一機の方へ向いた瞬間、

「残念、終わりだ」

最後のネウロイはジェンタイルの手によって葬られた。

「あら、とられちゃったわね。 どう？ すつきりした？」

「ああ、気分爽快だ。」

そう言って口の端をわずかに吊り上げるジェンタイル。

「そう」

そう言うてにこやかに笑いかけるドッリオ。

「さて・・・あっちも終わった様だな」

ジェンタイルが視線を向ける。

その視線の先いた優刀達は。たった今最後の小型機を撃ち落とし、武子たちの所に向かおうとしていた。

「さて・・・私たちも行きましょうか」

「今更私たちが行っても間に合わない気がするけどな」

「ラル隊はそのまま攻撃を続行、コアをあぶりだして！ ロスマン隊は砲座に攻撃を集中、ラル隊を援護！ 定子ちゃん、私たちは敵右翼を叩くわよ！」

「はい！」

敵大型ネウロイに対して勢いよく降下する武子と下原。

二人が狙うのは、敵ネウロイの両翼、その付け根の部分

付け根に向かって二人は急降下し機銃を放ち翼を根元から吹き飛ばす。

「このまま左翼も……!!」

そのままネウロイの上に上昇。再度左翼に向かって降下する。

「はあっ!!」

続いて左翼を破壊

しかしネウロイはすぐ再生し、元の姿を取り戻す

ネウロイは再生が完了すると武子に向かってビームを放つ

112

「やはりコアを破壊しないと駄目ね」

「武子!! コアを発見した! 胴体のちょうど真ん中だ!!……
くそ、もう再生しているのか!」

ラルからコア発見の報を聞き、武子はすぐに指示を出す。

「了解、エディータ! 胴体上部、前方左側の銃座をお願い!」

「了解！」

「ラルは右側の銃座を！」

武子の指示にを聞いたエディータとラルは次々と銃座を破壊していく。

「これで対空砲は破壊した。再生するまでコア周辺は丸裸……やるなら今ね ドラツへ02より各機……これより敵コアを破壊する。援護されたし！」

「了解！！！」

武子は下原をつれて急降下を開始する。

降下中も加速し、大型との距離を縮める

目の前には視界を覆うほどの巨大なネウロイ。

その大きさに圧倒されそうになるが、ただひたすらに距離を詰める

「……今！」

引き金を絞る。

機銃から放たれた銃弾はネウロイの装甲を深く抉り、コアを露出させた。

「定子ちゃん！」

「はい！」

後方を飛ぶ下原の銃撃

下原の放った銃弾は吸い込まれるようにコアへ

次の瞬間、

バーーンッ！！

ガラスが割れるような音があたりに響き、赤いネウロイのコアは碎け散る

コアが破壊されたことにより、ネウロイはその巨体を光の破片へと変えていった。

「山田先生！！敵大型ネウロイの破壊を確認しました！」

生徒の一人からそう報告される。

報告してきた生徒の声は喜びに満ち溢れていて、今にも泣きだしそうである。

「やったー！！」

「わ、私たち生きてる……」

周りにいる生徒たちも歓喜に沸いていた。

そんな中、ただ一人だけ表情を暗くしている人物が一人

「更識さん、どうかしました？」

「……いえ、なんでもありません。みんな無事でよかったです。」

「そうですね、落とされた子も無事のようにですし、本当に良かったです」
「ええ、そうですね」

真耶の言葉に笑顔で答える楯無ではあったがその胸のうちは暗澹あんたんとした思いだった

(……結局、今回の私たちの戦果は旧型の小型機が6機。しかも彼女たちが来なければ輸送機も守れずあのまま私たちはやられていた。敵もすべて撃墜できず、輸送機も満足に護れなかった……世界最強の兵器が聞いてあきれるわね)

今回の戦果は旧型の小型機が6機。しかもこちらの損害はISが1機である。

幸いコアは無事だったものの、IS一機に見あう戦果じゃなかった。

(いえ、私たちが未熟だった……ということ。この結果に？上

？はなんて言うかしら？ 怒ってまたとんでもない無茶なことをや
るぞとするわね）

己の未熟さを痛感する楯無

そしてある一つの決意をする

その瞳はある一点を見つめる

一点を見据える彼女の瞳には強い決意の光が灯っていた

Ep-04 魔女とIS B part (後書き)

Ep-04 終了です。

ごめんなさい、めっちゃ長くなりました。

なんか、IS学園の生徒たちが嫌な子達に見えちゃいましたね。

でも、あの反応がISでは一般的なんじゃないですかね。

個人的には大将の言いたいことが伝わっていねばと、そう思います。

EP・05 One・Man Air Force

VS

M

どうも、シユウ禅です

EP・05です。

そねどはぶじゆん……

「・・・私には行かない」

吹き荒れる嵐の中、静かに告げる

「先生！！先生がいないと私・・・！！」

一人の少女が叫ぶ

「坂本…… 君のその誰かを… 何かを守りたい… 君のその胸の誓いを果たせるか否かは正直に言っただけには判らない…」

彼女が何をしようとしているのか判っているはずなのに……………

「……………」

俺はそれを止めることができない……

「優刀……」

向けられたその眼は優しく語る

だから……

「少佐……心配しないでください、自分たちが必ず作戦を成功させます」

そんな月並みな言葉しか言えなかった

そして・・・

「うおおおっ！！！」

目の前にはいるそこにはずのない人物

「やめろおおおっ！！！！」

青く光る光の剣この身に迫る

光の剣にこもる殺意・・・

死を覚悟した瞬間、目の前の景色がガラス細工のように崩れ去る

「はあッ！はあッ！はあッ！」

ベットから跳ねるよつに起き上がり、目を覚ました。

周囲を見渡す……

古ぼけたところどころにシミのある壁。そこに無機質で質素な時計がかけられており、時刻は午前7:00ちよつと前を指している。

夜間哨戒に出ていたナイトウィッチを出迎える準備をしているのだ
ろう、外からは朝早くから整備兵たちの活気ある声が飛び交っている

ようつやく現実であることを確認し、息を整えるように長く息を吐く

「はあ、・・・・・・・・くそ、またあの夢か」

今まで何度も見てきた夢だ・・・

いや、夢ではない。

記憶といった方が正確である・・・・・・・・

何回も、何十回も

忘れないと、忘れさせまいと、何度も夢としてあの光景がよみがえ

る。

繰り返される悪夢・・・・・・・・

いい加減見飽きている夢だから、立ち直るのも早く済む。

つい一週間前にも見た夢だ。

この夢を見る原因というのは大体決まっている。

立ち上がり、酷く汗に濡れたタンクトップを脱ぎ捨てデスクに置いてある扶桑国空軍の男性士官用制服に手早く袖を通し、着替える。

コンコンッ

「少佐、起きてらっしゃいますか？ 朝食ができましたので呼びに来ました」

そこへ今日の朝食当番である下原が俺を呼びにきた。

「ああ、分かった。すぐ行く」

いつまでも夢のことを気にしていてもしょうがない。

今日も今日とて片付けなければいけない書類が山のよつにあるのだ。

「よし、行くが」

デスクの上の昨夜見ていた資料を掴み、自室を出る。

……今日の朝食は何だろうか？

上空を飛ぶ二つの黒い点を見つめる俺、ラル、エディータの三人

我々義勇統合戦闘飛行隊の面々は滑走路でただいま模擬航空格闘戦の真っ最中。

であるはずなのだが……

「うん……」

「これは」

「ねえ……」

三人の口からは呆れているとも、驚いているともとれるため息を吐く

そんな彼らの視線の先では

「もらった!」

「く・・・まだまだ!」

義勇統合戦闘航空隊の一番槍、ワン・マン・エアフォースことドミニカ・S・ジエンタイルと・・・

ISオラーシャ連邦代表、更識楯無が苛烈な空中戦を繰り広げていた

「はああああつ!」

楯無は手に持つ巨大なランス、『蒼流旋』に装備されたガトリングガンでジエンタイルに向かって放つ。

ジエンタイルはそれを微妙な緩急をつけて左右に移動することで紙一重で躲しながら楯無に突撃。

近距離でM249のフルオート射撃を放つ。

「はっ！」

それをギリギリで躲し、ジエンタイルにランスの突きを繰り出す。

それを体を捻ることで躲すジエンタイル。

捻った反動を利用しジエンタイルは側面に移動、突きを放ったことでがら空きになった楯無のボディに右手に持つショットガンを撃ち込み、抜ける。

「く……！」

腹部に放たれた一撃で崩れた体勢を立て直し、ジェンタイルの後を追いかける

ジェンタイルの後を追う間も、狙いをつけてガトリングガンを放つがそれを後ろに目がついているかのごとく次々と躲すジェンタイル。

「……………」

ジェンタイルが自身の直線ラインに入った瞬間、楯無は一気に加速、ランスでジェンタイルを貫かんと呐喊する。

「ふっ!!」

しかし、ジェンタイルはそれをバレルロールで躲し、逆に楯無の背

後を取る。

「もらった……!!」

M249とレミニトンM870を楯無に向ける。

「甘いわ!!」

つきだしたランスをそのまま真一文字に薙ぎ払うように振るう。

「なに!?!」

ジエンタイルはその一撃をシールドで防ぐも、その巨大なランスの勢いを殺すことは出来ずに押し負け、吹き飛ばされる

「ちいつー!」

吹き飛ばされた勢いを利用して上昇するジェンタイル

「逃がさない!」

その後を追う楯無。

.....

「へえ、やるじゃないか。彼女」

いつもは軽快な軽口を言っている伯爵が驚嘆の声を漏らす。

「はえ〜すごいね〜」

「ふ、ふん、隊長の方が強いぞ！」

「あ、あはははは……」

上空を見据えていた年少組のハルトマンただ感心し、マルセイユはふてくされた顔をしている。下原に至っては乾いた笑いしか出てこない

そうしている間にも二人の戦いは続く……

そもそもなぜ、IS学園派遣部隊に所属している彼女が義勇統合戦闘飛行隊の隊員であるジエンマイルと模擬戦をしているのか？

話は数日前に遡る……

数日前

「緋村大尉、ボニン少佐が指令室までお越しください、とのことですよ」

昼前、隊のオフィスで報告書と格闘していた俺に連絡士官がそう告げた。

共に書類仕事をこなしていた武子を連れ、何事かと指令室に駆けつけるとそこには温和そうな紳士然とした基地司令アドルフ・ローラント大佐にJG52飛行隊司令、フーベルタ・フォン・ボニン少佐とカールスラントではあまり見かけない東洋人の男性がいた。

「祖国のお客人だ、緋村」

そういつてボニン少佐が東洋人を紹介する。

男性は優刀にニコリと笑いかけた。

「やつほー緋村、久しぶりだね。」

「お、おのだ織田大臣官房、なんでこんなところに!？」

目の前にいる人物に驚く

彼の名前はおのだこうげん織田高顯

扶桑国防省に勤務する官僚であり、扶桑国全軍の任免、給与、懲戒、服務その他の人事その他もろもろを統括する部署の長だ。

織田大臣官房とはある事件で知り合い、扶桑にいたときは一時期彼直属の部下のような形で個人的に任務を渡されることがあった。

近所の溝浚いから、孫の送り迎えに首相夫人の警護まで、個人の趣味から重要任務までやらされた。

性格を一言でいえば食えない狸親父である。

「ずいぶん活躍しているようだね、扶桑国民として僕も誇らしいよ。先日、撃墜数100機を突破したらしいね。おめでとう、現時点で君は扶桑派遣組の中でトップ・エースだ」

「はあ」

「さて、君の活躍に僕たちも答えてあげなきゃと思ってね。今回、君に功四級金鷄勲章を叙勲することに決まったよ。名誉だよ、緋村」

「はあ」

なんで今更……口には出さないものの、内心疑問が残る。

「追って正式に通達があるだろう。授賞式はパリで行う予定だ。各国の大使を呼んだ派手なパーティーだって、楽しみにしていよいよ」

「ありがとうございます」

とりあえず一礼。

まさか本当にこれだけのためにこの人は最前線くんだりまで来たのか？

「さらに君は本日付で少佐に昇進、よかったね」

「はい？」

今、この人なんて言った？

俺が少佐だって？

「あれ？聞こえなかったかしら？ 少佐だよ、緋村」

「い、いえ……あまりにも突然の事でしたので」

「まあ気持ちはわかるよ、何せ前例がない。君の年で佐官なんて誰もいないからね」

「は、はあ」

「まあとにかく君は今日から少佐だこれからもがんばってくれたまえ」

「ありがとうございます」

釈然としないまま敬礼。

「おっと、最後にもう一つ」

「……まだ何か」

「まだあるのか……」

「なんでいやそうな顔するのかしら？ 君って今反抗期？」

「違います、こつもつまい話ばかりですから何か裏があるんでしよう？」

「さすが、緋村鋭いね」

「やっぱり……」

何かあると思ったよ。この人がこんなところにまで来ているんだ、何も無いわけが無い

「今回君の昇進を機に一人君の隊に補充人員をまわすことになった」

「え？……補充人員ですか？」

「いや、なに、こちらとしても君の頑張りには最大限こたえてあげようと思ってるね」

「……で、その補充人員に問題があると」

「うーん、当たらずも遠からずってどこかしら？」

どういふことだ？

「彼女自身はとても優秀だよ、それは間違いない。……ただ」

「ただ？」

「彼女の背後がいろいろとややこしくてね、正直、現場そつちにも迷惑がかかるかもしれないね」

「うえ……そうなんですか？」

「そ、文武両道、容姿端麗、座れば牡丹、歩く姿は何とやら、きれいなバラには棘があるってね」

「なんですかそれ……」

「とにかく明後日の午後には着くんじゃないかしら？ ま、詳しい話は彼女から聞いてちょうだいな」

- - - - -

というわけであの得体のしれない狸親父から彼女、更識楯無を押し付けられたというわけだ。

更識楯無

IS学園一年生でオラーシャ連邦代表の扶桑出身で自由国籍権を持つ16歳

今回、どういうわけかうちに配属されることとなった

なぜ彼女が配属されたのか

「ISとウィッチの連携運用法の確立と運用データの収集」というのが目的らしい。

何はともあれうちに配属されたからには戦力として数える。

物は試しに模擬戦をやらしてみたのだが……

「すごいな」

ラルが素直に驚嘆の声を漏らす。

「ええ……切れのある機動、的確な状況判断、遠近の兵装選択、回避と防御のバランス。どれをとっても高いレベルでこなしています」

「代表は伊達じゃないって事か」

ふと、更識の方を見続けているとふと違和感を覚える

「あれ？……」

「どうかしたのか？ 優刀」

「あ、ああ……いや、なんでもない」

違和感の正体がなんなのか必死に頭を捻って考えるが、結局その違和感の正体がなんなのか解らなかつた

装甲している間にも二人の戦いは激しさを増す。

「見ろ、決まるぞ」

「はあ！！」

楯無はガトリングガンを放つ

「ちいつ！！」

それをジェンタイルはロールして躲しながら接近、楯無もジェンタイルに呼応するように呐喊していく。

そのさなか、楯無は蛇腹剣「ラストイー・ネイル」を展開、ジェン
タイルに向けて振るう

「ちいつ!!」

その攻撃をシールドで弾き返すジェンタイルだが、突撃の勢いはそ
がれてしまった。

「貰ったわ!!」

そこヘランスの突きがジェンタイルを襲う。

楯無は勝利を確信した

が、ジェンタイルは思いがけない行動に出る。

「まだだっ!!」

ジェンタイルは左手の甲の部分にシールドを展開、迫るランスの
一撃を裏拳の要領で弾き飛ばす。

「うそ!?!」

さすがに楯無もこの行動は予想しておらず、啞然とする

「もらった!!」

その隙を逃すジェンタイルではない。

楯無の懐に入り込み、その拳を振りぬく

「ふっ！」

その一撃は楯無のISのシールドを破壊し、楯無自身に襲い掛かる。

「ああっ!?!」

連打連打連打連打連打連打連打連打連打連打連打連打連打連打連打連打

反撃の隙を与えまいと次々に拳を楯無へ叩き込む。

「いれで」

拳にすべての力を込める

「終わりだ!!」

渾身の右ストレートを楯無に叩き込む

パライイイインッ

シールドが砕ける

ジエンタイルの右拳は楯無の腹部へと吸い込まれ……

「そこまで!!」

ジエンタイルの拳は楯無の腹部に当たる寸前で止まっていた

審判をしていた武子が模擬戦終了のホイッスルを鳴らす。

「勝者、大将」

武子の声が空に響いた

Ep-05

One-man Air Force

VS

MY

意外にも早く来てしまいました。

ウィッチ VS IS

ここ最近、ばつちり大將は活躍してます。

それに比べて武子、影薄いの何の……

好きなんですけどね、なかなか難しいです。

次は他の子を書きたいなと思います。

では次回。

EP・06 聞いた百より見た一つ（前書き）

どうも、シユウ禅です。

EP・06です。

では、またね

EP・06 聞いた百より見た一つ

「加藤中尉、ジエンタイル中尉、更識少尉、お疲れ様でした！」

模擬戦が終わり、下原が降りてきた三人にスポーツドリンクを渡していく

「ありがとう、定子ちゃん」

「助かる」

「ありがとう」

「それで？ どうだった大将？」

「ああ」

大将はいくらか考え込むそぶりを見せた後、その口を開く。

「問題ない、十分に実戦に出れる。」

「そうか」

その言葉を聞き安堵する

「他のみんなはどうだ？」

「問題なし」

「右に同じく」

「問題なしよ」

「いいよ」

「い〜んじゃない？」

「少佐がそういつなら……」

「はい、賛成です！」

「いいわ」

「というわけだ、改めてよろしく頼む」

そういつて楯無に俺は手を差し出す。

「ええ、よろしく、少佐」

そういつて楯無はその手を取り、握手を交わす。

「よし次は2対2の模擬空中戦を行う。ラル、クルピンスキー、ロスマン、ハルトマン。準備しろ!!」

「了解!!」

俺の号令のもと、四人は自分のストライカーユニットに向けて駆けて行った。

少ココト・・・

「隊長、少し聞いてもいいかしら？」

空中で繰り広げられる模擬戦闘を見ていると、いつの間に隣に来ていたのか更識が俺に話しかけてきた。

「なんだ？」

「単刀直入に聞いわ………私たちISをどう思う？」

「ずいぶん唐突でストレートだな」

「新参者ですから、早いうちに部隊の皆とは仲良くなっておきたいからね、私たちIS関係者をウィッチの子達がどう思っているか知っておきたいのよ」

「そうか」

「それに私、あなたに興味があるのよ」

そういって下から人の顔を覗き込む楯無。

「俺に？」

視線は今、空中で模擬戦しているラルたちに向けたまま答える

「そう」

そうやって元の位置に戻る更識

「扶桑国空軍緋村優刀少佐。世界でも数少ない男性のウィッチで扶桑海事変の頃からネウロイとの前線に立ち続けている扶桑の誇るトップエースの一人」

空に視線を戻し続ける更識

「欧州がネウロイの脅威に晒されると遣欧艦隊の航空部隊隊長に任命され欧州戦に参加。欧州に来てからの活躍は目覚ましく、オストマルク撤退戦の活躍から、《Weib Drache》と呼ばれるようになった」

一拍おき

「そんな誰よりも戦場を知っている君がIS私たち操縦者のことをどう思っているのか知りたいの」

まさかこんなにストレートに聞いてくるとは

「わかった、答えてやる」

「ありがとう」

そういつて微笑む楯無。

一呼吸おいて俺は口を開く

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

「わかった、答えてやる」

彼がそう答えた時、私は少し体を強張らせる。

それはそうだろう

自分は今とんでもない事を聞こうとしているのだから

分かり切った事を聞いていると自分でも思う。

前線にいる軍人がIS関係者を快く思っていないのは分かり切っていることなのだ。

それはしょうがないと思っている。

私たちのような戦場を知らない者が、我が物顔で好き勝手やっているのだ

それを好意的に受け止める、というのが無理な話だ。

だが、私はあえて聞く

今日の前にいる、数多の戦場を駆け抜け、欧州の人々から畏敬の念を込めて？扶桑の白き龍？と呼ばれるこの少年に……

彼と初めて出会った、あの護衛任務を生涯忘れはしないだろう。

彼の戦いを見て私は身震いした

キレがあつて正確で華麗な航空戦技

的確な部隊指揮によつて、瞬く間にネウロイを殲滅したあの後ろ姿
は今でも瞳の奥に焼き付いている

「ありがとう」

私は緊張を悟られないように彼に微笑む。

彼が一呼吸おいて口を開く

「別に」

「へ？」

「別に何とも思っていない」

視線を逸らさず答える

「へ？」

予想外の言葉にあっけにとられる。

「そ、それってどういう意味かしら？」

「意味ってなんだ？」

「ほら、私が言うのもなんだけど、私たちってある意味、女尊男卑社会の象徴みたいなものじゃない？ そんな私たちのことをどう思っているのかな・・・て」

彼の言葉の真意を解りかね、何とか意味を聞こうとする

「ああ、別にどうとも思っていないぞ・・・いや、正確にはそ

の括りで判断する？意味？がないって思ってる、と言ったところか」

言ってることの意味が解らない

「え、ええつと……ごめんなさい、分かるように説明してくれる？」

結局、私は理解できず彼に説明を求める。

「そうだな……例えば、俺達扶桑人は世界の人からはどう思われているか知っているか？」

「ええつと……確か？扶桑人は口数が少なく無表情。自己主

張しないで、言われたことだけを淡々とこなす？ だつたかしら？」

「ああ、世界から見た扶桑人像はそうらしい、でも扶桑人全員がそうか？」

「ちがうわね……」

自分の幼馴染の姉妹をを思ひだし、否定する

確かに姉の方は扶桑人像のまんまであるが、妹の方はマイペースきまわりなく、扶桑人像からは遠くかけ離れている

「口数が多い奴もいるし、表情豊かな奴もいれば、自己主張が激しい奴もいる……全ての扶桑人が世界の人が持つ扶桑人の印象の人物ではないわけだ」

「確かに……」

「前線にいる兵の持つIS操縦者の印象と言えば？ いつもは威張っているくせに、いざというには役に立たない御嬢様？ と言った処だろっ」

「う……」

やはりそうかと少し落ち込む

分かっていたことだがそれでも少し胸が痛む

「だが、実際は全員がそうなのかって言われるとそうでもない。中にはちゃんとした連中もいる」
中

彼は言葉を続ける。

「要するにIS操縦者であるからと言って？更識？個人を嫌う理由にはならない。付き合って、話してみなければその人がどういう人物なのかなんて分かりはしないしな」

「え……」

「所詮、ISを使えるかどうかなんて、個人の才能の一個に過ぎない。大事なのはISを使えるかどうかじゃない…… その人間が何を思い、どう行動するか？ だと俺は思っている」

「……」

彼の言葉に私は何も言えなくなっていた

す……

その一言しか思いつかなかった。

『所詮、ISを使えるかどうかなんて、個人の才能の一個に過ぎない。大事なのはISを使えるかどうかじゃない・・・ その人間が何を思い、どう行動するか？ だと俺は思っている』

彼の言うとおりだ

大事なのは力を持っていることじゃない。

何を考え、どう行動するかだ。

それによって人は決まる……

例えISを使えようが、行動した結果が評価されなければ、人は評価されない。

彼の横顔を見る

その表情からは彼が何を考えているのか読み取ることはいできない。

「ねえ、」

「なんだ」

「いいえ、ごめんなさい……なんでもないわ」

私は？あること？を彼に聞こうとしたが……やめた。

少なくとも私はまだ？それ？を聞けるほど、彼とは親密な仲ではない。

「そうか」

深くは追求してこない。

彼はなぜ戦っているのか、何のために、どうして？

聞いてみたいとも思った。

けねど、

一番聞いてみたいと思った事は……

？ブリュンヒルデ？が憎いか・・・

その彼の青く澄んだ眼は今も空の仲間たちを見つめ続けている

その青い瞳に、この世界はどう映っているのか……………

今の私には分からなかった

EP・06 聞いた百より見た一つ（後書き）

やっと、メインになりました

今まで主人公らしきこと何もしてません、優刀。

これから、ちゃんと主人公をさせたいと思います。

この分だとIS組、いつだせるんでしょうね

それと、感想を書いてくださった方々、貴重なご意見の数々ありがとうございます。

皆様から頂いたご意見を参考にこれからも頑張って書いていきたい
と思います。

皆様からご指摘いただいた一夏の処遇なのですが、まだ決まってい
ません。

出すなら性格は原作一夏のままどうにか出したいとは思っています
が。

いっそのこと……だすのやめようかな？

それを含めて検討中です。

感想やご要望などは随時受け付けておりますので、気軽にお願いします。

以上シユウ禅でした、ではまた次回！

EP・07 国家代表（前書き）

Ciao! というわけでどうも、シユウ禅です

今回は割と技術的な話になっています。

それではどうぞー！

「緋村少佐、少佐はお昼どうなされますか？」

大将对更識戦の後、何回か模擬戦を行い太陽が我々の頭上まで上がってきた頃に訓練は終了。

周りにいた整備中隊の整備兵がストライカーユニットを格納庫へかたづけ隊員が隊舎に戻っていく中、本日の食事当番である下原が訪ねた。

「そうだな・・・悪い下原、これから整備班長のところ行かなきゃいけないから、何か適当につまめる物を作って置いてもらえるか？」

「分かりました。じゃあサンドウィッチか何かでいいですか？」

「ああ、頼む」

「ごめんなさい定子ちゃん、私の分も作っといってくれる？」

す

るといつの間にか人の隣に来ていた、フェデリカが申し訳なさそうに下原に頼んだ

「え……中尉の分もですか？」

「ええ、これから私、格納庫にこもっちゃうからね」

「分かりました」

「ああ済まない下原、私も頼む」

「ラル中尉もですか？」

「ああ、私は自分の銃のメンテをしようと思ってな。」

「分かりました。作ってテーブルの上に置いておきますね」

「ああ、頼む」

下原はそついでと頭をペーリと下げ退舎へと向かっていった

「定子ちゃんいい子よね」

去っていく下原の背中を見ながらフェデリカは呟く

「ああ、料理洗濯掃除が出来て器量よし、まさに扶桑撫子の鏡だな」

ラルがうんうんと頷き同意する

下原定子、扶桑国空軍軍曹で義勇統合戦闘飛行隊に所属する新人三人のうちの一人。

元はリバウ航空隊所属のウィッチで竹井や坂本の下で経験を積んでいたが、義勇統合戦闘飛行隊発足時に？索敵能力の高い夜間戦闘もこなせる優秀なウィッチ？として引っこ抜いてきた。

戦闘技能はハルトマンやマルセイユに一步劣るもの何事もそつなくこなし、大人しい性格ではあるが他人との協調性も高い事から組む相手を選ばない。

敢闘精神旺盛なウィッチが多いこの部隊では彼女たちの背中を守る心強い優秀なウィッチである。

「ホント、将来いいお嫁さんになりそうだな」

そう言って二人に同意する

「・・・・・・・・へえ」

「・・・・・・・・ほお」

なぜだかわからないが二人は意地の悪い笑みを浮かべ、近所の主婦の井戸端会議よろしく、ひそひそと話し始める

「聞きました奥様？ 彼つてばまた無意識に言ってますわよ・・・・・・・・」

「

「まったくこれだから困るんだ扶桑のウィッチは・・・・・・・・」

・・・・天然ジゴロとか、女の敵とか聞こえるが、俺には聞
かない

「まあ、彼女の料理は後のお楽しみということでしたと行こう」

いつまでも滑走路のど真ん中に立っているわけにもいかないの
でひそひそ話している二人を促し格納庫へ向かった

「それにしても彼女すごいわね」

向かってる最中、フェデリカが何ともなしに呟く。

「彼女？……ああ、更識か」

「ええ……彼女、あの年でオラーシャ連邦の代表よ？しかも自由国籍権を取得してのオラーシャ代表……ただモノじゃないわね」

「そんなにすごいのか？ 彼女。」

いまいちその凄さにピンとこないラルが訪ねる。

「ええ・・・元々ISのテストパイロットって、そのISとの相性がいい人物を私たちの年代から選ぶの」

「そうなのか？ 普通テストパイロットと言えば経験豊富な高い技量を持つベテランがやるものだろ」

「ええその通りなんだけど・・・ISの場合それができないのよ。アラスカ条約のせいで」

まったくばかばかしいわ、と呆れたようにため息をつくフェデリカ。

「アラスカ条約でISを保有する世界各国はISに関する情報の全面開示を義務付けられているの。例え開発中の機体であろうが、開発中止を言い渡されて廃棄される機体だろうが常にそのデータを開示しなくちゃいけないわけ」

「なるほど・・・」

「兵器開発において開発中の機体のデータを開示するなんてご法度他国に技術を盗まれるばかりか兵器そのものの優位性が失われるって訳か・・・」

「そういうこと」

「確かに・・・」

フェデリカの言葉に同意する。

いつの時代も情報というのは大事である。特に戦争においてはそれが顕著だ。いつどこどこに敵がせめて来るとか、敵の兵站の場所はどこにあるとか分かっていれば対策の取りようがある。

たった一つの情報が多くの人を救うこともあれば、命を奪うこともあるのだ

その中でも新兵器開発においては情報の漏えいというのは命とりである。

新兵器開発において一番重要なことは敵の兵器より優れている兵器であることが絶対条件である

その絶対条件が情報漏えいによって対策を取られ優位性を失ってしまえば終わりだ。

実際、過去の戦争では敵側に味方側の兵器の情報が洩れ、対策を取られてしまい劣勢に立たされた例は多々ある

「そこで原則あらゆる国家から干渉を受けないIS学園でデータを取ることにしたのよ。あそこなら少なくとも3年間は誰も生徒に手出しできない。その生徒が得たデータも叱り、国家は生徒の同意がないものはそのデータに触れることができない。」

「なるほどな……」

「ま、要するに大勢の専用機持ちと呼ばれる代表候補生は高い技量を持っているからテストパイロットに選ばれたわけじゃなくて、少しIS適性が高かったから選ばれたわけよ」

「でも、更識は違うわけか……」

「ええ、代表候補生は国家または企業が選ぶけど、彼女の場合その所属を自由に選ぶ事が出来るの。」

「自らがその所属を決めることができるか……すごいな」

「ええ、よっぽど操縦者の技量が高くないと選ばれないわ」

そんなふうに話をしていると義勇統合戦闘飛行隊が使用している第三格納庫の前につく。

中に入ると左右にストライカーユニットが俺たちを出迎えるように並んでいた。

ストライカーユニット……

ウィッチ達の魔法力を魔導エンジンと呼ばれるもので増幅し、駆動する飛翔ユニット。

発表されたのはISと同時期であった為、その性能差から当初、航空戦力の主力となることは敵わなかったが、使えるのがウィッチのみという制約があるものの、男子でも女子でも魔法力があるものなら扱え、何より既存の兵器よりも安いコストで生産出来、ISには及ばないものの優れた機動性を発揮した為、開発が細々と続けられた。

その後コストパフォーマンスに優れた兵装として、ISの予備兵力の名目で少しずつ配備され始めた。

そしてネウロイとの戦争が始まるとISの兵器としての欠点が次々に露呈、その立場は一気に逆転し、現在ではネウロイとの航空戦の主役としてこの大空を駆けている

「土田曹長、ストライカーユニットの整備要望リスト持ってきまし

た

「わざわざすいません、緋村少佐。ご足労いただきありがとうございます」

中に入り、ストライカーユニットの整備をしていた土田曹長にリストを渡す。

「班長、奥借りるわね」

「ええ、構いませんよ」

フェデリカは曹長に許可を取るとユニットが整備されている場所のさらに奥の少し広まったスペースへと駆けていく。

そのスペースには大きな台座が二つあった。

そのうちの一つの前にフェデリカは立つと右腕を突き出し、目を閉じ右手のバングルに意識を集中する

「行くわよ、テンペスタ」

パアツ、とフェデリカの周りを光が包む。

その光が晴れると、そこには赤い装甲を纏ったフェデリカがいた。

「いつみてもすごい光景だな」

ラルは今の光景に感心したように言葉を漏らす。

それはそうだろう。

人が光に包まれたと思ったらそこに機械を纏った人間がいるのだ。
驚かないわけが無い

第三世代型IS

『デンベスタ・ロッシン
赤い嵐』

ロマーニヤ公国が開発している第三世代型ISでフェデリカの専用機。

既存のISよりも一回り小さく細身で、更識の専用機、ミステリアス・レイディ霧纏の淑女と同様に他のISに比べて装甲が少ない。

全体的な印象としては航空機の印象で特に脚部と腕部装甲は鋭角的なフォルムで無駄のないすっきりとした形をしている。

脚部の側面には可変式の折りたたまれた翼がついており、ストライカーユニットの名残とも見れる。

ひときわ目を惹くのは両肩に浮かぶと非固定浮遊部位《アンロック・

ユニットとスカートアーマーだ。スカートアーマーは後方にストライカーユニットに酷似した二つのブースターが伸びて機体が高機動型なのがよくわかる。

アンロック・ユニット
非固定浮遊部位ブースターからは従来の航空機の翼のような翼が伸び、折れたたまれている。その姿はいつか空を駆ける日が来るのを待つ猛禽類もうちきこのようだった。

「すごいわね……これがドツリオ中尉のISS?」

ふと後ろから声がして振り向くといつの間にか来ていたのか更識が立っていた

「ええ、そうよ。第3世代型ISSテンペスタ・ロッシン『赤い嵐』よ。」

そういつてフェデリカは台座にテンペスタを預けると装着解除してひよいとISから飛び降りる

「もしかして機体は完成しているの？」

「ええ、？基本的な部分？はもう完成してるわ。けど特殊兵装の方がまだよ」

「そう、ちなみにその特殊兵装って？」

「教えないわ」

きつぱりと言いつ切るフェデリカ。

「そう、残念」

とはいうものの、その答えを予想していたのか更識はあまり残念そうな顔をせず、クスリと笑うだけだった。

「当たり前でしょう？ いくら同じ部隊の仲間とはいえ、他国の代表にそこまで？ 無条件？ で教えるわけにはいかないのよ」

さすがロマーニヤ公国の代表候補

相手には不必要な情報は与えないというわけか。

俺たちの部隊は様々な国の人間が一致団結して日夜戦い続けている。

けれど、決してお手手つないでみんなで仲良くしましょーうという集団では決してない。

みな共通の目的を持って集まった者たちで、強いきずなで結ばれていると思っっているが、それでも必ず超えてはならない一線というものが互いにある。

「それに、あなたの機体も同じようなものだと思うけど？」

「私の機体も？」

そういつてフェデリカは更識の方へ目を向ける

「あの機体、ミステリアス・レイディ霧纏の淑女も特殊兵装の方がまだ完全に出来てはいないんじゃないかしら？」

「その根拠は？」

「機体の装甲が少なすぎるのよ。いくらISに絶対防御があるから

と言って、装甲のないところに絶対防御でも防ぎきれない攻撃が直撃すれば致命傷になる。それなのに敢えて装甲を減らしているのなら、何か別の方法で機体を守るすべがあるはずよ」

更識はフェデリカの言葉を黙って聞いている

「最初は防御を無視して機動にリソースを割り振った大胆な設計なのかと思っただけど、そういう設計ならもっと極端に機動性が高い筈けどさっきの模擬戦では確かに高機動だったけど極端な速さではなかった。だとすれば、左右に浮遊するクリスタル状のユニットが自立して防御シールドを展開をするのかと思っただけどそれも違った。」

「ああ、そうかそうだったのか……違和感の正体はそれだ」

先ほどの模擬戦を見て引っ掛かっていた違和感の正体がわかった。

あのクリスタルだ。

あの時はただ更識の技量に目が云っていたが、確かにあのクリスタル上のものは特に何もせず浮かんでいた。

「特殊兵装が出来ていないって考えればすべて納得いくのよ。あのクリスタルは何もしなかったんじゃない、何もできなかった。そして、あなたの機体の特殊兵装はたぶん、攻撃にも防御にも転用できる物なんじゃないかしら？」

そういつて言葉を締めるフェデリカ。

話を聞き終えた更識は……

「はあ、参ったわ……降参よ。まさかたった一度の戦闘でそこま

で見破られちゃうなんてショックだわ」

降参とばかりに両手を上げる更識しかし、その顔はあまり残念そうではなかった

「正解よ、ドツリオ中尉。まだ私の霧纏ミスデリアス・レイティの淑女は特殊兵装の方が出来ていないの。そして特殊兵装も攻撃にも防御にも使える機能つていうのもご推察の通り」

「そう、よかったわ当たってて」

にっこりとほほ笑むフェデリカ

「でもこれじゃフェアじゃないわ、あなたの機体の兵装も教えてくれないと」

「いいけど条件があるわ」

「条件？」

「そ、条件」

そういつてフェデリカはニヤリと口端を釣り上げる

「一人より二人、三人より四人……お互い、特殊兵装の開発に戸惑っているみたいだし、ここはロマーニヤ、オラーシヤ仲良く共に開発と行こうじゃない」

EP-07 国家代表（後書き）

今回はフェデリカさんの話でした。

彼女はオリキャラって思った方には申し訳ないですが、彼女は完全なオリキャラではないです。

一話のあとがきで話した通り、この作品に出てきているウィッチの多くは島田フミカネ氏のサイトに書かれている `World Witches` が元ネタです

当初は501のメンバーでISとクロスさせようとしたんですが、いくらなんでもSW一期開始時の戦争が苛烈を極めている最前線にいきなり原作の一夏や篝たちが乱入するのは話の整合性が取れず、めっちゃくちゃになるだろうなと思いました。

個人的に凝り性で話に一定の整合性がないと嫌なんです

詳しいことは第零章が完結した際に書くつもりですがそんなこんなでアニメのキャラクターはほとんどが出演しないという事態になり、代わりに大将や、フェデリカといった設定上にしか存在しないキャラが出演することになりました。

そもそもSWに出てくるキャラクターは第二次世界大戦で活躍したエースパイロットをモチーフにしており、その数だけで結構います。

実際元になったパイロットたちもそうですが、設定だけにしとくにはかなりもったいないぐらい彼女たちは魅力的なキャラです。

そんな彼女たちが活躍したりする姿が見てみたいと思った事もこの作品がこういったオリジナル要素の多い作品になった一因でもあります。

二つの作品のエピソードはいずれちゃんと言いますが、少なくとも第零章はオリジナル展開で進んでいきます。

ちゃんとここで書くべきことを書いておかないと、後で説明不十分なことがいろいろ起きてしまいそうなので。

第零章は後の章を楽しむための土台だと思ってください。

次回から二、三話は彼女がメインの話になるかもしれません。

ここ最近はISの悪い点の指摘ばかりしか書いていなかったので、今後はもう少し彼女たちウィッチを活躍させようかなと思っています。

彼女たちのこの作品での設定などは近いうちに上げようかなと思っています

最後になりましたがご意見、ご感想、評価などお待ちしております

以上シュウ禅でした

どうも、シユウ禅です。

ウィッチ達の使っている機材が知りたいというご意見がありましたので、登場人物の紹介を作りました。

とりあえず、今までメインまたはサブとして出てきた子達だけです。

登場人物紹介

緋村優刀

年齢 15歳 誕生日 6/20
身長 175cm 階級 扶桑国空軍大尉

概要

この作品の主人公。

世界でも数少ない男性のウィッチ。

扶桑海事変より参戦しており、同事変のエースの一人。

性格は穏やかでどんなときもあきらめない芯の強さを持つ。

扶桑刀による近接戦闘能力が得意でその腕前は扶桑でもトップクラス、魔力コントロールも超一流。

部下を束ねる統率力に優れ、戦場では常に冷静沈着、優れた洞察力と柔軟な思考を持ち合わせた指揮官としても優秀。

真面目で事務仕事も極めて有能ではあるが、堅物ではない。

ここ最近^{ワーカー・ホリック}は補給物資の調達に奔走しており、仕事中毒になりつつあるらしい。

容姿は艶やかな黒髪だがツンツンにはねている。蒼く澄んだ瞳が印象的な少年。

戦闘時は制服の上着を脱ぎ、魔法繊維で編みこまれた白い羽織を羽織る。

ウィッチの義姉がいる

ポジションは前衛

固有魔法

「大気操作」

ハルトマンと同じ自身の魔力で大気を操ることができる。

しかし、その威力は桁外れで、大気中の魔力を操作することによって雷を発生させることも可能。

(その場合、魔法力の消費も比例して多くなる)

使用武器

M G 5 4

扶桑刀(陸奥守吉行)

ストライカーユニット

十二試艦上戦闘脚

メツサーシャルフ B f 1 0 9 E

(扶桑海軍にて扶桑に持ち込まれた新型エンジンDB - 6 0 1搭載の先行試作型のうちの一機。)

-
-
-
-
-

加藤武子

年齢 1 5 歳 誕生日 9 月 2 8 日

身長 1 6 3 c m 階級 扶桑国空軍中尉

概要

扶桑空軍きつての名指揮官。

欧州の大規模怪異発生の前年に起きた扶桑海事変において、江藤敏子中佐による指揮の元、優刀と共に飛行第一戦隊に所属し勇戦。江藤中佐の下で指揮官としての経験を積む一方で、自らも扶桑刀による居合い技「無双神殿流・空の太刀」を用い2機のネウロイを撃墜している。

この頃から既に個人戦績には興味がなく、部隊単位での戦術を模索していたようである。

同隊に所属した穴拭智子少尉（当時）とは戦友。また、加東圭子少尉（当時）を加え「扶桑海三羽烏」と賞された。

基本に忠実で堅実な戦法を重んじる反面、欧州の機材や戦訓を積極的に吸収するなど、進取の気性も持ち合わせている。

穏やかな性格だが、優刀曰く、「怒らせるとやばい」らしい

事変後、優刀の副官として共に欧州へ派遣され、彼を陰に日向に支えている部隊の縁の下の力持ち。

最近の悩みはどっかの誰かさんにストライカーユニットが日々壊されること

ポジションは後衛

使用武器

扶桑刀

MG54

ストライカーユニット
長島飛行脚 キ43 一式戦闘脚 隼

固有魔法

「三次元空間把握」

- - - - -

グンデユラ・ラル

年齢 15 歳 誕生日 3 / 10

身長 169 cm 階級 カールスラント空軍中尉

概要

義勇統合戦闘飛行隊に所属するカールスラント空軍ウィッチ。
はさばさばした姉御肌で、どんなに厳しい状況でも笑みを忘れずに
周囲を安心させる豪胆さを持っている。
見越し射撃の名手で、芸術的な空戦技能を持つ。
また指揮官としても優秀で、以前はJG52の中隊長をしていた。

義勇統合戦闘飛行隊では主に前衛を担当

使用武器

MG54

ストライカーユニット
メッサーシャルフ Bf109E (黒の13号機)

- - - - -

ドミニカ・S・ジエンタイル

年齢 15歳 誕生日 12/6
身長 174cm 階級 リベリオン合衆國中尉。

概要

リベリオン空軍の精鋭、第8空軍出身。
気怠げな振る舞いが目立つが、その実は即断実行、意気と情熱の熱血魔女。
抜群の体力と動体視力を持ち、それは戦闘や趣味のボクシングでも遺憾なく発揮されている。
戦闘スタイルは単純明確、敵を見たら突っ込んで、撃って、落とす。

義勇統合戦闘飛行隊では主に遊撃を担当

使用武器

レミントンM870

M249

デザートイーグル50AE

S & a m p ; W M 5 0 0

ストライカーユニット

ノースリベリオン P - 5 1 B (3 9 - 8 6 9 1 3 号機)

-
-
-
-
-

フェデリカ・N・ドットリオ

年齢 1 5 歳 誕生日 4 / 2 4

身長 1 6 6 c m 階級 ロマーニヤ空軍中尉 (赤ズボン隊

? パンタローニ・ロツシ?) 書類上はその他三軍から独立した指揮権があるロマーニヤ公室直属精鋭部隊。

概要

ロマーニヤ公国のウィッチ。機械好きで技術者を志望し、ストライカーユニット技術者を目指し軍でストライカー等の研究に従事していたが、後に魔法力が発現し、試験的に受けた飛行訓練で高い空戦ウィッチとしての適正が判明。技術学校から士官学校に入校し直し、

航空ウィッチへの道を進んだ。

技術職へのこだわりから、正規教育を受けて少尉に任命された後、戦闘部隊には入隊せず民間メーカーのテストパイロットとなった。そのメーカーがIS開発も行っているメーカーで、技術者として興味があつたのか、ISをふとしたきっかけで触ってしまった。その際高いIS適正が発覚しそのままISのテストパイロット、代表候補生へと駆け上がった。いった。

明るく陽気な性格だが冷静な一面も持ち合わせており、要所要所で確かなアドバースを行う。

余談だが、赤ズボン隊在籍時、前線への戦意高揚等の目的でウィッチの「せくしーカレンダー」を企画。

「高揚し過ぎちゃうから危ない」という理由でロマーニヤ公からやんわりと止められた。

これに対し一部の過激派青年将校の間でクーデターが計画されたという噂がある。

義勇統合戦闘飛行隊では遊撃（ジェンタイルの二番機を担当）

使用機材

M G 1 5 1 / R

ストライカーユニット

ファロットG55チエンタウロ

IS

第三世代IS

『デンススタ・ロッシン赤い嵐』

オリジナル武器紹介

MG 54 機関銃

カールスラント軍が正式採用した最新機関銃。カールスラントの名銃ラインメタルMG 42に連なる機関銃で分隊機関銃から車載用に至るまで幅広く使用されている。優刀や武子はその性能の高さから自国製の機関銃よりこちらを使用している。優刀曰く？こっちの方が性能がよくて、デザインが好き？らしい

(デザインはMUV - LUVオルタの戦術機 EF - 2000タイプ
フーンの装備、Mk - 57中隊支援砲)

MG 151 / R 機関砲

ウィッチが使用する専用の機関砲。ウィッチはもともとあまり重量のあると武装が持てないということが問題視してされており、それを克服するために開発された。元は第二次世界大戦の航空機に搭載されていた機関砲、MG 151を現在の技術で再設計し、ピストル

グリップや電気発火式のトリガー、サブグリップ等を装着し手持ち式に改修した。型式番号のRは？再生？の意味

というわけで、登場人物紹介でした。

いかがでしたか？

この登場人物紹介が作品を面白くする隠し味となってくれれば幸いです。

あと、劇中で彼女たちが使っている武装なんですが、一部の子達は第二次世界大戦中の武装をそのまま使っていました。

ごめんなさい、作者の調査不足です。

後、ストライカーユニットなんですが、原作通り第二次世界大戦中の機体をモデルにしています。

もちろん性能自体は2039年代の技術で作られているため原作とは比べ物にならないほど高性能ではありません。

これは本篇に入れる必要のない、比較的どうでもいい作者の完全な裏設定なんです、

白騎士とストライカーユニットがその性能を比較された際にある一人の試験官が、「ISとストライカーユニットではF-22？ラプター？とゼロ戦くらい差がある」と言われた事に腹を立てた扶桑のストライカーユニット開発陣が後に扶桑軍が正式採用する際、意返しにゼロ戦よりも前の機体、96式艦上戦闘機をモデルにした

96式艦上戦闘脚を開発したという事がきっかけで、軍部から戦闘機の活躍の場を奪った最新鋭とされるISへの皮肉と、もう一度戦闘機が大空を舞う日を夢見て、過去の名機の名前を付けるといった慣習が世界に伝わった、といった裏設定があったりします

まあ・・・実際どうでもい話なんですけどね

現行のラプターとかF-2とかもスタイリッシュでかっこいい良くて好きなんです、ああいう第二次世界大戦の機体には今の機体にはない、古いが故のかっこよさがあったて好きです。

時期的にはちょっと悪いかなとも思いましたが、少し作者の息抜きも込めて作りました

引き続き、ご意見ご感想をお待ちしますので、ガンガン送ってきてください。

作者の励みになります。

以上シュウ禅でした

EP・08 JASFT(前書き)

どうも、シユウ禅です。

今回もフエデリカさん回です

それではごっげ

「ちょっと、待てえっ!？」

フェデリカはとんでもない条件をつきだしてきた。

「何かしら優刀？」

さすがに今の話は部隊の指揮官として看過できない話だ

「お前、自分が言ってることの意味わかってて言ってるんだよね！？」

「ええ、そうよ。当たり前じゃない」

「それならいいけど、一応俺にも分かるように話してくれるか？
場合によってはさすがに俺一人でどうにかできる問題じゃなくなる」

「ああ、ごめんなさい。あまりに突飛過ぎたわね」

さつきまでテストパイロットやら情報がどうやらの話をしていた直後の話だ。

普通に考えればいい手かもしれないが、二人は国家代表という国を背負っている人物たちだ。個人がどうこう、というレベルの問題じゃない

「では説明するわね・・・まず第一に私が使っている機体が欧州統合防衛計画『イグニッション・プラン』の次期IS主力機選定のトライアルに参加しているのは覚えているわよね」

「ああ、そういえばそうだったな」

そういえば彼女がこの部隊に配属された当初、そんな説明を受け

た記憶がある。

「今の所、他にトライアルに参加しているのがブリタニアのティ
アーズ型と、カールスラントのあの？アホ部隊？が使っていたレー
ゲン型の二つ」

「……………あいつらか」

「……………」

フェデリカの言葉に一瞬嫌な記憶がよみがえり、俺とラルは顔を
歪ませる

そんな俺達の事を無視しフェデリカは話を続ける

「で・・・今のところ特殊兵装の開発に一步リードしているのがブリタニアのティアーズ型モデルで言われているんだけどはつきり言って何処の国もいまだに実用化の目処が立ってないの」

「なるほど・・・で、お前は二つの国を出し抜いて先に特殊兵装を完成させて、次期主力機に採用させたいって訳か」

フェデリカの言いたいことが解ったのか納得したという顔をす
ラル

「ちがつわ」

ラルの言葉を即座に否定する

あ、ちょっとラルがふてくされた

「私自身もそうだけど、ロマーニヤ軍と開発メーカーはそこまで今IS開発に本腰を入れてるわけじゃないのよ。」

「……その割には毎日いじっている気がするが」

ちよっとぶすっとしていゝ、珍しいな

「ラル拗ねるなよ。似合わない「フンっ!!」「っイタあっ!?!」

ゲシっ!!

思いつきり足を踏んづけられた

「はいはい、二人とも夫婦喧嘩は後でやってね……で話を戻すけど、はっきり言ってこれから先、欧州はIS開発には力はいれられなくなると思うのよ」

「ま……まあ、そうだろうな」

踏んづけられた足をさすりながら考える。

今の現状で金が馬鹿みたいにかかるIS開発を強行しようなんて考える国はまずないだろう。

それ故に、各国のIS開発部門やら政府から助成金をもらっている会社は何かISに戦果を上げさせ、開発の凍結を防ごうとしているのだろう。

……おかげで前線の俺たちはいい迷惑だが

「じゃあ、なぜお前はそんなに急いで特殊兵装を完成させようとしているんだ？ 聞いている限りだとあまりイグニッションプランに乗り気じゃないみたいだが？」

「個人的にイグニッション・プランでどこの国のISが選ばれようが興味ないんだけど、政府から助成金が出ているうちに開発させておきたいシステムがあるのよ」

「システム？」

「そ、そのシステムが私の機体の特殊兵装で、そのシステムを開

発することが私やロマーニヤ軍、ファロット社、ていうよりは、統
合先進打撃航空技術開発計画にとって一番重要なことなのよ」
J A S F T

「ああ、そういふことか」

統合先進打撃航空技術開発計画の名前を聞いて納得する。
J A S F T

統合先進打撃航空技術開発計画・・・・・・・・

欧州へのネウロイ侵攻の前年に扶桑とヒスパニアに大規模な怪異
が発生した

後に言われる『ヒスパニア戦役』と『扶桑海事変』である。

この二つの事件後、各国はネウロイを人類共通の天敵として認識し、今後ネウロイが発生した場合、各国が共同でこれに対応することと決定した。

そうして連合軍が結成されていく中で推し進められている計画の一つが統合先進^{JASST}打撃航空技術開発計画である。

元々の計画の内容は各軍の次期主力航空兵器の開発を一本化し、各国の軍の要求を満たせる共通の機体を開発する事だった。

しかし、計画の要である次期主力航空兵器の最有力候補であったISが『扶桑海事変』で兵器としての欠点が次々と露呈し、各国が防衛戦力の中核をISから他の航空兵器に変更せざる負えない事態に陥った為、計画は変更を余儀なくされた。

代替プランとしてストライカーユニットを各国は次世代航空主力兵器の開発機種に選定したのだが、ここでも問題があった。ISのように生産数が限られておらず、ストライカーユニットは他の二機に比べ比較的安価に生産でき、高い費用対効果を見込める優良な機体ではあったが、積載量が航空戦闘機やISと比べて圧倒的に少ない、二つの機体に比べてアビオニクスや火器管制能力が著しく低い、^{マルチロール}上記二つの要素から他の二機種のような多用途性が持つことができ

ない、いった問題があった。

・・・・・・・・要するに長い説明であったが、今やこの計画は多用途ストライカーユニットの各国の基本仕様の構築を目的とした概念実証研究計画といっても過言ではない。

確かにストライカーユニットの問題点はアビオニクスと火器管制能力をつけて積載限界をアップさせるだけで解決できるので、航空戦闘機はともかくISの問題点克服より遙かに現実的である。

ストライカーユニットであれば基本単価が安く、たとえマルチロール化による機体の単価が上昇したとしても他の機種よりも安く済むというデメリットらしいデメリットにならなかったというのもストライカーユニットを選んだ理由なのだろう。

「だったら最初から統合先進^{JASFT}打撃航空技術開発計画の一環っていつてくれ。言ってくれたらこんな回りくどい説明をしなくて済んだろ」

「何言ってるの、すっかり忘れていたくせに。聞いたら武子が怒るわよ?」

「まったく……でも、これで更識がなんでうちに来たのか納得がいったよ」

「え、それってどういづことかしら?」

今まで黙ってフェデリカの話聞いていた更識が俺の言葉に疑問を持ったのか口を開く

「うちの部隊、?書類上?は義勇統合戦闘飛行隊は統合先進^{JAS}打撃航空技術開発計画の直轄部隊なんだよ」

「ああ、そういえばそういう情報があったわね」

更識が納得したようにポンッと手を叩く。

いろいろあつて俺たちが義勇統合戦闘飛行隊設立することになった際、上層部から多国籍部隊の前線での詳細な運用データがほしいという通達があつたのだ

データを提出する代わりに補給の方を優遇してくれるという結構な高待遇であつたので、この後どんな無理難題を言われるのかと当初は警戒していたのだが、実際は部隊が統合先進打撃航空技術開発計画JASFTの為に何か特殊な任務などには着いたことがなく、定期的にデータを寄越すよう連絡が入るのみだったので記憶の彼方に追いやられていた。

この計画責任者が更識の霧纏ミステリアス・レイディの淑女の特殊兵装のデータがシステム

の開発に使えると踏み、この部隊に送ってきたのだろう。

「と、まあそんな訳でオライシャも計画に参加しているから、私が彼女に共同開発を持ちかけてもOKな訳よ」

「なるほど……………」

ラルが納得いったと頷く。

「で、どうかしら？ 更識さん、私に協力してくれるかしら？」

更識は少し考える素振りをして……………

「いいわ、協力しましょう」

そういつて右手を差し出す

フェデリカは微笑み、握手を交わす

「よかつたわ。じゃあこれから宜しくね、え〜と………楯無
つて呼んでも？」

「ええ、構わないわ。私もフェデリカって呼ばせてもらっから」

どつやら、話は纏まったようだ。

こうして本日よりここ、JG52基地・義勇統合戦闘飛行隊格納庫
でIS第三代機？赤い嵐？と？霧纏の淑女？の共同開発がスタートしたのだった。

また小難しい技術がどうのこうのという話になってしまいました。

肝心のフェデリカのISの特殊兵装がなんなのか明かすことができませんでした。

ごめんなさい……

次回ではきちつと明らかになりますので楽しみにしてください。

ヒントを上げるとするならばミスティアス・レイデイの特徴はなんなのか、フェデリカさんは何？

という感じです。

……話が一向に進まないですね、速くIS組を出したいんですけどやっぱりきちつと書きたいので……

最後になりますがご意見ご感想、この作品を見てふと思った事などお待ちしています！

出来る限り、すべての感想には返信をきちつと書きたいと思います！

以上、シュウ禅でした

Ep. 09 temporale rosso 〈赤い嵐〉 (前書き)

どいつもシユウ禅です

今回、ついにあのキャラが出てきます

そねどほどいんぞ

「それじゃあ、さっそく？霧纏ミスデリアス・レイディの淑女？の特殊兵装を教えてくださいませんか？」

互いに握手を交わして早々にフェデリカは本題を切り出した

「そっちから教えてはくれないのかしら？」

「ええ、ちょっと私の機体のはちょっと変わっていてね、まずあなたの機体からの方が分かりやすいでしょう？」

にこやかに笑って答えるフェデリカ

これ以上問答しても意味がないと感じたのか、更識は早々に聞き出すことを断念し、

「はあ……わかったわ、まずは私から説明するわね」

しょうがないとばかりにため息ひとつ、説明を始める

「まずはおそろい……隊長、IS第三世代は何を目標に開

発が進められているのか知ってる？」

「ええつと・・・確か、操縦者の操縦者のイメージ・インターフェイスを用いた特殊兵器の搭載だったよな？」

いつぞや読んだIS関連の論文の一文を思い出し、答える

「そ、正解。第三世代は操縦者のイメージ・インターフェイスを用いた特殊兵器の搭載っていうのが目的なの。例えば、昔アニメでやってたファン Öl みたいないわゆるトンデモ兵器ね」

「トンデモ兵器ってお前……」

「私の？ミステリアス・レイディ霧纏の淑女？はその中でもかなり特殊でね、水を自由自在に操ることができる能力なの」

「な……」

「……またえらいトンデモ兵器を作ろうとしたものだな」

ラルが呆れたように息を吐く。

「ふふ、自分で言うのもなんだけど結構トンデモ兵器でしょ？」

パンツと開いた扇子で口を隠し、上品に微笑む。

ちなみに扇子には『水芸』とえらく達筆な字で書いてあった

いつの間に書いたんだ？

呆れたような顔をしている俺とラルの二人に対し、フェデリカは・

・
・
・

「すごいわ！ まさかそんな発想が出てくるなんてビックリよ！

もっと詳しく聞かせて!!」

喜色満面で更に詳しく聞こうと更識に詰め寄る

更識はフェデリカのその様子がうれしかったのかにこやかに笑みを浮かべると更に説明を続ける。

「ミステリアス・レイディ霧纏の淑女?の左右のクリスタルはISのエネルギーを伝達するナノマシン製造プラントなの、そこで作られたナノマシンが空気中の水分を利用して水の鎧と楯を形成する。そしてその水は攻撃にも使える・・・予定よ」

いまだ完成していないのではっきりと言えなかったのだろう、最

後の方は少し自信なさげだった。

「まだ兵装のシステム構築が完全に出来ていなくて、待機静止状態の形状維持ができないの、」

「なるほど、それで実戦では使われていないって訳か……」

「ええ、待機状態の形状まで私の方で制御していたら、いくらなんでも私の方が疲れちゃうのよ」

「だから、当面の問題はいかにイメージインターフェイスを介さないで静止状態を維持できるようにするか、っていうところね。」

「そう……でも、大丈夫。二人より三人、三人より四人。扶桑のことわざでもあるように三人寄れば何とやら、私たちで完成させましょ?」

「フェデリカ……」

「・・・お前、いったいどこで扶桑のことわざなんか覚えたんだ
?」

「ふふ、内緒」

そういつて微笑むフェデリカ

相も変わらずそのほほえみは明るく、人を元気にさせる。

「じゃあ、今度は私の番ね。」

そう言いつつ、何やらフェデリカは台座からコンソールをひっぱり
出してきて素早くキーを叩き始める。

数瞬後、フェデリカの周りに空中投影型のディスプレイが現れ、次々と細かいデータが表示される

「……私の機体、？テンベスタ・ロッシ赤い嵐？の特殊能力はおおざっぱに言えば『魔力行使』これに尽きるわ」

「…………え、それだけ？」

「ええ、そう」

更識が何とも間の抜けた顔をし、二人の間に微妙な空気が流れる・・・

「あ、ああ、ごめんなさい。その、ええ・・・と、なんというかあまりにも予想外だったから、ちょっとビックリしちゃった」

「まあ、フェデリカの言葉だけじゃ、その反応が普通だよなあ・・・」

「まあ、だまされたと思ってちょっと見てちょうだいな。・・・
ねえ優刀、あれやってくれる?」

「はあ、しょうがないな・・・」

そういとフェデリカは一体どこから出てきたのか分からないが、廃棄されたストライカーユニットの装甲板を取り出し、適当な高さの台を見つけてその上に置く

「さて、こちらにあるのが先日、うちの部隊のあほの飲んだくれが破壊してくれましたストライカーユニットの装甲・・・・・・・・と
いうわけで、はいこれ」

そういつて渡してくるのは一本のダーツの矢。

「はあ……」

おもむろに受け取り、狙いを定めて投げる。

ヒュッ……

矢は装甲板に当たるも案の定弾き返され、床に転がった。

「ま、刺さらないわよね、普通は」

「ええ……」

「じゃあ、今度は………優刀お願いね」

「りょーかい」

そう言って、俺は目を閉じ、意識を集中させる。

・・・いくぞ、？相棒？・・・

自身の中に眠る友に心で声を掛ける

次の瞬間、体を青白い暖かい光が包み、穏やかな風があたりに吹き始める

そして意識をダーツの矢に集中……

そして、さっきと同じように投擲……

放たれた矢はそのまま、吸い込まれるように板へ……

ドンッ！

なにかが爆ぜる音が格納庫内に響きわたる

「……………嘘」

更識は信じられないといった風に装甲板を見ている。

先ほどまでそこにあつた堅牢そうな装甲板が見るも無残に大穴をあけ、その大穴から後ろの格納庫の壁にめり込んでいるダーツの矢が見えた。

その光景に驚くなという方が無理だろう。

「はい、というわけで分かってもらえたかしら？」

「え、ええ……要するに魔力は物体の強化に使えるのね？」

いくらか今の出来事にあっけにとられながらも、更識は納得いたという風に呟く。

「そういふこと」

ウィッチは魔力で身体を強化したり、障壁を張るほかにもう一つ出来る事がある。

それが、物に魔力を込めるということであつた。

魔力を込められた物体は強度が増し、丈夫になる。

それは個人の技量にもよるが大抵、2〜3倍ほどは強化することが出来る。中には物質に魔力を圧縮して対象に魔力を徹すことが出来るウィッチもいる。

「……………ま、そんなこんなで搭乗者の魔力を機体、または武装に付与し、機体の性能を上げるシステムが？赤い嵐？テンベスタ・ロツンの特殊兵装と言えるんだけど、一つ重大な問題があるのよ。」

そういつて、言葉を区切る

「……………私たちが魔法を使用するとき、使い魔が魔力コントロールをサポートしてくれるんだけど、IS使用時に魔力を使おうとすると、どういうわけかISの稼働率が極端に下がって、動作不良を起こしてしまうの」

「動作不良？」

「ええ、ISって体の四肢の操作はともかく、PIC、情報、通信は操縦者の思考制御じゃない？その思考制御システムが使い魔の思考まで読み取っちゃうのよ」

「なるほど……………」

「実際、私のほかにもIS適正の高いウィッチが何人もいて、上層部はウィッチの装備品としてISを運用しようとしたんだけど、これが原因で断念したのよ」

「魔法を使わないでISを使用しようとは思わなかったの？」

「もちろん、上層部も一度、通常ウィッチにはストライカーユニット、その中でも優秀で適性のあるウィッチにISを支給しようと考えてたわ……でも私も含めて前線のウィッチは一度も実戦で使おうとは思わなかったわ」

「どうして？」

「ええっと……どう説明すればいいのかしら……ISは四肢の稼働をするとき、皮膚の電位差を計測してISのコアが判断、四肢を動かすじゃない？だから一回コアを介してっていうプロセスを踏む分、どうしてもタイムラグが生じてしまうのよ」

そういつて本日何度目かのため息をつくフェデリカ。

「ああ、そういつことか」

今度は俺がぼんと手を打つ番だった

「更識は何か武道やっているか？」

「ええ、家柄いろいろとね、やってるわ」

「じゃあ、たまに感覚が鋭敏化する時ってないか？」

「ええ、……ああ、そういうこと！」

どうやら、楯無も理解したようだ。

要するに、ISを使っている状態で四肢の動作をするときに一回、コアでの処理というプロセスが入ってしまうため、どうしても遅くなってしまうのだ。ISに搭載されている高性能センサー、ハイパー・センサーで特に感覚が鋭敏化している状態だと、その差が一気に出る。元からISで訓練している者にはあまり感じれない、また

はしようがない差と取られてしまうが、身体強化で思考と反射のタイムラグが極めて少ない状況に慣れているウィッチにとっては大きな差で、反応が鈍いと感じてしまう一因なのだろう

「まあ、いろいろ話が脱線しちゃったんだけど。要するにウィッチの能力を最大限発揮できるシステムが私の機体の特殊兵装についてうわけなの」

「なるほどね……ウィッチ専用ISかあ」

更識は考え込むように目をつぶる

「その過程でウィッチでも使えるイメージ・インターフェイスの開発が一統合先進打撃航空技術（JASFT）開発計画の目的のひとつなのね」

「ええ、ストライカーユニットの特性上、手での操作が困難だから火器管制、量子変換システムの操作はイメージ・インターフェイスがストライカーユニットには最適なのよ」

「なるほど……確かにイメージインターフェイスを使え

たら楽ではあるな・・・」

「とうわけです、私たちの目的は特殊兵装とウィッチでも使えるイメージインターフェイスの開発っていうことね」

話は終わりとばかりにフェデリカは手元にあったコンソールを元の場所に戻す。

「ん？もうこんな時間か・・・やれやれ、銃の整備に来たはずがいつの間にかISの講義を受けてしまったな」

ラルの言葉にふと格納庫においてある古臭い時計を見る。

時刻は午後一時、

結局俺たちはフェデリカの話を一時間近く聞いていたのか・・・

「やれやれ、貴重な昼休みを潰しちゃったな」

「あら、結構有意義な昼休みだったでしょ？」

「昼飯を食べていたらな」

「あら残念」

午後からはまた訓練がある

その前に少しでも腹に食べ物を入れておこうと思い、オフィスへ帰る為に格納庫から出て行くことにすると……

「済まない、こちらに緋村少佐はいるか？」

整備員たちの声が彼方此方から飛び交う格納庫の中でもその毅然とした声は綺麗に澄み渡り、奥の方にいた俺達にも聞こえていた

「ん……この声はバルクホルンか？」

ラルがその声の主に見当がついたのか確認するように入り口を見る

「本当だ、トゥルーデだ……おい、トゥルーデ」

その声の主を見つけその名前を呼ぶ。

その呼び声に気づき、一人の少女がこちらに向かって歩いてきた。

「やはりここにいたか」

毅然とした口調でカールスラント軍人の鏡のような彼女の名前は
ゲルトルート・バルクホルン

ラルと同じくカールスラントJG52に所属するウィッチで飛行
隊長を務めている。

彼女とは去年の4月にこの基地に派遣された時に知り合い、同じ
中隊長という立場からすぐに意気投合し互いによく相談する間柄に
なっていた

「どうかしたのか、お前が人のことを探しに来るなんて珍しいな」

「いや、午後は我々第二飛行隊の訓練ということだったからな。
その細かい調整をと思ってな」

「ああ、そういえばそうだったな……」

「まったく、お前というやつは……ん？」

そこで彼女はこの場に見慣れない人物がいることに気づきそちらに目を向ける。

「優刀、彼女が例の補充人員か？」

「ああ、更識、自己紹介」

「初めまして、昨日義勇統合戦闘飛行隊に配属されました更識楯無少尉です。よろしくお願いします」

「JG52第二飛行隊隊長　ゲルトルート・バルクホルン中尉だ。
よろしく頼む」

そういつて互いに敬礼を交わす。

「ラルすまない、オフィスに言ったら俺のサンドウィッチ冷蔵庫に入れといてくれ」

「ん、わかった、行くぞ二人とも」

ラルは察してくれたのか二人を連れて格納庫を出て行った。

その様子を眺めながら、俺たちは格納庫の外に出る

「ふう、やれやれ……また昼飯食い損ねたな」

「ふ、多国籍部隊の隊長はなかなか忙しいみたいだな」

「まったく、猫の手も借りたいよ。……で、どうだ、彼女の印象は？」

そういつて彼女がこの格納庫に来たホントの目的を指摘する。

「……気づいていたのか」

「ああ、やはり？あの戦い？を経験している以上、彼女が気にならないはずがないからな」

「……そういつお前はどうかんだ、彼女のことをどう思っている？」

「……………彼女は？あいつら？じゃない、比べても意味がない」

「よくそこまで割り切れるモノだな……………私も頭では分かっているつもりなんだが」

そういつて表情を曇らせるトウルデー

「いいさ……………そこまで割り切れるほど俺も大人じゃないさ……………」

「そうか……………」

それ以上は何も言わない

上を向く……………

最近は雪の日が多いカールスラントの東部の空は珍しく晴れており、

その青い空はどこまでも広がっていた

というわけで、ついにバルクホルン登場です。

やっとです。

やっとアニメのキャラがメインで出せました。

といっても最後の方だけでしたけど……

あともうこれで技術回終了です。

次回からはちゃんとストーリーが進行します。

……ここ最近ハイペースでしたのでこれで少しはスピードを落とせるかな？

最後にご意見ご感想をお待ちしています

EP・10 仲間の条件（前書き）

どうも、シユウ禅です。

今回はエーリカ主演です。

では、さようばー！

「緋村少佐、十時方向にリバウ方面へ航行する敵編隊を確認。その数二十……こちらにはまだ気づいていないようです」

私の横を飛んでいた下原が隊長に敵発見の報告をいれる

「了解だ下原……よし、ドラツへ02率いる第二中隊は右から迂回して奴らの側面に攻撃を仕掛ける」

その報告を受けた隊長はいつも通り簡潔に命令を下す。

『 周りは気にするな、いつも通り突っ込んで叩き落としてやれ！
』

「了解！」「了解！」「了解！」「了解！」「了解！」

隊長の極めて簡潔な檄を受けて私達第二中隊は上昇、敵より高度を取った後、敵に向かって一気に加速、その距離を詰める。

敵の編隊を射程にとらえる。

「 ドラッハ02よりドラッハ03、ドラッハ05！ 初撃は任せるわ！ 」

「了解だ……クルピンスキー、行くぞ！」

「りょーかい、ラル。……じゃあフラウ、先に行ってくるわ」

そういつて私にさわやかに微笑んで敵へと矢のように飛んでいく
伯爵とラル中尉

続いて、ロスマン先生と私が敵へと呐喊。

降下し速度を失った二人の背中を追いかける敵に向かって銃の引き金を引く。

銃弾を食らった敵はそのまま成すすべなく爆砕、敵の一群を突き抜ける

その私達の背中を敵の一体が追いかけてくるが私たちは気にせず
に再び高度を取るために上昇を始める。

もちろん、敵もおめおめと黙ってみているわけではない。

高度を取らせまいと私たちの上に出ようとするが……

「はあっ—」

更に私たちの後に降下を始めていたカトー中尉にとって落とされる。

「よし、各機ブレイク!!」

その掛け声を聞き、私たちは残りの敵機を叩くために各々攻撃を開始した。

・
・
・
・
・

・
・
・
・

・
・

「お疲れ様、エーリカちゃん。今日は二機撃墜おめでとう。お姉さんびつくりしちゃった」

帰投後、格納庫で一息つく私について先日配属された更識少尉が笑顔を浮かべながらスポーツドリンクを差し出してきた。

「ううん、あんなのロスマン先生のおこぼれだよ・・・それに、更識少尉の三機撃墜の方がすごいじゃん」

敵編隊を撃破した直後、新たな敵編隊が現れてその編隊を隊長率いる第一中隊が迎えうち、その中で彼女は単独で三機落としたのだ。

そちらの方がすごいと思うのは私だけだろうか？

「そんなことないわよ、私はまだまだISの性能に助けられている部分が大いいわ。なんだかんだで攻撃をくらちゃってるし・・・だから一発も被弾しなかったエーリカちゃんの方がすごい！ お姉さんが言うんだから間違いないわ」

そういつて私の頭を姉が妹を褒めるようになでる。

そこへ・・・

「やあ、二人して何の話をしてるんだい？」

陽気なキザったらしい笑みを浮かべて伯爵が現れた。

「あら、伯爵」

「もうお説教は終わった：みたいだね」

よく見るまでもなく、その綺麗な彫刻を思わせるような端正な顔の左頬には小さい赤い手形がくつきりつついていた。

キザつたらしい笑みを浮かべて爽快と登場したはいいが、その所為でなんだか間抜けに見える。

「あはは、いやあエディータも可愛いところがあるよね。私がお子に話しかけるだけですく嫉妬するんだから」

「絶対違うと思う」

「ええ」

大方、帰ってきて早々に他の隊の後輩ウィッチをバーに誘おうとした所を、偶然発見したロスマン先生に思いつき張り手を食らったのだらう。

「やれやれ、二人とも手厳しいね……ところで、二人して一体何の話をしてたんだい？」

「今日のエーリカちゃんはすごかったって話をしてたのよ」

「そうだね、今日は二機撃墜だなんてやるじゃないかフラウ」

「まだまだだよ。まだ出撃のたびに緊張するし、銃を撃つのにも手が震えるんだ」

そう、震えるのだ。

戦場に出るのが怖くて仕方がない。

もしかしたら、自分が落とされて死んでしまうかと思うととても立っていられなくなる。

銃を撃つときだって味方に当たったらどうしようなどと考えてしまっただ。まうのだ。

「軍人としては失格だろう。」

「それでいいんだよフラウ、戦場では恐れを忘れた人から死んでいく……恐怖を感じるっていうことは生きていくうえでとても大切なことさ」

伯爵は普段のさわやかなキザったらしい笑い方ではなく、人を安心させるような穏やかな笑みを浮かべ頭を撫でてくる。

「伯爵……」

「でも、フラウがそうやって震えてしまつたらしょうがない、私が優しくベットで」このエセ伯爵うつつうつつっ！っ！っ！「ぐはっ！？」

そんな叫び声とともに何か飛んできて伯爵の後頭部にクリーンヒット。

頭に重い一撃を受けた伯爵はそのまま前に倒れる。

「え？・・・辞書？」

伯爵の頭に直撃した物体を手取る。

そこにはカールスラント語でジーニ〇ス独扶辞典とでかでかと言っていた。

「なんで辞書なんか……」

辞書が飛んできた方へと目を向けるとそこには……

「まったく、このエセ伯爵！ 私のかわいい教え子に何してくれようとしてるのよ」

部隊の新人教育係のロスマン先生が立っていた。

「ロスマン先生……」

「フラウ、大丈夫？ 変なことされなかった？」

「うん、大丈夫だったけど・・・」

「まったく、油断も隙もないんだから！」

この、この、どこからか普段講義中に使っている指揮棒を取り出し、気絶する伯爵の頬をつつく

「ねえ先生・・・」

「何かしらフラウ？」

「どうすれば、隊長達みたいに強くなれるかな・・・」

「え？」

「…………ごめん、なんでもない。先に戻るね…………」

そういつて私は二人に敬礼し、足元に転がっている伯爵をそのままに格納庫を出た

「……………はえ？」

顔に暖かい感触を感じ目を覚ます、

季節は冬の為太陽がが昇り切っていないのか、カーテンが完全に閉まっていない窓からは弱い陽光が入り込んでいる。どうやらその陽光が顔に当たっていたのだろう。

ベット脇のテーブルの上の時計に目を移す……

時刻は午前6時を指している。

いつも起床ラッパが鳴るまで眠っている私にとっては未知の時間帯だ。

辺りを見回す。

反対側のベットには同室であるハンナ・ユステイーナ・マルセイユが気持ちよさそうに一定のリズムで寝息を立てている。

もう一人のルームメイトである下原は起きて朝食の準備の為にオフィスに行っているのだろう。上からは人の気配がしない。

「……………起きよ」

いつもであれば二度寝を敢行するところであるが、とてもそんな気にはなれなかった。

ベットから抜け出し、枕元にある携帯端末をいじり始め、空中にディスプレイを投影させる。

そのディスプレイの中では優刀と、ラル、二人のウィッチが高度な空中戦を繰り広げている

先日の模擬格闘戦の映像だ。

「はあ……………まだまだ隊長達のようにはいかないなあ」

この部隊に配属されてから数か月経つが、いつもこの部隊の先任達の技量の高さに驚嘆させられてばかりだ

圧倒的な空戦機動、正確な射撃能力、なにものをも恐れないその

精神力・・・数を挙げればきりが無い。

同じ時期に入った同期のハンナは隊長の二番機に抜擢されて次々と戦果をあげ、先任だけと私たちと同じ時期にこの部隊に来た下原はこの部隊の目として皆から頼りにされている。

それに比べて私ときたら・・・・・・・・

初陣では長機であるロスマン先生を敵機と誤認して逃げ回った拳句墜落。

そのあともいろいろと墜落やらなんやらやらかした。

最近は何とか慣れてきて、敵機を撃墜できるようになったがそれでも二人に比べればずっと少ない

はっきり言ってダメダメだ。

「…散歩に行こ」

沈んだこの気持ちを朝の寒いけど清々しい空気がきつと変えてくれるだろうと信じて身支度を整えるべくロッカーに向かう。

その時ふと目を窓の外に向ける

「……………隊長？」

窓の向こう側に隊長の姿を見つけた。

名前はなんだったか忘れたが、愛用の扶桑刀を持ち、戦闘中に来ている扶桑独特の上着、羽織を着て宿舎の裏手の林へと入っていった

「なんだろ、行ってみよっかな？……………」

私は隊長の後を追うことに決め、ロッカーから防寒着を取り出し、まだ寝ているハンナを起こさないように静かに部屋を出た……………

隊長の後を追いかけて林に入ると少し広がった場所にその姿を見つけた。

私は気づかれないようにこっそりと木に身を隠す。

隊長は腰に差した扶桑刀に手をかけて目を瞑っていて動く気配がない、

(いったい何をしているんだろう?.....)

サアツと辺りに冷えた風が吹く.....

一体何をしているのか聞き出そうとして物陰から出て行くようにしたその時……

隊長がゆっくりと目を開く……

ビクッ！！！！！

隊長の纏う雰囲気が変わる

いつもの辺りを穏やかにする温かい雰囲気から、そこにいるモノを斬り殺すような、冷えた、ひどく恐ろしい空気にその在り方を変える

次の瞬間……

「オオオオオオオッ！！！！！！」

隊長が叫んだ瞬間、隊長の周りの空気がはじかれたように辺りに吹き荒れる

辺りには吹き荒れた空気によって木の葉が舞い散り、切り裂かれ次々と粉々に弾ける

「キヤッ!？」

その光景に驚き、その場に倒れてしまった

「！……………フラウか？」

隊長が私に気付いた

近寄ってくる今の隊長はいつもの暖かい雰囲気の隊長だった

「お……………おはよう隊長」

「何やってるんだ お前？」

隊長が呆れたようにつぶやく

「あ、朝の散歩……………な、なんちゃって」

そう言うのが精いっぱいだった。

後をつけてましたなんてとてもじゃないが言えない。

「ふうん、まあいいけど。ほら立てるか？」

そう言って手を差し出してくれる

「だ、大丈夫…一人で立てるよ……あれ？」

何とか一人で立とうとするが腰に力が入らない

「まったく……ほら行くぞ？」

私の脇の下に手を入れて立たせる隊長……しかし

「わ、わわー!!」

「どうやら腰が抜けてしまったらしく足に力が入らない……
うう、我ながら情けない」

「しょうがないな……よっこいせ」と

「そういうと器用に私をおんぶする隊長、」

「うう、ごめん隊長……」

「いいえ、別に」

「そういつて隊長と私は宿舎の方へと歩き出した」

「ねえ隊長。さっきのは剣術の練習？」

宿舎への道の途中、私はさっきの事が気になり聞いてみた

「ああ、違う違う。練習っていうほどのものじゃない、ただ体が鈍らないように気を引き締めていただけだ」

「いつもの訓練とは違うの？」

「ああ・・・」

そういつて上を見上げる隊長。

「俺の場合、時折あやまって気を引き締めないと心の中が黒くなっていつて、気持ちが悪くなっていくんだ」

「ん~~~~、どじいじいよっ？」

「そうだな・・・フラウ、銃を持った時どう思う？」

少し考えるようにして私に聞いてきた

「え？それは怖いよ……だって人を殺せちゃうんだもん」

「そうだな、それが普通だ……けど、どっかで好き勝手に撃つてみたいって思わないか？」

「う……たまに、ちょっとだけ」

私は情けなく答える。

銃を持ったとき、確かに怖いと思う、けど同時に、少しだけ使ってみたいと思うのも事実である。

だからこそ余計に銃を持ちたくないし、引き金を引くのにもためらいが生まれるわけだが……

「まあ、要するにそういった風に力を持ったら使いたいって思うわけだ……けど、俺たちは好き勝手に力を使っているわけじゃない……俺たちが使っている銃は人をも殺せる道具でもあるんだから」

「うん……」

そつだ・・・今はネウロイに向かつて銃を放つてはいるが、今使っている力は人も殺せるんだ・・・

「だから、たまにああやって気を引き締めるんだ。・・・
自分が持っているその力に飲まれないように」

「どんな力だつてその力の振るい方を間違えばそれは悲しみを増やすだけのただの暴力だ。だから強くなることに焦っちゃいけない・・・焦つて手に入れた力に心の成長が追い付いていないんだ。そついった力には必ず振り回される」

そついつて淡々と話し続ける

そついつと今まで上に向けていた視線を私の方に向け諭すように語りかける

「……………剣は凶器、剣術は殺人術。どんな綺麗事やお題目を口にしてもそれが真実……………だからこそ、俺たちはその力の振るい処を間違っちゃいけない……………強くなる事を焦っちゃいけないぞ、フラウ」

「え?……………」

「エディータから聞いたぞ? 最近お前が沈んでいる、訓練中にもどっか焦りが見えるって……………何を焦っているんだ、フラウ」

「……………私はまだ足手まといだから、速く強くなって、早くみんなと一緒に胸張って飛べるようになりたい、皆に背中を預けてもらえるようになりたいんだ」

わたしはもつとみんなにちゃんと仲間として認めてもらいたのだ。

背中を預けられる仲間として……………

「ならお前は大丈夫だ、フラウ」

「え?」

「皆、お前のことを頼りにしているよ。俺が言っただから間違いない」

そうやってにこやかに笑う隊長

「そんなことないよ……初陣ではロスマン先生を敵と思って逃げ回って落ちちゃっうし、そのあとだって何回も落ちちゃってるし……みんなに迷惑かけっぱなしだよ」

「……でも、今は違うだろ、エディータが言ってたぞ？ 最近のあの子はすごいって、ときどき私でもビックリするぐらいいいタイミングで敵の攻撃を仕掛けるって」

「そんなの偶然だよ……」

「伯爵も言っていたぞ。何回あの子に助けられたか分からないってな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「武子いわく、？彼女は私より周りの観察力がある、あの子は私が命令するよりも早く敵の弱点に攻撃している？だ、そうだ」

「・・・・・・・・」

「大将はあの高度回復の速さは見事だった、だってさ」

「・・・・・・・・」

「フェデリカやラル、下原だって・・・・・・・・フラウ、どうした？」

「・・・・・・・・うえ、ぐす・・・・・・・・うえ えぐっ」

「なんだ、泣く奴があるか・・・」

「うっうっ・・・・・・・・だって・・・・・・・・ひっく・・・・・・・・ぐすっ！」

だってしょうがないではないか、ずっと今までみんなの足をひっぱて来ていたんだ。皆に迷惑をかけてきたのだ。いつの間にかみんなに認めてもらっていたと言われて、嬉しくない筈がない

「だから、あんまり卑下するな・・・お前は良くやってるよ。確かにまだまだ空戦技術は荒いけど、お前は他のみんなの背中をちゃんと守っているんだ、みんなお前を頼りにしているよ・・・」

「うう・・・うわああああっ！」

「・・・」

「もう落ち着いたか？」

「・・・うん」

「そうか・・・じゃあさっさと帰るとするか、もうそろそろ朝食の時間だ」

「うん・・・朝食、楽しみだね」

「ああ・・・」

私が落ち着いたのを見計らい再び歩き始める隊長

しばらくすると目の前に白い建物が見えた

「ああ・・・ッと見えたな、宿舎だ」

「ホントだ、カトー中尉と下原だ」

大方、朝食の時間になっても現れない私たちを探查能力の高い二人が探しに来たのだらう、中尉はやれやれと安心した顔でいて、下原は手を振ってる。

「さて、さっさと帰るか」

「うん………ねえ隊長」

「………なんだ？」

少し、間が開いて隊長が答える

「私もつと頑張るね………」

「
ああ
」

そう一言答えた後、隊長は二人の言う方へと歩いて行った

Ep-10 仲間の条件（後書き）

というわけでエーリカ回でした

やっとスポットライトが当たりました

次はだれを書こうかな？

祝日なんで割とのんびり書いてたらいつの間にかこんな時間にな！？

まあ、でも今回はすんなりと思い通り書けたんで個人的には満足です。

お知らせですがこの零章もこの話で半分を切りました。

後はもう一つ二つウィッチ個人にスポットライトを当ててそのあとにラストパート、エピソードです。

ようやく本編行けます。

こっちにIS勢はがつつり出てきます。

第零章がウィッチ達の物語だとしたら第一章はIS操縦者の物語

です

楽しみにしていただければ幸いです

それではご意見、ご感想お待ちしております!!

以上、シュウ禅でした!!

Epiloge in Erinnerung (前書き)

どうも、シユウ禅です。

前書きが書くことないです……

ゲフンっ!!

じゃあいびや……

「ふ、ふふ……」

「ハンナ、どったの？」

「急に笑い始めてどうしたんですか？」

二月上旬のある日、私達新人三人が格納庫で土田班長からストライカーユニットの講習を受けている最中に突然ハンナが笑い出した。

頬をだらしなく緩めて笑うその姿ははつきり言って気持ち悪い

「いや、なに……最近やたらと視線を感じるようになってな……」

「ええ、ハンナってそんな趣味を持ってたんだ……」

「違つっ!」

「そうですねよ、エーリカさん。ハンナさんは視られるのが好きな変態さんじゃないですよ」

「そうだ、さすが下原!良く分かってるじゃないか」

「ハンナさんは隊長達に言葉でいじられるのが好きなんですよね!」

「そう、私は言葉で弄られるのが好き……ってちがっつ
「!」

「うわ……ごめんハンナ、さすがに私も引くよそれ……」

まさか士官学校からの同期がそんな趣味を持っていたとは驚きだ

「違うって言ってるだろうっ！ 最近、やたらと誰かに見られて
いる気がするんだ！ 今だってほら！」

そういつて格納庫の外を指さす。

指さした方には最近見かけるようになった数人のウィッチがこっ
ちを向いてひそひそ話をしているのが見え、私たちの視線に気づく
とそそくさと逃げるように去って行った。

「ホントだ……なんだろう？」

「私にエースの貫録が出てきたんだな。きつと」

「なんだそれ……」

「あははは……」

「…………へえ、さすがは未来のエース達ね。私の授業中に
よそ見なんていい度胸してるわ」

「……………」

「……………」

「……………」

突如、背後から心底冷えた声にが聞こえ、刃物でも突きつけられ
たような感覚が背筋に走り、体を強張らせる私達三人…………

ゆっくりと背後へ振り向いてみればニコリいつもの穏やかな笑
みを浮かべるロスマン先生。

しかし纏う雰囲気はまったくの逆で、その場にいる者を凍死させるのではないかというほどのひどく冷えた怒気を辺りにふりまいて
いる。

そうだった、私たちはロスマン先生の授業の一環で土田班長にス
トライカーユニットの講習を受けていたんだった

有無を言わさぬ先生の異様な迫力に思わず身を強張らせる。その
背後にはなぜか九本の尾っぽ生やす成長した先生の姿が浮かび、こ
ちらを射殺すような目で見ていた気がする。

うん、気のせいだ。

そういつことにしてほしい。

すぐそばにいた土田班長がその怒気に当てられ少し怯えている。

「さてさて、授業を真面目に聞かない子にはどんな御仕置きがい
いかしら……」

ゆらり、と先生が動く

「い……」

「い……」

「「「ぎゃああああああああつ！……！……！」「」

「久しぶりだな。緋村中尉……いや、もう少佐だったな」

「お久しぶりです將軍。將軍のご活躍はJG52まで届いていますよ」

「はは、まさか？扶桑の白き龍？の耳に入っているとは恐れ多い」

「またご冗談を……」

この日、俺は部隊のオフィスで珍しい人物と再会を果たしていた。

今日の前にいる人物はエルヴィン・ロンメル。カールスラント陸軍将軍である

巧みな戦略・戦術によって、圧倒的なネウロイとの戦いで勝利し続けるカールスラントの英雄で、兵からの人気も高い将軍である

「それで、将軍がわざわざJG52までいらした理由はなんでしようか？」

「やれやれ……君もせっかちな少佐。若いうちからそんなに急いだってなにもいいことはないぞ」

「はあ……」

にこやかに笑い、武子に差し出された特製コーヒーを飲む将軍。

「ああ、実においしいコーヒーだ……」

「ありがとうございます」

本人もまんざらではないのかにこやかに笑って返す武子

「ああ、ウィッチでなければうちの部隊に来てほしいくらいだよ」

「將軍……上司の目の前で堂々と部下を口説かないでください」

「これは失敬」

まったくわざわざ一左官にみずから会いに来て、部下を口説く
将校というのも珍しい。

そういったフランクな部分も現場の兵士達から絶大な人気を得
ている一つの要因だろう。

なんというか、將軍は他のカールスラント軍人と少し変わっている。

いや、將軍だけではない。

俺が親しくなるカールスラント軍人は皆、一般的なカールスラント軍人像から逸脱している

謹厳実直なカールスラント軍人はどこへやら

まあ唯一、バルクホルンだけがTHE・カールスラント軍人と言えるんだろうが

彼女もなんだかんだで癖強いからなあ……………

……まあ、こっちの方が親しみやすいので個人的にはいいのだが

そうしてゆっくりコーヒーを味わっている將軍の姿を見て、自分も武子のコーヒーを味わうことにした

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

三人共、無言でただコーヒーを飲む。

そうして、一杯目のコーヒーを飲み終わり、武子が再び入れてくれた二敗目を飲みながら將軍が口を開く。

「プラークが落ちた」

「……………そうですか」

ロンメル将軍が告げた内容をただ肯いて納得する。

「なんだ、驚かないのか？」

「ええ、予想はしていましたので……………」

信じたくはないが、予想はしていたことだ。

カールスラントとオストマルクの国境近くにある都市、プラーク。

カールスラントは特異な形状をしており、オストマルクの上に半分覆いかぶさるように突き出た東部地方がある。

プラークはその突き出た部分の根元ともいえる所にあり、ここを完全に抑えられてしまえばカールスラントは東部と西部に分断されることとなる。

そこが抑えられたとなると……

「我々にその奪還作戦に参加しろということですか？」

「いや、違う」

「……ですよね、だったら将軍がこんなところにいる筈がない」

将軍が本当に奪還作戦に参加するのであれば、今頃国境沿いのドレステンにいる筈だ。

「まったく可愛げのない奴だな。私が君たちに作戦に参加するよ
うに頼みに来たとは思わないのか？」

「何処の軍に一部隊の隊長に参加するように頼みに来る将軍がいるんですか……あいにくとそう思えるようなアホ臭いヒロイツクな精神構造してませんよ」

「ちえ」

将軍が子供のように拗ねる

ちえって……案外お気楽だなこの人は

「……で、将軍が来た理由はなんですか？」

「……ブランク奪還作戦が実施されるに当たり、もう一か所奪還作戦が実施されることとなった」

今までの陽気な雰囲気を一変させ、顔を引き締める将軍

その佇まいにこちらも自然と気を引き締める

「その場所って、まさか……」

「ああ、そのまさかだ……これより二週間後、我々はクラウ奪還作戦を実施する」

クラカウ奪還作戦

ついにその日が来たか……

クラカウ……

こちらもまたブライクと同様にカールスラント、オストマルクの国境近くにある都市で、昨年九月にネウロイによって陥落した都市である。

クラカウはカールスラント東部の最東端に近く、今や東部戦線に飛来する航空型ネウロイの多くは、ここクラカウから飛来しているといっても過言ではない。

先日のオラーシャからの避難民を乗せた輸送機を襲った航空型もここから飛来したと思われる

グッ・・・・・・・・

コーヒーカップを持つ手について力が入る

「優刀・・・・・・・・」

横に座っていた武子が心配そうに顔を覗いてくる。

「・・・・・・・・大丈夫だ」

心配そうな武子に笑顔で答えてやる。

そっだ、ついにこの日が来たのだ・・・・・・・・

「……あの日、君の部隊はクラカウにおいて避難民を守る為に最後まで戦い、君とカトー中尉を残して全滅……。幸い、死者は出なかつたものの、部隊は欧州からの撤退を余儀なくされた」

ロンメル将軍の言う通り、あの日クラカウにネウロイが襲来した際、東部戦線全域にネウロイが大攻勢を仕掛けてきた。俺が率いる扶桑国遣欧艦隊21航空隊第3中隊はクラカウを防衛するために出撃した。

……後は将軍の言う通りである。

「その後、君は欧州に残る事を決め、クラカウ撤退戦時に共に戦った者たちとこの義勇統合戦闘飛行隊を創設した……」

「ええ、そうです」

わずか半年前の出来事だが、今でも昨日の事のように思い出せる。

空は一面にネウロイに支配され、逃げようとする人たちに容赦なく赤い閃光を振りまく。

すぐ近くにいる味方さえも判らないほどあの日の戦場は混乱し、次々と仲間が傷ついて行った……

あの日、俺は大将とフェデリカに出会い、同様にクラカウ防衛の為に攻撃し、部隊を壊滅させられたラルや、エディータ、伯爵と共にこの義勇統合戦闘飛行隊を創設した……

「……少佐、この作戦に参加するか？」

「……え」

「今回、部隊がこの奪還作戦に参加するかどうかは君に一任されている……参加するもしないも君の自由だ」

なるほど・・・そういうことが

この部隊は多国籍軍である為、正確にはJG52の命令系統に属していない。連合本部の直属の独立した遊撃部隊である。

現場での行動は自分に一任されており、特にこれといった注文を付けられたことは今までにない。

そして今回も上が何も言ってきていない以上、参加するか否かは任せているといったところだろう・・・

「・・・・・・・・迷っているのかね？」

將軍のその瞳が俺の心を見透かすように覗き込む

「……ええ」

そう、俺はロンメル將軍の言う通り迷っている

もちろん、作戦に参加したいという思いはある。

けれど、それとは別にはたして参加するべきかと迷っているのだ。

「……君の所にいる新人たちが心配かね？」

「……ええ、よく御存じで」

やはり、抜け目ないな……ちゃんとこちらの情報をきちっと仕
入れている。

もっともそうでなければネウロイとの戦いで勝ち続けることなど
できないのであるが

「・・・今回の作戦、撤退戦の時よりも苛烈を極めるでしょう。・・・その中で戦場の現実をいやでも突きつけられる場面がきつと何度もあります。・・・あいつらは将来有望なウィッチです。けれどまだ13歳の子供でもあります・・・技量の方はともかく、精神が成長しきっていないあいつらが現実を突き付けられたとき、潰れないかが心配なんです」

戦場にあるのはゴミの様な人の死だ。

どんなに大義名分を立てたところでその事実を決して変わりはない。

彼女たちはきつと将来優秀なウィッチになる。だからこそ、精神が成長しきっていないうちに、トラウマになるようなことは避けない。

「俺はあの子たちに潰れてほしくないんです・・・けど」

「世界は彼女たちの成長を待ってくれる・・・わけではな

い、か」

「はい……」

だけれど、世界は彼女たちがその事実を受け入れられる程に成長してくれるまで待つてくれはしない。

今も、欧州のどこかで助けを求めている人がいるのだ。

その人たちを守る為に戦うのが我々の務めとだということは十分に理解しているのだが……

「それでも出来る事なら、そんな現実をみせてやりたくないのだらうっ。」

「はい……」

自分の考えている事が甘いという事は十分に解っている。

口では大きなことを言っておきながら、いざと言つときはその決断が出来ないのだから……

そうやって俺が悩んでいると……

「……ボス、参加しよう」

突然、声のする方を向けば、そこにはドアに寄りかかってガムを膨らましている大将の姿があった。

「つて、大将!？」

「…………ボス、この作戦に私たちは参加するべきだ。私たちにとつても、あいつらにとつてもな
…………」

「大将…………けど！」

さすがに將軍のいる目の前でいきなり横から出てきた彼女を武子が非難するように声を上げる。

將軍の方は大将の行動に特に何も言うつもりはないようだ。

「どのみち遅かれ早かれこの欧州は今以上に戦いが激しくなる。だつたら早いうちに知っておいた方がいい」

「わかっているさ…………けど」

「私はいつらがそれで潰れるほどヤワな奴らだとは思っていないぞ？ 奴らなら乗り越えられる…………もう少しあいつらのことを信じてやれ」

それでもおれは…………

「やれやれ、どうもボスは過保護だな…………もしそれで潰れそう

になったら、私たちが支えてやればいい、私たちは仲間だろ？」

「大将……」

そつだ……大将の言つ通りである。

「やれやれ……大将に言われて気づかされるなんてな」

そついうと自然と笑みがこぼれた

いくらかクラカウという名前を聞いてナーバスになっていたようだ

「ふふ、若いな君たちは」

そんな俺たちのやり取りを今まで黙って見ていたロンメル将軍が
ニツ口端を上げて笑いかける

「あ、し、失礼しました少佐！」

「いや、いいさ・・・それでは緋村少佐、答えを聞こうじゃないか」

ロンメル将軍のその真摯な目をまっすぐ見据えて俺は・・・

「はい・・・我々、義勇統合戦闘飛行隊はクラカウ奪還作戦に参加させていただきます」

そうだ・・・・・・・・

俺は彼女たちを信じてやればいい・・・・・・・・

そして、もし彼女たちが潰れそうになったのなら、そばできちつと支えてやる・・・・・・・・

それが、仲間なんだから・・・・・・・・

ロンメル将軍登場!!

やったぜ！ イエーイ！！

え？

知らない？

これは失礼しました……

将軍はオリキャラじゃないですよ。

SWのアフリカの魔女にも出ていますが、将軍は実在した第二次世界大戦中の人物です。

彼の詳しい経歴を知りたい人は『砂漠の狐』で調べてみてください。
い。

彼がっこいいんですよ〜

………すみません、テンションがおかしな方へといってしま
いました

第零章、前話で言った通り此処から折り返し、一気に物語は加速します。

この後もよろしければお付き合い下さい。

最後になりますが、ご意見ご感想などありましたら遠慮なく送ってください。

ご感想を送っていただけたら、作者のこれからの励みにもなりますので……

というわけで、また次回！！

Ep. 12 Nacht von Tragödie des Winters

シムシムウ禅です！

Ep. 12 . . . やっちまったぜ . . .

ヤッちまったぜ . . .

ロンメル將軍にクラカウ奪還作戰に参加する折を伝えた数日後、

俺と武子、ラルはJG52基地の作戰會議室で行われているクラカウ奪還作戰の作戰會議に参加していた。

作戰の總指揮を執るロンメル將軍はもちろん、基地司令、JG52飛行隊司令のポニン少佐、陸戦部隊の指揮官、あとは周辺基地の司令なども會議に参加していた

「これが今回、偵察部隊が撮影したクラカウに展開するネウロイの映像です」

そういつて情報官がスクリーンに映像を映し出す。

「……………これは—」

その映像を見て室内がどよめく

スクリーンに映し出されていたのは……………

「『山』か……………」

忘れるはずがない

かつて扶桑海事変において、猛威を振るった超大型ネウロイ……

・通称『山』である

その黒いピラミッド状の巨体は小高い山など比較にならないほど巨大である

こいつの所為で扶桑はあわや壊滅というところまで追い込まれたのだ。

ちらりと横に座る武子に目を向ける

「……………」

武子はただじつとスクリーンを見つめていてその胸中はうかがえないがきつと考えていることは同じだ

彼女も忘れたくても忘れられないのだろう……

こいつの事も、あの時の事も……

「緋村少佐、このネウロイの説明を頼む」

「はい……………ではご説明します」

スクリーンの横に立つ

「……………このネウロイはご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、扶桑海事変においても確認された超大型ネウロイです。その大きさは見てわかる通りそこいらにある小高い山ほどあります」

そして説明を続ける。

「このネウロイの特徴はをその堅牢な防御力と他を寄せ付けない攻撃力、その攻撃の有効射程です」

「こいつの高出力ビームの有効射程は優に半径15000mを超えます。その出力も駆逐艦を一撃で沈めるほどであり、ウィッチのシールドを持ってしても精々一、二発といった所でしょう」

「更に極めつけは体内から無数の小型機を輩出できる能力です・・・これにより瘴気外の小型機の活動時間を大幅に引き上げており、まさしく移動要塞といっても過言ではありません・・・」

その驚異的な性能にその場の全員が押し黙る・・・

「緋村少佐、率直に聞きたい」

そんな中、一人手を上げる人物が一人

「なんででしょうか、ボニン少佐？」

「少佐達はどうやってこのネウロイを倒したのだ？ 扶桑が健在で少佐がここにいる以上、攻略法がない訳ではないのだろうか？」

ボニン少佐の言う通り、攻略法がない訳ではない……

しかし……

「……当時我々がとった作戦は至極簡単です。 当時は海上戦でしたので戦艦を囷に使用して小型機を誘導、その間に航空ウイツチで敵に接近、コアを発見して破壊しました」

「コアはどこにあるんだ？」

「おそらくここです」

そういつて、ネウロイの頂上付近を指す

「……ちょうどてっぺんか」

「……はい、一年前に現れた奴と同型であればここだと思われます。 もちろん、ここ以外も十分に考えられますが……その事も考慮して、今回コアを発見できる能力を持つリバウ航空隊の坂本一飛曹に助力を乞いました」

「コアの発見はそれでどうにかできるとして問題はどつやって敵

のビームを掻い潜り、コアを破壊するのだが……少佐、君たちはどうやって破壊した？」

「……あまりほめられた方法とは言えませんが、戦艦からの艦砲射撃により敵のビームをそちらに引きつけ、その間に航空ウィッチが呐喊、コアを破壊しました」

「なんと……」

「リスクが高すぎる……」

「扶桑軍人は何を考えているんだ？」

とたん会場がざわつき始める

それはそうだろう……

もしネウロイが戦艦の艦砲射撃を迎撃していなければ、艦砲射撃とビームによって現場にいたウィッチが皆全滅しかねなかったのだ

一か八かの賭けにすらならない大博打である

といっても最初からそうだった作戦だったわけではなく、その時に起きたいろいろな不運が重なりそうになってしまっただけであるが
・
・
・

どうしてそんな作戦をとったかは身内の恥以外の何ものでもない
ので、語らないでおこう……

「……緋村少佐、ありがとう」

「は」

説明を終え、俺は席に座る

「諸君、今回の作戦にはこのような巨大な敵が目の前に現れたが、撃破した前例がない訳でないという事が解ってもらえただろう。……我々は何としてもこの作戦を成功しなくてはならない。その為には諸君ら現場の人間一人ひとりの協力が不可欠だ。皆そのことを胸に刻んでこれから働いてもらいたい……具体的な作戦の立案は明日だ。以上で本日の作戦会議は終わる、解散！」

ロンメル將軍はそう締めくくり、会議は終了した……

「少佐」

会議が終わり皆がぞろぞろと部屋を出て行く中、ローラント基地司令に声をかけられる

「ローラント司令どうかしましたか？」

「？君？に任務だ」

そういって、一つの指令書を渡す……

渡された書類に目を通す。

「……………分かりました、すぐに準備します」

「……………優刀」

任務の仕度の為に自室に戻ろうとする俺の背中に武子が声をかける

その声はどこか憂いを帯びているのを感じる

「……………明日には戻る。それまでは隊のこと頼む」

そんな武子に俺は振り返ることなくそう告げて、足早にその場を後にした

「 　　こちら第一部隊、所定の位置についた。第二部隊、そ
ちらはどうだ？」

『こちらも所定の位置につきました・・・』

夜

満月が辺りを幻想的に照らし、静寂が包み込む森林の中をつごめ
く黒きモノたちがいた。

その数、あわせて二十

しかしそのモノ達は件のネウロイではなく、その出で立ち風貌は
紛れもなく人間のものではなかった

「よし、全員所定の位置についたな・・・これより、我々は
この基地のIS部隊、シユヴァルツェア・ハーゼ『黒うさぎ隊』が保有する第三世代型IS
シユヴァルツェア・レーゲン『黒い雨』を奪取する。」

そう……彼らの目的はこの先の基地にあるが保有する一機のIS、彼らはそれを奪取するために今回、？組織？から選ばれた精鋭部隊である。

彼らは林の中を音も立てず疾走する。

彼らのその動きは洗練されていて、よく訓練された者たちであると観る者が見ればすぐさま見抜けるだろう。

「よし、もうまもなく基地の側面だな……第二部隊、そこらはどうだ？」

先頭を走る人物が、別働隊に連絡を入れるが……

『・・・・・・・・』

返事が返ってこない。

「どうした？応答しろ」

何度も呼びかけるがいくら呼びかけようともそのインカムから第二部隊の声は全く聞こえてこない

「第二部隊どうした！？ 応答しろ！ 何があった！？」

「た、隊長！！、前方に人影が！！」

突如、横にいる部下の声に前に顔を向ける

そこには一つの人影があった

その人物には見覚えがあり・・・

「お前は第二部隊の・・・」

そう彼は通信の途絶えた第二部隊の隊員であった。

「おい何があった！！ 他の隊員はどうした！」

「・・・・・・・・」

その問いに答えない第二部隊の隊員・・・・・・・・しかし彼はただ一言・
・・・答えた

「……………つ……………つよ……………い」

その場に崩れ落ちる隊員

その後ろに一人の人影……………

「き……………貴様は!？」

そこにいた人物……………それは

「今すぐ退け、退けば命は助ける………退かぬのなら………斬る」

白い羽織を纏い、その手には満月の光を反射して青白く光る扶桑刀

「緋村……優刀………!!」

目の前にいる者の名を忌々しげに口にする

彼らの目の前に立ち塞がるのは……扶桑の白き龍と言われる
エース、緋村優刀であった

「なぜ、扶桑の白き龍がこんなところに!」

優刀がここにいることが信じられないといった風に呟く。

355

此処は彼が駐屯するJG52基地ではない……それなのに何故
ここに彼がいる

ここが襲撃されると解っていたのか？

いや、この任務は組織でも少数しか詳しく知らされていない極秘
任務であったはずだ。

それをたかが一部隊の隊長が知りえる筈がない

「もう一度言う……退け、さもなければ斬る」

優刀は先ほどの言葉を淡々と繰り返す……

彼のその蒼い瞳にはいつももの穏やかさも、ネウロイとの戦いの際の厳しさもなく……ただ、ただ、相手を刺すような重く冷たい殺気が籠っていた

今の彼を見て、誰がああ扶桑の白き龍と呼ばれる少年と判るだろうか？

優刀が一步踏み出す……

「……っ!!」

優刀が放つその言いようのない威圧感に兵たちは飲まれてしまう

「構うな！殺せ……え？」

隊長格がその重圧に耐え切れなくなつて優刀を殺すように命じようとした刹那、命じ終わるよりも速くその胴体が袈裟状に切り裂かれ、生々しい鮮血が噴き出る音が夜の暗闇に響き渡る。

その動きはまさに神速

「な……なっ」

断末魔をあげる暇もなく崩れ去る隊長を部下たちは呆然と見つめ、掠れた声を搾り出すしか出来なかった。

「う、撃てええええっ！！」

仲間の一人がそう叫ぶと、皆いつせいに優刀に向かって射撃を始める……しかし、すでにその場所には彼の姿はなく、放たれた銃弾は、まだかるうじて息のあった隊長にそそがれることとなりその命を絶つ事となった。

「た、隊長!!」

「ち、ちくしょう……よくも!!」

「皆同士討ちには気をつける!! 一か所に固まれ!!」

そうしている間にも次々と優刀のその凶刃によって仲間が倒れていく……いかに彼らが精強な部隊であっても、目の前の理解しがたい状況に彼らの思考が追い付かない。

「くそおおっ!!」

「いたぞ！　そこだ！！」

優刀の姿をとらえた一人が銃弾を放つも、それを左右のステップを踏んで回避し、その距離を縮める。

相手の懐に入り込むと、刀を下から掬い上げるように振るってその両腕を断つ

赤い鮮血が弧を描き、斬り離された腕が宙を舞う。

「うをおっ！！」

後ろにいた兵が銃では形勢が不利とみてナイフを抜き放ち、突き出す。

その一撃を体を時計回りに捻ることで避け、その際発生した遠心力を加えた斬撃を相手に叩き込む。

そのまま、離れた兵へ錐もみ上に体を回転させ突進、その胸を斬り捨てる。

背後に回っていた優刀の倍は背丈がありそうな兵が優刀にその組

んだ剛腕を振りおろすがそれに対し、優刀はそれを下から峰に手を添えて振り上げると同時に跳躍する。

跳躍の力を得た一撃は兵の固く組んだ両手を斬り離し、顎を切り裂く。

そして優刀は倒れ行く兵を踏み台にしてさらに跳躍、空高く飛び上がり、更に次の敵へ頭上から襲い掛かる。落下の力を利用した縦一閃の斬撃を放ち、相手の腕を切り裂く。両断された傷口から噴水のように鮮やかな朱い血が噴きだし、その朱が暗い闇の中では月の光に照らされてその美しさが更に映える。

「ぎゃっ!?!」

その一撃を食らった兵は無様な声を上げてその場に倒れる。

そして倒れた彼の眼前に鮮やかな朱を吸っても尚、その淡い蒼白い輝きが損なわれることのない美しい扶桑刀の切っ先が向けられる。

「答える……お前たちの目的はなんだ？ 何が目的でISを集めている？」

その切っ先を向けたまま、優刀はその兵に問いかける。

「それに我々が答えると思うか？……」

「だろうな……少なくともお前たちは半端なテロリストどもじゃない。よく統率のとれた屈強な兵士だ。この程度の事で口は割らないだろうな」

この程度の事か……

内心で兵士は舌打ちする。

部隊をたった一人で壊滅させたことをこの程度という……

では、壊滅させられた我々は一体なんだというのだろうか？

しかもただ壊滅させられたのではない……彼らが撃ち殺した

隊長以外の兵は皆、虫の息ではあるもののまだ息をしているのだ

もちろんあと三十分もすれば出血多量で死ぬことになるだろうが、それでもかろうじて生きている。

もちろん、偶然ではない。

緋村優刀こいとうは殺せるのに殺さなかったのだ

「……我々をどうする気だ？」

「決まっている……情報部隊に引き渡す。あと少しで到着するからな。そこで何かしらの情報が得られるだろう」

そう淡々と言い放つ優刀

その間も兵士から視線を逸らさず、にらみ続ける。

「……………!!」

突如優刀は自身に向けられる鋭い殺気に気が付き、高く跳躍してその場を飛び退く

刹那

優刀がいた場所には無数の銃弾の雨が降り注ぎ、その場にいた兵士たちを物言わぬ骸に変える

その雨がやみ、優刀がその場に降りるとその場所にいた兵たちはもはや何者であったかわからないほど・・・それこそ動物に食い荒らされたかのごときその亡骸を無残に晒していた。

「なんだよ使えねえ奴らだな・・・たかがガキ一人にやられやがって、こんなことなら最初から私一人でやりゃあよかったぜ」

「貴様・・・！！」

優刀は声のした方に視線を向ける……

そこに現れたのは……

「まあいいさ！あたしがこの餓鬼をさっさとぶっ殺してISを奪えばいいんだからなあ！」

その身を黄色と黒の毒々しい色で染め、背中から八つの脚を生やす異形のISだった

.....

やっちまっ た~~~~!!

あんだけるる剣要素出さないようにしてたのに、要素出まくりじやねえか!!

くそう.....俺のばか、なぜその衝動に勝てなかったんだ.....

だつてしょうがないじゃない、好きなんだもの B

Y楯無(み お風)

というわけで、次回もるる剣要素満載で続けてお送りします

最後に、ご意見ご感想の方お待ちしてます!

誤字脱字、批判その他もろもろバッチコイです!!

では次回！！

どうもシユウ禅です

今回も前回同様、要素満載でお送りします。

ではどうもー！

「嫌な月ね・・・」

武子は部隊のオフィスの窓から空を見つめる。

彼女の見つめている空には綺麗な蒼白く光る満月が浮かんでおり、その柔らかな蒼い輝きで地上をこの世のものとは思えぬ程美しく照らしていた。

しかしその幻想的な美しい光景も、武子のその黒曜石を思わせる黒く美しい瞳には、月に照らされている世界が酷く脆い虚構の世界に見えてしまっていた。

少し前まではこの夜空が儂くも美しく感じられていたはずなのに、今ではその儂さが酷く脆いガラス細工のようで・・・ちよつとしたことで今の温かみを感じる幸せな日常が壊れてしまうのではないか？という不安に駆られてしまう。

そんなふうに一入窓の空を見上げています……

「窓辺に立って満月を見上げる一人の少女か……ふむ、絵になるな」

「ラル」

入り口の方から声がし、そちらに振り替えるとそこにはグンドユラ・ラルがいた。

「まだ寝ていなかったのか？……もう二時を回ってるんだぞ？」

ラルの言う通り、壁に掛けられた古ぼけた時計の短い針は確かに二時を指しており、基地全体が静まりかえっていることから昨夜が更けていることがわかる。

そんな夜が更けきっている時間にナイトウィッチでもなく、普段から規則正しい生活を心掛けている武子が起きているのは確かに珍しい事であった

「ラルこそ・・・こんな時間にどうしたの？」

だが、その規則正しい生活を送っているのは何も武子だけではない。

武子の目の前にいるラルもきちっと規則正しい生活を送る人間の一人で、その彼女がこうやってこの時間に起きているのであるから彼女も人のことは言えず、珍しい事この上ない。

「いや・・・なかなか寝付けなくてな、気分転換にコーヒーでもと
思ってた・・・武子も飲むか？」

「じゃあ、お願いしてもいいかしら？」

「わかった」

そうして給湯室に向かうラル。

しばらくしてラルはカップを二つ持って戻ってきた

「ほら」

「ありがとう」

ラルからコーヒーを受け取り、口に運ぶ。

「……おいしいわ、ラル」

「それは何よりだ」

互いに微笑む二人

「……」

「……」

しばらく二人は言葉を発することなく淡々とコーヒーを飲み続ける

「……なあ武子」

その静寂を破ったのはラルだった

「優刀あいつは今日も戦っているんだな……」

「ええ……」

そう、優刀かれは戦っている

どこの誰とも知れぬ者を、同じ？人？から護る為に……

「歯がゆいな……こうしてただ待っていることしかできないとは」

そう、こうやって二人で夜を明かすのは一度や二度ではないのだ。

以前から優刀に対して今回の様な任務に謎の襲撃者からの対象を護る任務が舞い込んでくるのが度々あり、その度に二人はこうやって夜を徹している。

そうして、ただ待っていることしか出来ないのが二人にとっては歯がゆくてしょうがなかった。

「そうね・・・けど、優刀は？それ？を望んでなんかいない」

過去に一度だけ共に連れて行くように言ったことがある

けれど、そのとき彼は頑としてその願いを聞かず、その理由を聞いた彼女達には一言だけ答えた

お前たちは？人々おれ？の？希望？なんだ

そう言って彼は出て行った。

その言葉に込められた彼の気持ちが嫌というほど分かってしまった彼女たちは彼に詰め寄ることはしなかった

そう、？私ウィッチ？達は人々の希望でなければいけない。

だからこそ、彼は人を傷つけるような事を私たちにさせたくなかったのだらう……

「まったく、人の気も知らないで……あいつは好き勝手やるから困る」

そう、ラルはふてくされたように言う。

その顔を見て武子は苦笑する

「ふふ、そう言わないの…… 私たちに来るのは、彼が帰ってきたときにいつものように笑顔で出迎えてあげる事だけなんだから」

「それはそうだが……ああ、まったく！ いい女を待たせるとは……あいつは女を泣かせるのだけは本当に上手いな」

「ふふ、そうね」

そう、私たちに出来るのは彼が帰ってきたときに笑顔
で出迎えてあげる事

う

だから、彼が無事に帰ってくることを祈る

「貴様……いつたい何者だ」

「優刀は突然現れた襲撃者を睨み付ける」

「ああん？ 知らねーのかよ、悪の組織の一人だつっの！」

そういつて、異形のISのパイロットはそその口端を釣り上げる。
パイロットのその容姿が整っている分、その笑みは一層不気味だった。

「その悪の組織は随分と人材不足なんだな」

「……ああん？」

優刀の一言にパイロットは今度はその眉根を釣り上げる

「お前程度の三下がISパイロットなんて……その悪の組織の程度が知れるな」

そういつて優刀はふっ…と鼻で笑った

「てめえ……このオータム様と？ファントム・タスク亡国企業？に喧嘩売るとはいい度胸してんじゃねえか」

「そうか、やはりお前たちは？ファントム・タスク亡国企業？だったか」

「！！ てめえ！嵌めやがったな！！」

その女 オータム は自身が嵌められたことに気づき、怒りを露わにする。

しかし優刀はその怒りもどこ吹く風、さらに続ける。

「この程度の事にも気づかないなんて……やはり三下だな」

「てめえ……ガキの癖にふざけた真似しやがって！ てめえもこいつらみたいにミンチにしてやらあつ……！」

オータムはそう叫ぶと背中から生えた八つの装甲脚……その先端が割れるように開き、中から銃口を見せる

「っ……！」

その銃口が見えるや否や優刀は横に跳ぶ

直後、その鉛色の雨が襲う

「はっはあ……！ おらおらあ！ 逃げる逃げるお……！」

オータムは優刀の後を追うように、実弾射撃をを行う

優刀は何とか追いつかれまいと横に駆け続ける

そして、優刀が避け続けているとオータムは手にマシンガンを呼び出し、優刀に向けて放つ

先ほどよりも密度を増した鉛弾の豪雨が優刀を襲う

「おらおらあ！さっきまでの威勢はどうした！？ 逃げてばかり
でよお！ そんなんじゃあたしに殺されちまうぞあ！？」

それを避け続ける優刀

「・・・ふっ！」

防戦一方の優刀・・・

躲し続ける最中、突如優刀は手に持つ扶桑刀を神速で地面をえぐる様に勢いよく振りぬく。

衝撃で土砂が巻き上がり、剣を振ったことによって生じた衝撃波と共にオータムに襲いかかる。

「はっ！！馬鹿があ！ 目くらましのつもりかあ！？」

たかが土砂・・・

そう思ったのが彼女の命取りであった

「がっはあっ！？」

突如、オータムの体に痛みが走る

その土砂はISのシールドバリアーを突き抜けてオータムに襲い掛かってきた

肉体は絶対防御という機能で守られている為に傷つきはしないが、その痛みまでは消してくれない

その事実には彼女が驚愕していると

「なっ！？」

突如、その目の前に優刀の姿が映る。

そして……………

紫電一閃

優刀は扶桑刀を右に薙ぎ、オータムの体に衝撃が走る

「ぐうっ!？」

「っ、浅い……………」

その場から飛び退くオータム

その表情は困惑と驚愕、怒りが無い交ぜになって醜く歪んでいる

「……………てめえ、一体どんな手品使いやった」

「……………」

オータムの殺意を込めたその問いに優刀は何も言わず、ただその蒼白い輝きを放つ刀を構え、殺意を持って答える。

「てめえ、何者だ！？ 答える！！」

「……………扶桑国空軍遣欧部隊第281航空隊隊長、並びに義勇統合戦闘飛行隊隊長、緋村優刀だ」

優刀は刀を鞘に納める

そして左足を後ろへ下げ、腰を軽く落とし、左手は腰に差した鞘を掴み構える……………

その構えを取った瞬間、優刀から今までとは比べ物にならないほどの殺気が放たれオータムを包む。

それは殺気といつには優しく……もはや、それとは一線を画する。

「っ……！！ くそがあああっ！！！」

身に走る恐怖に耐えきれなくなったオータムはその根源である者を亡き者にすべく、跳ぶ

宙に舞う影……………

「があああああつ！！？」

聞こえてくるのは自身の悲鳴……………

そして、オータムは宙を舞う……………

はらはらと、黄色と黒の破片をまき散らしながらその身は落ちて
いく……………

何が起きた？

オータムには理解できていなかった。

自分は奴を殺すために跳んだのではなかったのか？

確かにいま自分は跳んでいる　　けれど、そこには鋭さなくただ自分は墜ちて行っているだけだ

視界の端にはあの餓鬼の背中が映る……

なぜ、後ろ姿なのだ？

自分は真正面にいたはずだ

いくら考えてもオータムにはその理由が解らなかった。

そして、オータムの体は地面に叩き付けられる。

「がはっ！！」

その衝撃がオータムに襲い掛かる。

しかしその痛みは先ほどの痛みとは比べ物にならないほどであり、意識が飛びそうになる。

「あ……げ……」

(なぜ、絶対防御が発動しない?)

「そう言おうとしたが、言葉がうまく出ない

それどころか、全身の感覚がない……」

動かせるのは目ぐらいである……」

「さすがはISの絶対防御だな……あの一撃を食らって
もまだ生きているとは」

「……あ、が」

声のする方に目を向ける……しかし首も動かさないので眼だけがそこに向く。

視界の端に足が見える

「まあ、死んでいない方がこちらにも都合がいい……これが基地でいろいろとしゃべってもらって、覚悟しろ」

「……な……ぜ」

「ん？」

「な……ぜ……て……え……き……い……？」

なぜてめえが生きている

その言葉にしようとしたが、言葉にならなかった。

だが、彼には伝わっていたようで……

「俺が貴様を斬ったからだ」

そう答えた

抜刀術……

それが優刀がオータムに放った一撃の正体である

抜刀術……それは刀を鞘に納めた状態から抜き放ち相手に一撃を加える術であり、その最高度にまで高められた刀を抜くまでの体術の精妙さは極めて洗練された剣術で知られる扶桑剣術の中でも最高峰であり、一つの到達点とされている

その鞘走りからなる斬撃の速度と、強力無比な一撃の反面、外してしまうと無防備になる為、使い処の難しい極めて高度な技術でもある。

そして、その抜刀術は扶桑剣士の中でも指折りの実力を持つ彼が最も得意とする技であり、彼の流派の真髄である

優刀はオータムが飛ぶと同時に抜刀術の一撃を放った。

その一撃は彼女のISのシールドバリアーを裂き、絶対防御を極限まで発動させた。

しかしそれでもなお、その衝撃は収まることなくオータムに襲い掛かり、彼女を墜としたのだ。

「く……………そ……………が……………あ」

睨み付けるオータムの視線を無視し、その身を持ち上げようとす
る優刀

そこへ……………

突如、優刀に向けて一つの赤い閃光が襲い掛かる

「つう!?!?」

間一髪、察知した優刀は飛び退くことでそれを避ける

しかしそのあとを追うように閃光は次々優刀に襲い掛かり、ついには彼を捉える。

「くっ!!」

障壁を展開し防ぐ

閃光が現れた方に目を向ける

鬱そうと生い茂る木々の間をその速度を落とさずに飛来する青い
機体

その間にも優刀への攻撃を辞めずにオータムとの距離を広げさせる

「迎えに来たぞ、オータム」

その青い機体はオータムのそばに降りる

「て・・・め・え・・・な・・・ぜ」

「あの？女？からの命令だ・・・作戦は失敗した、退くぞ」

そういつて、謎の襲撃者は優刀の方に顔を向ける

しかしその顔はバイザーに覆われていて口元しか見えない

「緋村優刀・・・貴様はいずれ私が殺す」

その言葉に込められた明らかな殺意・・・それを感じた優刀は同じように殺意を向ける

「貴様・・・何者だ？」

「答える必要はない・・・ではな」

「……っ待て!!」

そういつてオータムを掴み、飛翔する青の襲撃者はそのまま満月の夜に溶けていくように消えて行った……

「…逃げられたか」

襲撃者が飛んで行った方を睨む優刀、そして

「そこにいるのはわかっている、いい加減出てきたらどうなんだ？」

ある一本の木を見据える

その後ろから出てきたのは……

「あらら、ばれちゃった」

自身の部下である更識楯無、その人がいた。

「すごいわね、結構自信があっただけど……いつ気づいたの？」

「あの青い襲撃者が来たあたりだ……もう一つよく知った気配を感じたからな」

「そう……さすがね緋村優刀ね、なんだか私がここに来た意味

が無くなっちゃっわ」

楯無がここに来た理由……それは優刀と同じだろう。

彼女の家は代々、暗部に対抗するための暗部、そして彼女はその家の当主という事を優刀は知っている

「いや、そうでもないさ……」

優刀は刀を振り、その刀身についた血を払い落とし鞘に納め、息をなく

その場に漂っていた、言いようもない重い空気が消える。

「更識は内部の警備に当たっていたんだろ？ おかげでこっちは遠慮なく戦えた」

そういつて穏やかな笑みを彼女に向ける

「そう……」

その笑みに更識は同じように穏やかな笑みで返す。

そうやって返したものの、更識の内心はかなり動揺していた

全くこの男は……どうしてそういう笑顔を簡単に人に向けるのだろうか……

気を抜くと一瞬でその笑顔に落とされてしまうではないか。

ラルが女たらしと言っていたことが良く分かる。

「……それにしても驚いたわ。まさかISを生身で倒しちゃうなんて」

内心の動揺を悟られまいと本日一番の珍事に話題を変える

ISを生身で倒す……

ISが世界最強の兵器として認識されている今、目の前で起きた

出来事はそれがいかに幻想かという事を知らしめた。

無論、更識とてISが強力な兵器であって絶対無敵な兵器ではないと分かつてはいるものの、ウィッチであつてもまさか生身でISを倒す人物が現れるとはさすがに思わなかった。

それこそ奇想天外、青天の霹靂としか言いようがない。

しかし、それに対して優刀は・・・

「いや、今回はこっちを侮っていたから勝てたようなものだ。もう少し向こうが冷静だったら、こっちが殺されていた」

そう優刀は淡々と答える。

「そうね・・・」

更識は優刀の言葉に同意するように頷く。

今回はたまたま運が良かったただけだ。相手がこっちをなめてかか

り、優刀はその隙をついて一気に圧倒したに過ぎない。

実際、敵は空を飛んで上からじつくりと長期戦に持ち込めばよかったのだ。

もちろん、その対処方法もあるにはあったが、それを使うのはあくまでもどうにもならない時、最後の最後、いわば奥の手であり、それを使わなくて内心ほっとしている。

そしてさすがにもう一機出てきた時には覚悟した。

あのまま戦闘を続けていれば、間違いなく優刀は殺されていた。

いかに優刀といえもう一機ISを相手にするのはさすがに無理がある。

ましてや敵はアウトレンジから攻撃してきたため、生身の状態では相性が悪すぎる。

そういう訳で敵が退却してくれたことは行幸、あるいは奇跡としか言いようがない。

それでも・・・と更識は思う。

「それでも、やはりすごいわ・・・・・・・・さすがは最強の剣術、飛天御剣流の使い手ね」

「……………知っていたのか？」

「ええ、もちろん」

そして更識は語りだす……………

「飛天御剣流……………戦国時代に端を発する古流剣術で。その名が示す通り、その使い手は天空を飛翔するかの如き跳躍力を持って相手の遙か上空から斬撃を放ち、その身のこなしや斬撃の速さは「神速」とまで謳われる最強の剣術。ああ……………でもまさか幻とまで云われる剣術を使っている人に出会えるなんてびっくりだったわ！！」

「随分と詳しいな、おい」

嬉々とした様子の更識に優刀が少し引いている

それはそうだろう、まさかここまで更識が熱を上げて饒舌に話すのだ。

はたから見ればディープな格闘マニア以外の何ものでもない。

「それにしても、さっきの抜刀術すごかったわ。まさかあんな

一瞬で間合いを詰めて敵の懐を一閃、その衝撃に相手は宙をに浮いてしまふんですもの、その威力は推して図るべしね！」

引いている優刀を気にもせず、更識はそのボルテージを上げていく。

そんな更識を放っておくことにした優刀はある方へ目を向ける。

そこには先ほど、オータムによって肉塊へと変えられた兵たちの亡骸があった

「隊長……もしかして、後悔してる？」

いつの間にやら素に戻った更識がそう聞いてくる

「……後悔なんてしてないさ」

正確には優刀が殺した訳ではないが、そう言った要因の一つは自分にあると優刀は思っている。

「……結果はどうあれ、俺は彼らをこの手で斬った、その事実は変わらない。であるならば、そのことを後悔するなどあつてはならない……彼らの命を奪ってきた以上、その行動には責任を持つべきだ……そしてそれを罪と思うなら、彼らの命を奪ったことは決して無駄ではなかったと、より多くの人々を救うことで示していくしかない……と俺は思ってる」

そう優刀は淡々と語る。

「そう……よかった」

そうしてまた更識は優刀に微笑みかける。

「ん、どうしてだ？」

「だってあなたはちゃんと自分のした事と向き合ってる。己の罪を認め、どう贖罪をしていくかきちっとその答えを持っているんだもの」

彼は優しい少年だ。

そのことを改めて更識は感じた。

彼はどこまでも優しくて、そして強い。

これが緋村優刀。

これが扶桑最強の剣士

力だけでなく、その心までが強くそしてきれいだ。

そう、更識がしみじみ感じていると、いくつかのの明かりが見えてきた。

優刀が言っていた情報部の者たちだろう。

「さてと……帰るか」

「ええ、そうね」

そうして二人はそちらに向かって歩き出す……………

不意に優刀が立ち止まり、亡骸に視線を向ける

そして……………

「せめて来世では幸せに生きてくれ……………」

頭上には蒼く光る満月……………

優刀のその願いは、優しい蒼い光の中に溶けて行った。

いかがでしたでしょうか？

すいません、実は最初から優刀に飛天御剣流を使わせようとはず
っと思ってたんです。

オリ主を書く以上はやはりかつこよくないといけないな〜とか思
っていたら、やはり剣術は外せないだろうとおもいまして・・・
で、結果最強の剣術とは？と考えたら一番に浮かんだのは飛天御剣
流でした。

でも、さすがにもろに出すのはいかがなものかな？ とか考えて
たんですけど自分で考えた技はどうにも優刀には合わず、結果開き
直って

.....もういいじゃん、使っちゃいなよ you!!

.....というわけです。

飛天御剣流は技もそうですが、その流派の理が以外にもウィッチ
との相性が抜群という事に気づきました。

今回は再びウィッチの話に戻ります。

最後にご意見ご感想の方、お待ちしております。

感想が来たら作者のテンションがキタ

(。。(

！！！！！！　　って感じに上がって喜びますのでジャンジャン送
ってください

批判その他もろもろバツチコイです！

それでは、また次回！！

追記・・・PV33、787アクセス、ユニークアクセス5、
248人

ありがとうございます！！こんなに見てくれる人がいてくれて嬉
しくて嬉しくてしょうがないです。

これからもがんばりますのでどうかよろしくお願いします。

EP・14 譲れない誇り(前書き)

どうもシユウ禅です。

いつの間にか日付が変わっていました・・・

どういわけだEP・14です

それではどうぞー！

クラカウ攻略作戦を一週間後に控え、JG52基地ではその所属する者たちが日に日に慌ただしく動き回っていた。

整備班、補給班はもちろんの事、基地の管理を任されている施設班も作戦に参加する部隊の受け入れ準備の為に奔走している。

もちろん義勇統合戦闘飛行隊の面々も同様で、本日到着する増援の受け入れの為に奔走していた。

「土田班長、整備班の方はどうですか？」

格納庫に赴いた俺は増援のストライカーユニットの受け入れの為に予備の発着台を準備している土田班長に聞いた。

「はい、発着台の準備も万端です。あとは彼女たちが来るのを待

つばかりです」

「そうですか……補修部品の方は？」

「はい、あちらさんが使用しているのは少佐の？十二試艦上戦闘脚？の生産モデル、？零式艦上戦闘脚？ですから今回は補給の手間がだいぶ省けました」

「それは良かった」

そうして班長はつぶやく

「……しかし零戦ですか、こっちにも回して貰いたいですね」

班長の言葉に頷いて同意する。

俺が使っている十二試艦上戦闘脚は名前からもわかる通り試作機であり、本国では既に採用モデルである零式艦上戦闘脚が量産され、リバウ航空隊を始めとする航空母艦所属の部隊に配備され始めている。

先日、同じように試作機のテストを受け持っていた武子の方は先行試作型の『隼』吉型から『隼』弐型へと変わったというのにいまだに自分の方はいまだ試作機であるというのは少し悔しかったりする。

ちなみに、俺が今使っているユニットはテストが終了した後、俺と土田班長、フェデリカが精度の高い部品をわざわざ選んで、一から組み上げたエンジンをつみ、フレームも出来る限り強化したカスタムユニットである。

おかげで出力は一割ほどアップしているのだが最近ではネウロイの方も強力になってきており、十二試の出力の低さに頭を悩ませているのだ。

ある程度は技術でカバーできるものの、やはり新型が出力アップ型があるなら早く乗り換えたいというのが本音だ。

しかし、一向にこちらに回ってくる気配はない。

まあ、ウチの部隊は空母所属の部隊では無い為、回ってこないのは当たり前なのだが……

「俺もいい加減零戦にしたいんですけどね……そうだ、いっその事エンジン付け替えるか？」

零戦は十二試のエンジンをより馬力のあるエンジンに載せ替えただけなので、やろうと思えば出来る事に気が付く

だったら、もっと馬力のあるマーリンでも乗っけようかな

うん、我ながら名案かも知れない

とか考えていると……

「マーリン乗っけようとか勘弁して下さいよ？……零戦のエンジンに付け替えるだけならいいですけど、マーリンなんか乗せたらそれこそ空中分解起こしますよ？ 何せ機体強度が弱いとこまで？ オリジナル？ と似ているんですから」

「……ばれました？」

さすがは土田班長

だてに扶桑海事変から俺のユニットの整備を担当していたわけじゃない

考えていることがバレバレである

「いい案だと思ったんだけど……まったく、宮藤博士もなんでそんなところまで原型に似せるのかね、そんな必要ないだろうに」

「いい人なんですけどねえ・・・」

二人して設計者のあの人のよさそうな顔を思い浮かべる。

宮藤一郎博士・・・・・・・・

魔導エンジンの権威で、エンジン背負い式であったストライカーユニットをエンジンをユニット内に納めるようにした理論「宮藤理論」を完成させ、「ストライカーユニットの父」とも呼ばれている扶桑の研究者である。

その博士が開発したのがこの十二試艦上戦闘脚なのだが、なぜ短所までオリジナルに似せたのかはテストパイロットとして共に過ごした事のある俺にも今一つ理解出来ない。

今度あったら文句の一つでも言ってみよう

そんなふうに二人して話している・・・・・・・・

「少佐!！」

格納庫の入り口の方から聞きなれた声がして、その方へ視線を向けるとそこには……

「マルセイユどうした？ 弾薬の在庫確認は終わったのか？」

自身の二番機である新人ハンナ・ユステイーナ・マルセイユ少尉と一緒に在庫確認をしていたラルがいた。

「二人とも、在庫確認は終わったのか？」

「ああ……これがそのリストだ」

そう言ってリストを渡してくる

「ありがとう……やはり薄殻魔法榴弾マインゲシヨスが足りないな」

薄殻魔法榴弾マインゲシヨス……

その名の通り、魔法力を用いた炸裂弾でその威力は折り紙つきである。しかしその分製造が難しく、なかなか前線に行き渡らないという、一発が非常に高価な弾丸である

「ああ、フェデリカもそう思ってロマーニヤ上層部に掛け合っているらしいんだがな、必要十分な数を揃えるのは厳しいらしい」

ちなみにこの薄殻魔法榴弾マインゲシヨス、使用できる銃が限られており、フェデリカの使うMG151/Rの様な機関砲とでないと、発射時の衝撃に銃自体が耐えられないという非常に使い勝手の悪い、使う者に高い技量を求められる銃弾である。

「今のままだと精々一弾倉分が限界か……しょうがない」

無いものをあれこれ言ってもしょうがない、どのみち使うのはいつもMG151/Rを使っているのはフェデリカのみで一弾倉であれば彼女ならどうにかなる。

すでに申請はしてあるので作戦までに十分な数が間に合うようであれば無駄撃ちをしないラルに使ってもらおう。

「そうだ優刀、お前にお客人だ」

ふと思い出したようにラルがいい、入口の方を指さす。

「俺に?・・・」

ラルに促されそちらを見る

腕を組み、入り口に片膝を立てて寄りかかる見慣れない制服を着

た少女がいた。

あの制服は確か

「やっと見つけたわ、緋村優刀」

ふっと小さく笑みを漏らし、その頭のツインテールが揺れる。

こちらに視線を向けようとするが……

「嬢ちゃん、通行の邪魔だっ！！さっさとそこ退いてくれ！！」

「ご、ごめんなさいっ！！」

外から大きな荷物を運んできた整備員に怒鳴られ、すごすごと退く少女。

さすがは現場叩き上げの整備員、そんじょそこらのごころつきとは迫力が違う

整備員その迫力に先ほどの気取った雰囲気とは打って変わって完全にビビッていている

普段は気のいい整備員の人達も、今は大きな作戦前で皆気が立っている。

そんな中、入り口であんなふう立たれていたら邪魔以外の何もでもない。

怒られたのがよっぽど怖かったのか、他の整備員の邪魔にならないうちにそそくさとこちらに歩いてくる少女

少女は扶桑人とよく似ているが微妙に違う。扶桑人の温和で誠実さを感じさせる瞳とは似ていて非なるもので、その瞳は鋭角的で艶やかさを感じさせる。

体からはあふれんばかりの活気がとらえられ、彼女のイメージを表すとしたらズバリ、雌豹といった所である

「ん、んん！・・・久しぶりね優刀。元気そうで何よりだわ」

気を取り直してまたさっきの気取った口調で話しかける

けれど、その姿はエディータと同じくらい小柄な体格の所為で背

伸びした子供のようである。

その少女を見て俺は……

「……どちら様で？」

そう返すのが精一杯だった。

「へ？」

少女が呆けた顔をしている。

どうやら、彼女は俺のことを知っているようだが俺の方はまるで
覚えがない。

どこかであっただろうか？

今一思い出せない。

「ちょ、ちよつと！．．私よ私！、覚えてないの！？」

「うん、人の顔は一度見たら忘れない方なんだけどな．．．
済まない覚えがない。どこかであったか？」

「そ、そんな．．．．．」

少女は目に見えて落ち込む．．．

彼女には悪いが本当に覚えていないのだからしょうがない。

「おい、優刀。思い出してやれ、いくらなんでもこの姿はいたたまれない」

その姿を不憫に思ったラルに思い出すようせかされてしまった。

「そんなこと言われてもなあ……」

すると……

「ま、まあ会ったのはもう5年前だもんね、覚えてなくても当然
だわ!」

そう結論付けて少女は復帰する

立ち直り早いな……

「私の名前はファンリンイン 鳳 鈴音……IS中連国家代表候補生よ!!」

「ファンリンイン 鳳 鈴音……おお、思い出した!」

その名を聞いて思い出す。

彼女の名前はファンリンイン 鳳 鈴音

扶桑の西南に位置する国、中華人民連邦の出身で小学四年の時に

実家の近所に転校してきてよく遊んだ仲であった

「ようやく思い出したの……一体、同級生を忘れるとかどういう頭しているわけ？」

「……いや、そんなこと言われてもな」

彼女が転校してきたのは小学4年の春ごろ……その年の秋に俺は全寮制の軍付属小学校に転校してしまったために実質一緒の学校に通っていたのは三ヶ月ほどで、後はたまたま外で会うくらいだったので覚えているという方が無理だろう。

「まあいいわ、思い出してくれたわけだしね」

「いや、悪い悪い……どうにも小学生の時のことは思い出しくくてな」

「ま、あんたの場合しようがないって言えばしょうがないんですけどね」

どっちら許してくれるよつだ。

そう言えば、こいつはさばさばした奴だったな……話しているうちにどんどん思い出してくる。

「それで鈴、お前いつの間に代表候補生なんかになったんだ？」

「アンタこそ、何、ウィッチ部隊の隊長なんてやってる訳？ ニユースで見たときはびっくりしたじゃない」

「ま、いろいろあってな。話すと長くなるんでそのうちにな」

そんなふう二人で話していると……

「優刀、いい加減に私たちの事も紹介してもらっていいか？」

「ああ悪い……鈴、彼女はうちの部隊のウィッチ、グンドユラ・ラル」

「グンドユラ・ラルだ……気軽にラルと呼んでくれ」

「ファンリンイン 鳳 鈴音よ……私の事も鈴で構わないわ、よろしくね」

そう言って二人は握手を交わす

「でこつちが……」

「……ハンナ・ユステイーナ・マルセイユだ。？少佐？の二番機を務めている」

やけに俺の二番機であることを強調して自己紹介をするマルセイユ

「ふぐん、そうなんだ」

鈴はマルセイユをじろじろ品定めするよつに見る。

「初めまして、よろしくね」

「ああ、こちらこそ」

そうして挨拶を交わす二人の間で火花が散ったような気がした。

「ほら、二人ともそこまですておけ・・・それで鈴、お前は優刀に何か用があったんじゃないのか？」

「ああ、そうだったわ！ すっかり忘れる所だったわ」

ラルの言葉で鈴は用を思い出したのか俺に尋ねてきた

「ねえ優刀。アンタの部隊って今隊員が十一人って本当？」

「そうだが、それがどうかしたのか？」

「お願い！！ 私も部隊の一員として今度の作戦に参加させてっ
！！」

そう言って、バシンと手を合わせて拝むように頼んでくる鈴

それに対して俺は・・・

「ムリダナ」

「早っ！！！」

人差し指でバツテンをつくり即答。

「ちよっと！いくらなんでも速すぎでしょ！もうちよっと考える
とかない訳！？」

さすがに納得できなかったのか鈴は詰め寄ってくる。

「いや、今回はもつすでに増援を手配済みでな。増援合わせて1
4人・・・さすがにこれ以上は戦力過多になるから俺の指揮下
には置けない。」

「そこを何とか！！」

さらに深く拝む鈴。

「て、言われてもなあ・・・大体なんでわざわざそんな頼みをしてくるんだよ？ お前のほかにもISは来ているんだろ？」

さすがに鈴一人でこの作戦に参加するとは考えられない、ほかのISも来ている筈だ。

その者達は今回作戦に参加しようとはしないのか？。

代表候補生で欧州に派遣されているという事は専用機のデータ取りもかねてなのだろうから余計に部隊単位で動くべきだろうに。

そんな疑問を感じていると鈴が観念したように口を開く。

「・・・実はもともと中連わたしたちはブライク攻略作戦に参加するつもりだったの。けれど向こうの作戦司令部に行ったら今回の作戦にIS部隊は要らないって言われて追いつ返されちゃったのよ」

「・・・なるほどな、それでこっちに？」

「ええ、でもこっちでも似たような反応でね・・・作戦の総予

備部隊として運用するって、言われたわ。」

なるほどな……

ロンメル將軍のその判断は正しいと思う。

ISのパイロットは戦闘機パイロットやウィッチ達と比べると明らかに稼働時間が少なく、錬度が低い。

代表候補生と言われる者たちもその例にもれず、前線ではその錬度の低さが指摘されてきた。

錬度の低い兵がいるというのは戦場では弱点以外の何ものでもない。

だったら、予備部隊として後方で待機してもらった方がよほどいい。

「でもそれじゃ国としての面子が丸つぶれだから何とかして作戦

に参加させてくれって言ったら・・・何とか専用機持ちは前線に立たせてもらえることになったんだけど・・・」

「何処の部隊も専用機を扱いたがらないという訳か・・・」

「ええ・・・」

実際、土壇場で入れると言われれば、かなり嫌がられる。

ISを部隊でどう扱えばいいのかというのも問題の一つなのだろう。

更に専用機と言えばいろいろ特殊である為に特にである

だからISとの混成部隊であるうちに何とか入れてもらおうとしたのだろうが・・・

「でも、やっぱり無理だ。」

今回、あの超大型ネウロイ？山？がいる

俺達はその山を破壊する挺身部隊である。

高度な連携が求められる以上、そこに不確定要素を入れたくないというのが本音だ。

「ああもう……どうすればいいのよ……」

がーっと叫び声を上げる鈴

……そこへ

「……濟まない、緋村少佐はいるか？」

入口の方から毅然とした澄んだ声が聞こえ、

JG52第二飛行隊隊長、ゲルトルート・バルクホルンが現れた

「トウルデー、どうかしたのか？」

「ああ、作戦の細かい確認をしておこうと思ってな、お前達の露払いをするのが我々の任務だからな、不備があってはまずい。」

相変わらず生真面目な奴だ。

そう思っていると……

「優刀、彼女は誰だ？」

トゥルーデは鈴に目を向ける

「ああ、彼女は……」

「初めまして、私はIS中連国家代表候補生の鳳ファンリンイン 鈴音よ、よろしく」

「ゲルトルト・バルクホルンだ。よろしく」

挨拶を交わす二人を見てふとあることを思いつく。

「そうだトゥルーデ・・・確かお前の部隊一人欠員出てたよな？」

「ああ一人風邪をこじらせてな・・・今は後方で療養している」

「だったら、鈴をトゥルーデの部隊に入れてもらえないか？」

「・・・どういふことだ？」

トゥルーデに事のあらましを説明する

「なるほどな・・・事情は良く分かった」

そう言ってトゥルーデは頷く

「え・・・じゃあっ!!」

鈴の顔に喜色の色が浮かぶ。

「済まないが・・・私たちの部隊に入れるわけにはいかない」

トウルーデは冷たく言い放つ。

「そんな・・・」

「今回の作戦いかなでは欧州の運命が決まる・・・そんな作戦で不確定要素の多い者を入れるわけには行かない」

「だろうな・・・」

「ちよつと優刀！最初からわかってたの!？」

鈴にもものすごい形相で睨まれる。

目にはうつすらと涙が見える

それはそうだろう、はたから見れば俺は鈴に希望を持たせという
思いつきりどん底にたたき落としたのだ我ながら酷いとは思う。

だからこそ俺は彼女に？ある提案？をする。

「だからトゥルーデ……一つ提案があるんだが」

「なんだ？」

「一回、こいつの戦いを見て決めたらどうだ？」

「なんだと？」

「一回、こいつの戦いぶりを見てから決めても遅くはないんじゃないか？」

要するに実力が分からないから扱いに困るわけで、だったら実力

を見せてしまえばいい……

それで実力が無いようであれば断ればいいし実力があろうと思っ
たら使えばいい

至極単純なことだ

「なるほど……よし、いいだろう」

トゥルーデは納得したように頷く。

「決まりだな」

「早速、準備してくる」

そう言って格納庫を出て行くこととするトゥルーデ……

「ちょっと待った」

その背中を声をかけることで引き止める

「なんだ、まだ何かあるのか？」

「おおありだ・・・お前が戦ってどうする」

「実力を見るんだ、自分で戦ってみなくてどうする」

至極真つ当な意見を言うトウルデー

しかし・・・

「鈴、お前ISの稼働時間ってどれくらいだ？」

「えっと・・・300時間ぐらいかしら？」

やっぱり……思った通りだ

「……優刀、本当に使えるのか？」

かなり訝しむトゥルーデ……

戦闘機パイロットにしてもウィッチにしても前線に出ている新人で総飛行時間が300時間程度という新人はまずいない。

だからこそトゥルーデは訝しんでいるのだが

「俺にもわからないから見てみるんだ」

百聞は一見にしかず……

とりあえず見る。

話はそれからである

けれど300時間程度の新人が、カールスラントでも指折りのエースであるトゥルーデ相手に勝負を挑んでも瞬殺されるのがオチだ。

だったら、もっと技量が近い者で全力を出させたほうがいい

だから……

「マルセイユ、お前が相手しろ」

傍にいる自身の二番機、マルセイユに声をかける

「ええええっ！？ 私が相手するのか！？」

まさか自分が戦うとは思っていなかったのか、マルセイユはかなり驚いている。

「お前がどれくらい成長したか確認したかったからな、ちょうどいい機会だ……マルセイユ、俺の二番機ならこの程度の試練乗り越えて見せる」

「少佐……」

その俺の言葉にマルセイユは頷く

「そこまで言われたらしようがないな……いいさ、やってやる!」

「上等じゃない、やってやるわよ……私が勝ったら作戦に参加させてくれるんでしょうね?」

「ああ、貴様がマルセイユに勝った時は私の部隊に入れて作戦に参加させてやる」

「ふ、ふふ……」

「ふ、ふっふっふ……」

火花を散らす二人……

二人には互いに譲れないプライドがある。

・
・
・
・
・
その二人の互いの誇りをかけた戦いが、今始まるうとしていた・
・

Ep-14 譲れない誇り（後書き）

セカン党のみなさんお待たせしました。

鈴、満を持して登場です

クロスである以上、きちつと原作キャラ同士の絡みも書かねばいけないなあと思ひまして原作を読み返したところ、

鈴の意外に冷静な部分を発見しまして、予定より早い登場という事となりました。

原作を読み返したおかげで危うく鈴は唯のかませ犬になる所を何とか脱出しまして個人的には良かったなと・・・

というわけで今回はマルセイユ対鈴です。

今回はバトルメインで書きたいなと思います

最後になりましたがご意見ご感想、お待ちしております！

ではまた次回！！

Ep. 15 Eigene Magie (前書き)

どうもシユウ禅です。

遅くなってしまい申し訳ありません

ではどうぶー！

太陽がJG52基地の真上に入った頃、

基地の滑走路には模擬戦の話を聞いて集まった大勢の人だけが出来ていた。

人だかりの視線の先には二人の人物。

マルセイユと鈴だ。

マルセイユはストライカーユニット、メッサーシャルフBf109-Eを装備して、

鈴はIS『シエンロン甲龍』を身にまとい、模擬戦開始の合図を待っている

鈴のIS、『シエンロン甲龍』は更識やフェデリカのISの無駄のない洗練されたフォームとは違い、アンロック・ユニット非固定浮遊部位の棘付き装甲が特徴の攻撃的で無骨な印象の機体だ。

「ルールは単純、鈴はシールドエネルギーが零、マルセイユは規定値以上の魔法力使用で撃墜判定とする。装備は自由！同高度ですれ違った時点から模擬戦開始よ」

「了解ッ！」

審判は例によって武子

ルールを説明すると彼女は一足先に上空へと飛翔する

「では、始め！」

優刀の開始の合図とともに二人は蒼穹へと飛翔する。

「さて……どっちが勝つかな」

二人の駆けあがる姿を見てラルは呟く。

「……………」

その二人をじっと睨むトゥルーデ。

「……………トゥルーデ不満そうだな？」

「……………そんなもの別にない」

その声には若干のいら立ちが含まれていて不満があることは誰の目に見ても明らかであった。

「やれやれ、まったくいい加減にしたらどうだ？ 焼きもちなん

てらしくないぞ?」

ラルはからかう様にバルクホルンに笑みを向ける

「なっ!!! だ、誰がマルセイユに焼きもちを焼くか!!!…私はただ、マルセイユが未だに軍人をやっているのが信じられないだけだ。」

「また、ずいぶん前の話を……」

「優刀はあんなチャラチャラした奴の一体どこが気に入ったんだ? それこそ信じられん」

ドンドンぶてくされていくバルクホルン。

その姿を見て、ラルは思いっきりからかいたい気分であったが今は置いておく。

「はっはっはっは!!! 確かにぶっ飛んだ奴ではあるな……配属初日に他の部隊の模擬戦に乱入する大馬鹿者なんて早々いない」

当時のことを思い出し、大笑いするラル

ハンナ・ユステイーナ・マルセイユ……

義勇統合戦闘飛行隊に所属する新人でその入隊にはひと悶着あったのだ。

彼女は本来はバルクホルンの部隊JG52第二中隊に所属する筈であったのだが、配属初日に他部隊である義勇統合戦闘飛行隊の模擬戦に突如乱入し、隊長であった優刀に模擬戦を申し込むということでもないことをしでかしたのだ。

「本来ならとつくに辞めさせられていたんだぞ？ それをお前たち二人は辞めさせないように嘆願するなど……あんな奴の為に頭を下げたお前たちが信じられん」

「なに、せっかくだから義勇統合戦闘飛行隊に貰いたいといっただけだ」

飄々と返すラル。

返されてしまってさらに不貞腐れるバルクホルン。

「……ま、配属時にはいろいろ問題があったのは確かだが今は特に問題も起こしていないじゃないか」

「確かにそうだが……優刀に気に入られるために猫を被っているだけかもしれないだろ！うん、そうだ、きっとそうに違いない！」

やっぱり焼きもちを焼いているんじゃないか……

そう言ってやろうと思ったが、ラルは面倒なので止めた

「まあ、気持ちはわかるがな……真面目な話、これからはあいつ奴が必要になってくる」

「確かに空戦技術は大したものだと思うが、お前が二番機の座を明け渡すほどではないだろうに」

バルクホルンの言う通り、マルセイユ達新人が配属される前に優刀の二番機に就いていたのは他でもない、目の前にいるグンドユラ・ラルであった。

「欧州でも五指に入るお前たちが目をかけるほどの腕を持っているとはとても思えん」

「なにもそれだけであいつを優刀の二番機に押しした訳じゃないさ」

「…どういう意味だ？」

構わずラルは続ける。

「これからの時代、ただネウロイを倒すだけでは人々に希望は与えられない。もっと確かな希望が必要なんだ。人々に生きる希望を与えられる太陽みたいなやつが必要なんだ。あれには華があるからな……磨けば化ける」

「だからお前は優刀の二番機の座を明け渡したのか？」

「あれは周りがどうこう言うよりもきちつとした道しるべを示してやる方が伸びるタイプだ。優刀の背中を追わせた方がまっすぐ成長するさ」

どこか自嘲するような笑みをたたえ、ラルはそう語る

そのラルの確信めいた口調にバルクホルンは押しだまる。

「ま、なにせよ、その判断が正しいかったのか、そうでなかったのかはこの模擬戦で分かるさ……」

そう言っつてラルは上空に目を向ける。

バルクホルンもラルに従い空を見上げる。

そこでは、件の二人の空中戦が激しく繰り広げられていた……

「はあっ!!」

掛け声とともに鈴がその手に持つ青竜刀マルセイユに突撃、一気に振り下ろす。それをマルセイユはシールドを斜めに展開することで突撃の勢いを乗せた青竜刀の軌道を逸らす。そしてマルセイユはMG52をすれ違いざまに放ち鈴から距離を取る。

至近距離で攻撃を受けることとなった鈴はそのシールドエネルギー

―を大きく削られ体勢を崩すがPICですぐに体勢を立て直す

鈴は通り抜けたマルセイユの後を追い、その背中に青竜刀を振り落す

その攻撃をマルセイユは左にロールすることで避ける

「やるじゃない！」

「そういつお前こそ！」

二人は絡み合う様に上空へ昇る……

「はあっ！！！」

鈴はもう一刀青竜刀を呼び出しそれを連結、高速回転させてマルセイユに向けて青竜刀を振るう。

それを障壁で受け止めるマルセイユ。

しかし、回転の威力を加えられたその連撃にマルセイユは徐々に推され始める

（く、さすがに近距離格闘戦はこちらが不利だ。ここは距離を取って）

マルセイユは牽制弾を放ち鈴から距離を取ろうとする。しかし・

「甘いわッ!!」

突如、一非固定浮遊部位のカバーがスライドして開き中の球体が光った瞬間、マルセイユに殴られたような衝撃が走る

「ああっ!!」

マルセイユはその衝撃に半ば意識が飛び、錐もみ上に落下する。

「クッ!!」

何とか意識を取り戻して体勢を立て直し、墜落を免れる。

「今のはジャブだからね」

不敵な笑みを浮かべる。

「くっ!!」

見えない衝撃がマルセイユを襲う。当たる直前に障壁を展開することでは何とか防ぐが魔法力を大きく削られる。

形勢は一気に鈴の方へと傾きつつあった

「ちょっと、なによあれ」

ラルとバルクホルンの二人から少し離れたところで模擬戦を見ていたエディータは呟く。

それに答えたのは皆が上空に目を向ける中、一人下を向きキーボードをたたいているフェデリカだった。

「？衝撃砲？ね・・・空間自体に圧力をかけて砲身を形成余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾にして打ち出す　なかなか中連もまたもな兵装を開発するじゃない」

うんうんと感心したように頷くフェデリカ。

「そ、そうかしら？」

「何言ってるの、少なくとも楯無の水を自由自在に操ろうっていうよりよっぽど現実的で堅実な兵装よ」

「私にはどっちもトンデモ兵器よ・・・」

会話の最中であっても二人のそれぞれの視線は動かされることなく、エディータの視線の先ではおそらく見えない衝撃を避け続けているのだろう、マルセイユが右へ左へと不規則な機動を取っている。

「なににせよ、ハンナは苦しくなるね」

隣にいるクルピンスキーが呟くとそれに答えるようにドミニカが続ける

「……ああ、マルセイユの奴はあの見えない衝撃を警戒して常に障壁を張り続けなさいといけなくなった。」

「砲身も見えない以上どこに向けられているかも分からないからね。タイミングもつかめないっつらないよ。」

「極めつけはあの射撃角度の広さね。」

エディータの言葉にクルピンスキーとドミニカは頷く

「うん、……後ろを取ったハンナが吹き飛ばされているのを見ると砲身射角はほぼ無制限。これはなかなか攻めづらいね。」

「ああ……。」

三人が戦況を観察している中、一人ふと思い出したようにフェデリカが呟く

「……ねえ、そもそもなんで優刀はマルセイユに今回相手をす

るよつに言ったのかしら？」

「と、言つと？」

「確かにマルセイユはよく優刀の二番機として良くやってるわ。・
・けど相手の実力を測りたいというならやっぱりバルクホルンが
やるべきよ」

「確かに・・・」

フェデリカのその言葉にクルピンスキーとジェンタイルは頷く。

バルクホルンの部隊に入るか否かを決める模擬戦であるはずなのに、その隊長であるバルクホルンではなく、他の部隊の隊員であるマルセイユが相手をしているという不可解な状態になっているのだ。

疑問に思つのが普通だろう

「謎だね」

「優刀の事だからあの代表候補生を鼻屑しているわけじゃないんでしょうけど・・・」

こと戦闘において優刀がそんな出来レースをする事など、ありえないという事は彼女たちが一番よく理解している。

そんなふうには三人が頭を捻っていると、その答えは意外なところから帰ってきた。

「ああそれはね、マルセイユの固有魔法がなんなのか確かめようとしているのよ。」

答えたのは新人教育係のエディータ・ロスマンその人。

「どういうことだいエディータ？」

今ひとつわからないといった風のクルピンスキーはその真意を聞こうとエディータに聞く。

「言った通りよ・・・彼女は何かしらの固有魔法を持っているってことは解っていたんだけど、それがなんなのかははっきりと解っていないの」

固有魔法・・・それはウィッチの中でもごく稀に発現することがある稀有な技能の事である。

様々な国のウィッチが集まる義勇統合戦闘飛行隊でも現在固有魔法を有しているのは優刀、武子、下原、ハルトマンの四人だけ。

具体的に言えば、大気を扱えたり、より遠くのものを見渡せたり出来る技能の事なのだが、どれくらいの種類があるのかも不明であり、固有と言っても同じ能力を持つウィッチも多々いる。

「それで彼女が配属された初日の訓練で？検査？してみたんだけど・・・」

「ねえ、検査つてもしかして？あれ？？」

「そ、？あれ？」

フェデリカはマルセイユが配属された日に行われた？歓迎会？を思い出し顔をひくかせる。

その日、マルセイユ達三人が配属された日に優刀は歓迎会もとい、ペイント弾による模擬戦を行った。

しかしその模擬戦は通常の模擬戦とは違っており新人たち三人が先任と延々と戦い続けるという極めて過酷な内容であった。

終わるのは隊長である優刀が終了というまで

それまで先任の背中を追いかけ、銃弾を躲すという行為を延々と繰り返すのだ。

「・・・あれが検査って、いくら天狗になっていたからってマルセイユも可哀想に」

その模擬戦で最後まで戦っていたのはマルセイユであり、また全身をペイント弾でオレンジ色に染まって半泣きになったのは今や酒席でのいい肴である。

「鼻の押し折るにはちょうど良かったわ。・・・結局あの時分かっただのは空間把握能力と？魔弾？が優れているという事だけで、その能力も他と比べると中途半端でねえ・・・だから私も優刀もどっういう方向性で育てたらいいのか解らなくて。」

困ったわ、と手を頬にあてため息をつくエディータ

「今までは基礎を教える段階だったから良かったけど、そろそろ

それぞれの特徴を生かした戦い方を見つけてあげたくてね」

この固有魔法があるのとないのとは戦い方もおのずと変わってくる。

例えば優刀は固有魔法の大气操作で周辺大气を操作して圧倒的な機動性を利用してのヒット&アウェイであったり、武子の三次元空間把握能力を生かした集団戦法など・・・各々が自分の固有魔法を活かした戦い方をしている。

「なるほど・・・で、ボスはこの模擬戦を利用してマルセイユの方向性を見極めようとしているのか」

優刀の考えていることがようやく分かったという風に呟くジェン
タイル。

「そついつ事」

人の真価は極限状態で試されるとはよく言ったもので、優刀はこの模擬戦を利用してつとより早くマルセイユの固有魔法の正体を掴んでしまおうというわけだ

「けど、よくエディータ気づいたね」

「当たり前でしょ、私は彼女たちの教育係よ？ 優刀と一緒に彼女達を指導しているんだから見破れるのは当然じゃない」

フフン、と年の割には小柄ともいえる体で胸を張る彼女

しかしその姿はどう見ても褒められたことを喜んでいる小学生である。

「そう言えばそうだったわね」

「すっかり忘れていたな」

「・・・貴方達、私の事なんだと思ってたの？」

「マセた子供ガキ」

「手を出しても大丈夫な 学生」

「合法ロリ」

スココーンッ！！

チヨークが飛んできて三人の眉間に突き刺さり、その場に倒れ悶える三人。

「まあなんにせよ、優刀の目論見は功をそうしたようね」

その三人を置いておいて、エディータはマルセイユに目を向ける。

「まったくもう・・・手にかかる教え子なんだから」

その言葉とは裏腹にエディータはどこか満足そうに呟いた

Ep-15 Eigene Magie (後書き)

遅くなってしまい申し訳ありませんでした!!

(THEE扶桑・土下座)

どうも季節の変わり目に風邪を拗らせてしまいまして、そんな中で講義やらバイトやらで書く余裕が無くてもう……

皆さんも体調管理には気を付けてください。

申し訳ないついでにまだこの回は続きます。

ホントはこのEp-15で終わらずつもりだったんですが、あれもこれも入れてたらいつの間にか一万字を超えちゃいまして……

さらに分けることになりました。

申し訳ありません……

再び (THEE扶桑・土下座)

最後になりますがご意見ご感想お待ちしております。

24時間365日、料金はプライスレスでスタッフ一同お待ちしております
ております

それではまた次回!!

Ep. 16 Knftige Augen (前書き)

どうもシユウ禅です！

というわけで第十六話です・・・

ではじゃー！

「このおおおおっ!」

鈴の叫びと共に肩部ユニットである衝撃砲叫びと共に肩部ユニットである衝撃砲《龍咆》の砲口が開く

その砲口から放たれた衝撃波はマルセイユを吹き飛ばし、その魔法力を大きく削る

. 筈だった

その一撃をマルセイユはロールして躲し、鈴にその銃口を向ける
その瞬間、鈴は迫り来るであろう銃弾を回避するために後退する
が

「きゃあっ!?!」

その攻撃を避けることが出来ずにシールドエネルギーを削られる
お返しとばかりに龍咆をマルセイユに放つが、またもや回避され
てしまった。

「ああ、もうさっきからなんで当たらないのよ!?!」

鈴は明らかに焦っていた

模擬戦開始直後は衝撃砲と青竜刀による波状攻撃で圧倒的に優位
に立っていたのだが

今ではその衝撃砲が躲されるようになり、波状攻撃も精彩を欠い
てきた。

(どうする? こっちの射撃武器は龍咆だけ・・・エネルギーが切
れたらこっちの武装は『双天牙月』だけになる)

衝撃波を弾丸としている『龍咆』でも無限に撃てるわけではない。
エネルギーが底をつけば撃てなくなる

いくら甲龍シムロンが燃費と安定性を主眼に置いて開発された機体とはい
え今だ試作機であることには変わりなく、エネルギー消費型の兵装
を装備している以上、第二世代型と比べるとやはり多少稼働時間に
不安が残る。

しかも相手はどういう訳か見えない筈の衝撃砲を避け始めている
のだ。

油断はできない。

（あつちが射撃型……下手に突っ込んでいったら蜂の巣ね）

衝撃砲があてにならない以上、しばらくは様子を見るしかない

何せこの戦いには作戦に参加できるかどうかかかっているのだ。

……負けるわけにはいかない。

鈴は別に国の面子がどうかそういうものには一切興味はないし、代表候補生だからというアホ臭いプライドもない。

そんなことよりも鈴にはもっと大事な事があった。

扶桑海事変・・・・・・・・

その末期、扶桑はネウロイの大攻勢によりウラル方面にあった戦線を裏塩まで後退させられ、大陸側にいた住民は次々に本土への避難を余儀なくされた。

鈴の家は中華料理屋で当時は裏塩に店を構えており、鈴の家族もまた裏塩からの避難を余儀なくされた。

幸い扶桑軍の対応が早かったおかげで鈴たち家族は無事だったが、戦争が終わり裏塩の町に戻るとそこには信じられない光景が広がっていた。

あの綺麗だった港町の風景は見る影もなくそこに広がっていたのは・・・・・・・・

ネウロイ蹂躪しつくされて瓦礫の山となった町の姿だった

今まで家族と幸せに過ごしていた町が破壊しつくされていたのだ・
・
・
・
・

その光景を見たとき自然と涙がこぼれた。

その後、紆余曲折あつて中華連邦に帰国することとなり、故郷で受けたIS適性検査で適性が高いことがわかるとすぐさま鈴はIS操縦者になることを選んだ。

もう自分の街を失うような悲しい思いはごめんだ。

自分に戦う力があるなら自分は戦う。

ネウロイの驚異から、国を、人を、両親を守りたい……

その思いで鈴はISパイロットになった。

必死にISのことを学び、厳しい訓練にも耐えてきた。

そうして厳しい訓練に耐え、代表候補生に選ばれて戦闘データ収集の為に欧州に派遣されることになった

けれど、欧州で待っていたのは作戦参加を許されず追いつ返されるという冷たい現実だった。

もちろんそんなこと納得できるわけが無く、何とか作戦に参加させてもらおうと食い下がったが……

？貴様らの様に戦争をゲームかなにかと勘違いしている連中になんか以上兵を傷つけられてたまるか？

指揮官にそう言われ追い返されてしまった。

戦争をゲームか何かと勘違いしているつもりは全くない。けれど一部の心無い人たちの所為でそう思われているのがたまらなく悔しかった。

だからこそ、与えられたこのチャンス……

モノにして少しでも認めてもらわなければならない。

でなければ他に自分と同じような気持ちでIS操縦者になった者たちもきつと悔しい思いをする。

そんなことは絶対に許せなかった。

「はああっ！……！」

だからこそこの戦いは何としても勝ってみせる……

全ての思いを込めて鈴はマルセイユに向けて最大出力の衝撃砲を放った。

「すごいですねえ・・・マルセイユさん」

「うん、あんなの真似出来ないよ」

私は感心している下原が漏らした呟きに同意する

何せ見えない攻撃を避け続けているのだ。

そんな芸当はまず普通の人間じゃできないだろう。

二人の視線はただひたすらマルセイユの機動を追っている。

そんなふう上空を見つめていると...

「ほう……あれが優刀の言っていた面白い？新人？か……」

「え？」

横に見慣れない人物が立っていた。

すらりとした長身に腰まである艶やかな黒髪、端正な顔立ちに浮かぶ微笑みは優雅で、自分たちがここにいるのは場違いなのではないか、そう思わせるほど目の前にいるその女性は気品に満ち溢れていた。

「あのう…すみません、あなたは一体どちら様でしょうか？」

恐る恐る目の前にいるその女性にそう尋ねる。

その下原の問いに対してその女性は……

「ああすまない、邪魔をしてしまったかな？ 私はアドルフイーネ・ガランド……今回の作戦に参加する部隊の一人さ」

「ええ!？」

その名を聞いてエーリカ達は驚く

アドルフイーネ・ガランド……

ヒスパニア戦役から活躍するウィッチで、対地攻撃ウィッチとして勇名をはせ、現在はJG26の司令を務めるカールスラントを代表するウィッチの一人である

今回の作戦で航空部隊の総指揮をとるためにこっちに来るとは朝のブリーフィングで聞いていたのだが…まさかこんなふうに対面することになるとは夢にも思わなかった。

「し、失礼しました!！」

慌てて敬礼、しかし彼女はそれをにこやかに手でやんわりと制する

「ああ構わないでいいよ、今は公式な場じゃないからね……それにしても君たちが緋村の所に入った新人かい？」

「は、はい！」

思わず声の上擦ってしまった。

新米ウィッチである私達からすれば雲の上のような存在である彼女が何の前触れもなくひょっこりと目の前に現れたのだ……驚くなどという方が無理だ。

そんな私達の緊張を知ってか知らずか、彼女 ガランド中佐はその青く澄んだ瞳で私たちの瞳を覗き込む……

「うん……いい眼だ。退屈しのぎの散歩で君たちの様な将来有望なウィッチに出会えるとは 私の運も捨てたモノじゃないな」

微笑む中佐

その動作一つ一つが優雅で気品に溢れており、私たちはドギマギしてしまう。

そこへ……………

「中佐……………なにしてるんですか？」

私たちの背後から呆れたような声がため息とともに聞こえてきた。

「あ、隊長」

我らの隊長、緋村優刀少佐だった

「やあ優刀、ずいぶん久しぶりだね」

「お久しぶりですガランド中佐……………確か中佐は明日お見えになる
のではありませんでしたか？」

中佐をジト目で見る隊長。

そんな隊長に中佐は

「ふふ、早く君に会いたくてね。雑務は副官に任せて私は部下を引き連れて一足先に来たんだよ」

そう言っつて隊長の頬に指を滑らせる中佐。

その蠱惑的な笑みは同性の私でさえも見惚れてしまうほどに魅力的で、思わず息をのむ

しかし、その笑みを向けられた当の本人はというと……

「なにアホなこと言ってるんですか……おかげで予想外に早い到着でうちの整備班はてんやわんやですよ」

おかげで土田班長からお小言言われましたし……と

その笑みになびくこともなく一蹴

心底呆れたような顔をする。

「ははっ、怒られてしまったな。」

「まったたく……」

隊長はそんな中佐の姿に頭を抱え、当の中佐は先ほどの蠢惑的な笑みではなくいたずらっぽく笑う。

「あの、お二人はお知り合いのですか？」

二人のやり取りを見ていた下原が疑問に思い尋ねる

二人のやり取りはどこか上官と部下という関係としてはあまりにも砕けすぎていて不思議に思ったのだろう。

一体全体、この二人はどういった間柄なのだろうか？

「ああ、彼は私の婚約者だよ」
フィアンセ

「「ええ!?!」」

ガランド中佐から投下された爆弾発言に驚く私達

確かに隊長くらい的人物なら恋人がいるんじゃないかと思っただけだ、まさか婚約者がいたなんて……

ちよつとショックだ

しかし当の本人はというと

「……はあ、違うからな二人とも」

本日二度目の深いため息を吐き即否定

中佐の発言を切り捨てる

「扶桑海事変の時、中佐は観戦武官として俺や

武子がいた基地に赴任してきてな。それが縁で知り合ったんだ」

「そ、そうなんだ」

隊長のその言葉を聞いてほっとする。

否定された中佐はというと……

「やれやれ……相変わらず酷い男だね君は。もう少し残念そうな顔をしてくれないじゃないか。」

「そうですね、人をからかう癖さえなければ彼女にしたいくらいですけどね」

肩をすくめる中佐。

隊長のこういった反応は予想どおりだったのだから否定されたこととはあまり残念ではないようだ

「まあ優刀をいじるのはさておいて……優刀、彼女はなかなか面白いね」

そう言って上空のハンナを見る中佐

「大した観察力と判断力だ。さすがは君が眼をつけただけの事はあるな」

「まったく、見ているこっちは冷や冷やモノですけどね」

苦笑する隊長

「さてと……二人とも、この戦いを見てどう思う？」

「え？」

突然、隊長から感想を聞かれ、戸惑ってしまった

「うーんと、良く見えない攻撃を回避しているなあ」と

こんな感想しか思い浮かばなかった。

だってそうだろう。他になんて言えばいいのだ？

そんなありきたりな感想しか浮かばない自分が恨めしい。

きつと隊長に呆れられてしまった……

「そつだな、あいつは良く避けているよ。ではなぜ見えない攻撃を避け続けることが出来ると思う？」

「うう……隊長わかんない」

そういう私の頭をポンツポンツとなでながら隊長は続ける。

「少し難しすぎたな。何せ弾が見えないのだから避けられないのは当たり前……そう考えるのが普通だし、でも実際は避ける事自体に弾が見えるとかそういうのは関係ないんだ。」

「え……どういことですか？」

訳が解らないといった風の下原。

それはそつだ。見えないから避けられないのに見えないこと自体は避けるのには関係ないといわれたのだ

こんなとんちの様な話が理解出来る方がすごい

「例えば……拳銃の弾を避けられるかい？」

「無理です……」

「どうして？」

「え……だって見えないじゃないですか……………あ
！」

「そう……実際の話、実弾も撃つた時にはその弾丸自体は視覚で捉えることは出来ない。よしんば捉える事が出来たとしても、弾丸を見てから行動を起こしていたら間に合わない……ならどうやって避けるか？」

「えと……動き続けるとか？」

「うん、半分正解……けどそれではすべての弾を避け続けるのは無理だ。ならどう避け続けるか？……相手の目を見ればいい」

「相手の目を？」

「そう、相手の目だ。銃を撃つときは目で照準を合わせるだろう？あの機体はどうやらいちいち自分で照準を合わせなければいけないからみただからな……マルセイユもそれに気づいたんだろう。マルセイユは相手の視線の向かう先をみてタイミングと方向を予想して避けているんだ」

「はえ〜」

そんな驚嘆の声しか出なかった

「でも相手の目を見るのなんて、ネウロイ戦に役に立つんですか？」

下原が当然の疑問を口にする

それはそうだろう。ネウロイには目も口もないのだ。小型は航空機的なシルエットをしているが中型大型ともなると全身に機銃が装備されており、眼を見て射線を読むことなどはとても無理だ

「もちろんこれは対人相手じゃないと意味のないことだ……けれども今この模擬戦で一番重要なのは勝ち負けよりもどれだけの観察力と判断力を持っているかだ。相手を観察し的確な選択をする事……これは戦場で最も重要なことだからな」

「はあ……」

「まあなんにせよ、これで彼女にも少しは勝機が見えたかな？」

中佐がそう締めくくると……

「そこまであいつは甘くないと思いますけどね……」

「とうとうと?」

「鈴の方も戦法を変えたようですからね……ほら」

その言葉に促され、私たちは再び上空を見る。

確かに隊長の言う通り、鈴という人の動きが変わってきた。

「……なるほど、衝撃砲の優位性が崩れたと解るや今度は近接格闘にシフト。彼女、なかなか思い切りがいいじゃないか」

「ええ、さすが代表候補生といった所でしょうか。自分の機体の性能をきちつと理解しています」

最初は衝撃砲とあの大きなブレードの波状攻撃だったのに、今はどうやら衝撃砲を牽制に使用して近接格闘を仕掛ける戦法に変えたようだ。

「互いに攻めあぐねているな」

「ええ……鈴の方は衝撃砲とブレードによる波状攻撃から牽制による一撃離脱に変えたのはいいですけど、元々マルセイユは射撃型ですから常に一定の距離で攻撃を仕掛けるからその一撃離脱も使い処が難しい。マルセイユの方も距離を取っている分、一撃一撃の威力が低い」

「両方とも決め手を欠いたままか……」

「ええ……ですが」

そういつた隊長に笑顔が浮かぶ。

「マルセイユの固有魔法が開花すればあるいは……」

「固有魔法？ でもハンナの固有魔法って解ってないんじゃないかな？ たっけ？」

確かハンナの固有魔法については隊長とロスマン先生があれこれと検査をしていたがいまだに解っていなかったはずだ。

「ああ確かにあいつの固有魔法についてはまだ分かっていなかった」

「という事はもうわかったんだな」

「ええ……………」

そう言って隊長は言葉を区切り……………」

「あいつの固有魔法は未来視です」

Ep-16 Knftige Augen (後書き)

すみませんまた終わりませんでした。

なんかこの鈴対マルセイユももう少し続きそうです。

ごめんなさいです。

もう少しお付き合い下さい。

最後になりますがご意見ご感想お待ちしております！

ご感想をいただけたら作者のテンションが上がってうれしいです。

それではまた次回！

どうもシユウ禅です。

やっと鈴対マルセイユ終了です

二人の戦いの結末やいかに!?

ではおしまい…

「未来視か・・・また随分と大層な固有魔法だな」

ガランド中佐が驚いた様な呆れたような声で呟いた。

実際の話、マルセイユが衝撃砲の攻撃を避け続けられる理由を相手の目を見て回避しているといったがそれだけで避け続けるのは無理である。

であるならば、それを成すとしたら未来を知る以外にはない。

しかし・・・

「そうですねって言いたいところなんですけど・・・実際、あいつのあれはそこまで凄まじい能力じゃないみたいなんですよ」

俺は苦笑いを浮かべる

「とととと?」

「以前、検査と称していろいろ悪戯をしたんですが……」

その時の出来事を思い出す。

~~~~~ある日~~~~~

「よしマルセイユ 準備はいいか？」

「あ、ああ……た、大尉、何する気なんだ？」

目隠しをされて滑走路のど真ん中に立たせられたマルセイユは不安そうな声で優刀を訪ねる。

「ん……検査だ」

その声にしやがみこんで何やら「そそそとやっていた優刀はのんきな声で返す

「け、検査って何の？」

「決まってるだろ？ 固有魔法の検査だ」

もちろん検査である。しかしその内容はというと……

「ボス、こっちはOKだ」

「こっちも同じく」

大将とフェデリカから準備完了の知らせが入ると優刀は立ち上がり、ある方向を向く。

その視線の先には義勇統合戦闘飛行隊を支える整備中隊の姿があった。

その数二十人

彼らも彼らで何やら「そ」そとやっている。

「土田班長ー！！ そっちはどうですかー？」

「こっちもOKですー！！」

返事をした彼らの手には銃の形をしたプラスチック状の物体。

所謂水鉄砲ウォーターガンという奴だ

彼らはせつせと化けるに組んだ水の中にタンクを沈めて水を入れている。

もちろん大将ら二人の手にも水鉄砲を持っている。

「こっちもOKだよ」

横にいた伯爵がうれしそうに言う。

彼女の手にはひときわ大きな水鉄砲を持っている。

その笑顔がまたさわやかなことこの上ない。

そして極めつけは傍においてあるかごの中の水風船



「マルセイユ！これからお前が未来予知の固有魔法を持っているかどうかの検査を始めるぞ！今からお前に向けてここにいる全員がお前に向けて水鉄砲を放つ！全部避ける！！」

そう・・・この検査、最近スオムスで発現したウィッチが見つかったという”未来予知”の検査なのだ。

「な、無理に決まってるだろ！！こんなことに付き合えるか！！」

そついで目隠しを取ろうとする・・・が

「なっ！？と、取れない・・・」

だが外れない・・・目隠しは片結びできつく縛られている

「ふ……当たり前だ、私が外れないようきつく縛ったからな」

犯人は大将。

彼女が全力で結んだのだからマルセイユでは外す事は無理である。

「よし、じゃあ始めるぞ……用意はいいな？マルセイユ」

「よ、よくない！私がそんな能力持っているわけないだろ！」

「そんなのやってみないとわからないだろ！ スオムスでお前と同じくらいのウィッチが発現したんだ！お前だってやればできる  
」！」

「なんなんだ！その根性論は！？絶対違うから、お願い、お願いだから！まって、待ってえ大尉！」

「オールウェポンズフリー 問答無用！！総員全兵装自由！！ マルセイユに叩き込めええええっ！！！」

「いやああああああっ!!」

.....

.....

.....

.....

「と、まあこんな感じで検査をしたんですが……  
ってどうしました?」

中佐と下原が呆れたような目でこっちを見ている。

「いや……さすがにやり過ぎだろっつ」

「マルセイユさんが可哀想ですよ」

「いや、つい楽しくなって……」

中佐と下原の言葉にただ苦笑するしかない。

実際やってみると馬鹿馬鹿しくも楽しく、いつの間にか本来の目的である検査のことを忘れて皆で遊んでいた。(ちょうど冬まっただ中でビショビショになれば風邪をひくこと確実、マルセイユは本気で逃げていた)

「結局、武子が来るまでやってたんですね」

騒ぎを聞きつけた武子が現れて音頭を取り終了

マルセイユは大して濡れることなく事なきを得たように思えた………

「……で、その時彼女は避けていたのか？」

「ええ」

そもそも、目隠しをしている者相手にそこまで遊べるわけが無い

その時マルセイユは目隠しをしていたにもかかわらず、ほとんどの水鉄砲の攻撃を避けていたのだ。

「目隠ししても避けられる・・・まさしく未来予知じゃないか」

「いえ、この話にはまだ続きがありまして・・・」

~~~~~

「まったく……揃いも揃って何考えているのよ」

「いや悪い悪い……つい楽しくなっちゃってな」

しばらく遊んでいると、どこからか騒ぎを聞きつけた武子が現れた。

「まったくもう……とにかく検査は終了。整備班の方々もさ

つさとあと片付け始めてくださいね マルセイユ、ほら・・・

・目隠しを取ってあげるから」

「うっう・・・中尉」

目隠しを取ったマルセイユと連れだって、そのまま滑走路を後にする武子。

まずいあの方向は

「武子！そこは通るな！！」

「え？・・・きゃあつ！？」

いづが早いか、二人の姿が突然視界から消える。

ドボー・・・・・・・・ン

大きな水柱が上がる。

「そこには落とし穴があるから気をつけてって言おうとしたんだけど・・・間に合わなかったか」

もし未来予知が発現しているなら落とす穴ぐらい避けられるだろうと思つて作つておいたのだが……

彼女はモノの見事に引つ掛かった。

「み、みんな逃げるぞつて……いないっ!？」

さっきまでそこにいたメンバーの姿はすでになく、皆に散り散りに逃げていた

「……優刀」

背後からは武子の声、

振り向くとそこには二人の姿が……

どうやら自力で這い上がってきたらしい。

全身ずぶ濡れ、ぴたりと張り付いた制服、水を滴らせる武子の姿に胸が高鳴るのを感じるがそんなことを言っている場合ではない。

それこそ表情は笑顔ではあるが、その額にはくつきりと青筋が見える。

こええ……………

普段穏やかで人当たりがいい分、怒ると余計に怖い……………

しかもヒステリックに怒るわけじゃなく、普段と変わらない穏やかな笑顔で威圧してくるもんだから余計に恐ろしい……………

鬼の副長とはまさにこのこと……………

ギンっ！！！！

「緋村大尉……………」

笑顔でこちらを見る武子

「……………なんでもありません、サー」

「そう……………なにかいい残すことは？」

「アリマセン」

隊長としての威厳？

そんなものではありません……

「まあ、そんな感じで落とし穴に引っ掛かっていたので
完全な未来予知とは違うという訳なんですよ」

その後散り散りに逃げた奴らも武子の固有魔法
三次元空間把握 の前では歯が立たず、敢え無く御用となり、皆
でくそ寒い夜の格納庫で正座をさせられたのも今やいい思い出だ。

「な、なるほどな」

「緋村少佐……やりすぎです」

「あはははっ！おっかしー！！」

三者三様の反応をする

「けど、今回の模擬戦でようやくあいつのその固有魔法の正体がわかりました・・・どうやらあいつの魔眼は？未来？を見通すんじゃないくて、どうやら？物体の未来位置を正確に把握できるっていうこと、精々分かるのはモノが動いた時それがどのように動いてそれにどう対処すればいいかという事だけのようですね」

「なるほど、決して未来に起こる出来事が分かるわけではないという事か」

「ええ・・・」

マルセイユの魔眼は何が起きるのかを見るわけじゃなく、対象の僅かな動きからその行動を予測して理解するというものなのだろう。

しかしその後の事象が解るという点では範囲は違えども、未来予知と同じである。

故に？未来視？

「 と話は脱線しましたが、マルセイユは？未来視？？空間把握？？魔弾？の三つ固有魔法を持っているわけです」

「なるほど…固有魔法を三つも持っているとはなかなかすごいじゃないか」

中佐はただ感心するように何度も頷いている。

「まあ、どれもこれもその専門の能力と比べたら中途半端なんですけどね。でも、この三つの固有魔法をうまく使用することが出来れば……」

「 I S に勝てるかもしれない？」

「ええ……どのみち、このまま長期戦に持ち込まれたら近接格闘武器のないマルセイユは弾切れになった時点で負けも同然ですから」

「勝負は一瞬という事か」

「くっ!!」

瞬間、マルセイユの頬を風が撫でる

衝撃波がすぐ横を通過した証拠だ。

(どうする？ 何とか衝撃波は避けることが出来始めたのはいいがこっちの攻撃は距離があつてなかなか効果的とは言えない……なんとか相手に効果的な戦法を考えないと)

相手は見えない衝撃を牽制に使って近接格闘による一撃離脱に切り替えてきた。

何とか距離を取っているために対応は出来ているが、こちらの弾が切れれば牽制も出来なくなるために一気に距離を詰められた瞬間

に負けは確定する。

少佐やラル中尉であればその圧倒的な空戦機動で相手を引き離して一気に決める事が出来るだろう。けれど、自分の腕ではそんなことはまだ出来ない。

相手からはこの戦いにかける熱意が尋常じゃないほど感じられ、気を抜けば飲み込まれそうになる。

けれど負けられないのはこっちも一緒だ。

少佐が自分に課した試練であるなら、自分はそれに答えないといいけない。

今思えばあの人との出会いはそれは散々なものであった。

私ははっきりいって問題児だった。

おかげで士官学校の主席はハルトマンにとられるわ、卒業させられなくなりそうになるわといういろいろあったのだが何とか卒業出来た。

私の腕を惜しんだ士官学校の教官がいろいろ手をまわしてくれた上での卒業だったらしいのだが、それを私は？天才なんだから卒業させるのが当たり前だ？と思っていた。

所謂、？天狗？になっていたという奴だ。

だから配属初日に違う部隊である筈の少佐に対して模擬戦を申し込んだ。

士官学校の時から噂になっていた？扶桑の白き龍？の腕がどれ程か見てやるうと思ったのだ。

結果は案の定惨敗・・・

模擬戦を申し込んだことが問題になり、不名誉除隊を言い渡された。

その瞬間、目の前が真っ暗になった。

軍を辞めさせられる事がショックだった訳ではない・・・

空を飛べなくなる事・・・

それが何よりもショックだった。

その時、思い出した……なぜ自分が航空ウィッチに憧れ、その道を目指したのか

大空を飛びたかったのだ

何ものにも縛られることのないこの大空を……

その時、初めて自分のやってきたことの馬鹿さ加減に気づき、後悔した。

後悔してももう遅かった。

けれど、そこに手を差し伸べてくれたのが少佐とラル中尉だった。

二人はこんな私の為に頭を下げてください、自分たちの部隊に引き入れてくれたのだ。

あまつさえ私を成長させるためにラル中尉は二番機の座を明け渡してくれた。

そして少佐は言ってくれた

『お前は将来人々に希望を与えられるようなエースになると俺は

信じてる』

少佐がいてくれたから、自分は今も空を飛んでいられる。

だからこそ負けれない……………

少佐が、ラル中尉が、隊のみんなが。私が成長するのを待っていてくれるのだ、信じてくれるのだ

自分に居場所をくれた人達を裏切りたくない…………

その信頼に応えたい。

だから……………

「私は負けれないんだあああああ……!」

一気に呐喊する。

どのみち長期戦になればこちらに勝機はない。

だったら敵の懐に入り込んで十分に魔力を込めた一撃を叩き込む！

「く！！ だったらこっちも！！」

向こうも覚悟を決めたのかこちらに向かって一気に突撃してくる。

衝撃波を次々と放ってくるがその砲火の中を一気に駆け抜ける

そして……

無骨な鎧を着た相手が目の前に迫る

「この距離ならっ！！」

相手は巨大なブレードを振りかぶっている

構うものか、相手が振りぬくよりもこちらの方が早い！

ドオンッ！

「!？」

敵の懐に銃身を向け、トリガーを引こうとしたその瞬間……

突如上空から飛来した侵入者が二人の間に割り込み、私の銃をその左手に展開したシールドで射軸を逸らし、相手が振り下ろしたブレードを右手に持つ扶桑刀で防ぐ。

「……………二人ともそこまです」

侵入者はそういつと体を回転させてブレードと銃をはじく。

「ちょっと、いきなり割り込んできて……あんた何者よ！」

飛び退いた向こうの方は侵入者にそのブレードの切っ先を向ける
当の侵入者はブレードの切っ先を向けられても涼しい顔のまま。

私はその凜とした顔に見覚えがあった。

「あんたは確かリバウ航空隊の……」

「扶桑国空軍遣欧艦隊所属、竹井醇子少尉です……二人とも、
模擬戦は終了よ」

彼女は名乗り、模擬戦が終了したことを告げた。

ゴーン！

模擬戦終了後、滑走路に降りてきたマルセイユの頭に拳骨を食らわせる。

その場につづくまるマルセイユ

「いったくくく何するんだ少佐」

余りにも痛かったのだろう目に涙を浮かべ抗議するマルセイユ

「全くヒヤヒヤさせて・・・竹井が来なかったらどうなっていたことか」

「もちろん私が勝っていたに決まってる！！」

ゴンッ！

グリグリグリ

「痛い痛い痛い痛い……」

さらにもう一発食らわせぐりぐりと拳を押し付ける

「アホか、あのままだったらお前の上半身と下半身は永遠にサヨナラをするとところだったんだぞ？竹井に感謝しろ」

実際、竹井が止めに入らなければ危ないところであった。あの時マルセイユは攻撃することに集中しすぎていて、まったく防御のことを考えていなかった。もし障壁が発動しても重量のある青竜刀の一撃は防ぐことは難しかった

「うっ……ごめんなさい」

「ま、なにせよ無事でよかった」

そう言って頭をなでてやる。

「……」

そんなふうにマルセイユをなでていると……

「ちよっと、なんで止めたのよ！あのまま言っただけならば私が勝ったのよ……！」

今度は鈴がこちらに向かってズカズカと大股で歩いてきた。……
なんとというか女らしくないな

「お前ももしあのままマルセイユの魔弾を食らっていたら腹に大穴が開いていたぞ。それでもよかったのか？」

「？……」

鈴は鈴でマルセイユの全力の魔弾を食らっていたら間違いなく死んでいた。身内轟屑するわけではないが、彼女の魔弾は狙撃主体のウィッチの魔弾に比べれば威力は墜ちるがウィッチの魔法障壁をいとも簡単に貫く。シールドエネルギーが残り少ない状態でくらいでもしたら、鈴の上半身と下半身も永遠にサヨナラをするのは目に見えていた。

「ま、なにせよこれで模擬戦は終了・・・で、どうだった？トゥルーデ。」

今回の判定人、トゥルーデの方に視線を向ける

当の本人は腕を組んで何かを考えるように目をつぶっている

数瞬後、彼女は口を開く

「射撃も近接格闘も間合いの取り方が雑でまだまだ甘く、肝心の空戦機動はお遊戯レベル……最後には一か八かの突撃も中途半端な加速で勢いが無い……話にならない」

「う……………」

トゥルーデの容赦のない評価に鈴は俯く

彼女は戦闘において甘い評価を下すことはない・・・

きつと作戦参加を認められないだろう、そう思われたが

次にトゥルーデの口から出た言葉は意外なものだった。

「　　だが特殊兵装の効果が薄いとみるや、すぐさま近接装
備に切り替えた判断の速さは評価出来る…………稼働時間300時間
であそこまで冷静に早く判断が出来れば大したものだ。」

「え…………」

トゥルーデの意外な評価に鈴が顔を上げる

「勝負は引き分け、実力も確認して…………いいだろう、今度の作戦
でお前を私の隊に編入するようにボニン司令に頼んでおいてやる」

「ほ、ホントに？」

鈴が信じられないといった風に聞く

「嘘をついてどうなる・・・私の部隊に入る以上は私の指示は聞いてもらってください?」

そう言ってトゥルーデは鈴に微笑みかけ、手を差し出す。

「あ、ありがとうございます……これからよろしく頼むわね、隊長!」

鈴もまたトゥルーデに笑いかけその手を握り返す

「上官には敬語を使い……私の部隊の仲間を紹介する、ついでにきて」

「サー、イエッサー!」

そうして二人は隊舎の方へ歩いて行った。

「……雨降って地固まるってところかしら？」

去っていく二人の背中を微笑ましそうに見ていた武子が呟く。

「別に雨なんて降ってないさ、ただ単にトゥルーデの奴が頑固だっただけだ」

「それもそうね」

「そういつて微笑む武子……」

しかし、すぐに顔を引き締め、遙か彼方を見据える

「けどおしやく始まるのね……」

「
ああ
」

彼女につられてその視線の先に目を向ける………

そこに映るのは遙か先にある戦場………

そこにはかつての仇敵がいる………

扶桑を壊滅の危機に陥れた強大な敵

戦いは苛烈を極めるだろう……

だが……

自分には師が託してくれた飛天御剣流と仲間がいる

そして

「もう何も失わせはしない………今度こそ全てを守る」

そう、恐れるものは何もない……

今度こそ全てを護って見せる

義勇統合戦闘飛行隊の仲間と共に……

鈴対マルセイユ、いかがでしたでしょうか？

なんか場外乱闘が多かった気がしないでもないですけど、楽しんでいただけたのなら幸いです。

今回はついにクラカウ攻略作戦が開始します。

長かったです・・・

予定では第零章、10話の予定だったんですけどね・・・
小説書くのって楽しいですね、調子に乗って書き過ぎた感があります

ようやく本編に入れそうです。

最後になりましたがご意見ご感想お待ちしております。

感想が書かれたら作者の気分が上がりによって嬉しすぎて涙が出てくるかも！？

ではまた次回！！

Extra・Epo1 とあるお姉ちゃんの憂鬱（いわゆる番外編）（前書き）

どうもシユウ禅です

今回はいつもとは趣が違ういわゆる番外編という奴です。

それではどうござい

「……………では失礼します」

そう言って、その重たい扉を閉める。

「ふう……………」

やっと終わった

今日の作戦の報告書を大急ぎでまとめて司令に何とか今日中に提出
することができた

時刻は午後8時30分

ふと窓から外を見ると日はもうすでに落ち辺りは漆黒の闇に包ま
れている

これでようやく休める……

自室へ帰るつとすると

「なんだ、お前がため息とは珍しいな」

突然後ろから声をかけられ、その方向に体を向ける

「ああ、トゥルーデか」

カールスラント空軍中尉、ゲルトルート・バルクホルンが立っていた。

「……ずいぶんと疲れているようだが、大丈夫か？」

人の顔を見るなり酷い発言だな

まあ、遠征先から帰ってくるなり報告書を大急ぎでまとめたからな、
実際結構疲れてるけど

「大丈夫だ」

「そ、そうか……ところで優刀、この後は何か予定はあるか？」

「いや、特にないけど」

「そうか……じゃあ、少し付き合ってくれないか？」

「今日はずいぶんと活躍したらしいじゃないか」

「それでもないさ、いつもと変わらない敵を、いつものように落と
しただけだ。」

基地内の食堂の片隅、その一角を俺とトゥルーデで占領し向かいあって飲んでいた

「まったくお前というやつは・・・ほら」

「ありがとう・・・もういいぞ」

少し呆れ気味に笑いながらトゥルーデは空いたグラスにコルンを注ぎ込む。

ちなみにバルクホルンはまだ年齢が15歳を超えていないので彼女はミルクだ。

カールスラントでは15歳から飲酒がOKらしく、同じ部隊の仲間に勧められてからというものの週に一、二度は酒を嗜むようになり、最近はこのコルンという小麦の蒸留酒がお気に入りだ。

「……それで、急にどうしたんだ？ トウルーデが飲みに誘うなんて珍しいな」

彼女とは去年の4月にこの基地に派遣された時に知り合い、同じ中隊長という立場からすぐに意気投合し互いによく相談する間柄になり、たまにこうして飲むことがままあった。（といっても飲むのは自分で彼女はいつもミルクなのだが……）

「ああ、じ、実はな……妹のクリスの事なんだが……」

「クリスって……また何かあったのか？」

またかと思いつながら話を聞く

彼女には一人妹がいる。

クリスティアーネ・バルクホルン

トウルーデは彼女のことをとても大事に思っていてよく妹の相談を

持ちかけられる

「いや、特に何もないんだが、ここ最近は何も忙しかったらう？特に今年に入ってからには休暇が取れず、家にも帰れていない。もしかしたらクリスマスに淋しい思いをさせているんじゃないかと思うともたつてもいらなくなつてな、家に両親がいるから大丈夫だとは思つてはいるんだが・・・」

「毎日電話かけてるんだろ？」

「ああ、その日に起きた事を毎日楽しそうに話してくれるんだ。」

「じゃあ、いいじゃないか」

「良くない!!」

どん！ とテーブルを強くたたたくトゥル〜デ。

「なんでだよ・・・」

少し呆れるように問いかける

「もしかして私を心配させないために無理して元気よく振る舞っているかもしれないだろ！」

「そんなことはない……ともいえないな」

不意に幼いころを思い出す。

自分にも歳の離れた姉がいて、両親を早くに亡くした俺は、幼いころ心配かけまいとして姉の前では明るく振る舞っていたことを思い出し、強くは否定できなかった。

「や……やはりそうなのか……わ、私はクリスマスに淋しい思いをさせているのか」

トゥルーデの顔がみるみる青くなっていく

あ、やばい。地雷踏んだ

「まっまあ、どちらにせよお前はいつもどおり振る舞うべきだな」

これ以上凹まれると朝まで付き合わされるのでさっさと解決策を上げる

いつも思ってたが、こいつ酒飲んでないよな？

「どうしてだ！ クリスがさびしがっているんだぞ！！そのままにしておけるか！！！」

がたん！ と突然身を乗り出して人の首をグイグイ締め出した

「うぐっ！ぢよっ、落ち着け！ぐ、首しまってる！」

「これが！ 落ち着いて！ いられるかああああああっ！！
！！」

その状態から後ろに回り込まれ、更にスリーパーホールドをかける

その動作がこれまた綺麗なこと。

さすがカールスラント軍人の鏡、バルクホルン。

完璧に極まっている

あ、これ落ちるな

「あがががが………」

あ、やばい ぼっつとしてきた。

このままトゥルーデに首を絞められて死ぬのか・・・

「やあ、トゥルーデに優刀。二人とも相変わらず仲がいいね」

極まってから約6秒、落ちる寸前に救いの女神が現れた。

「クルピンスキー!!」

「仲がいいのは羨ましいけど、トゥルーデ、早く放してあげないと死ぬよ?」

「え?・・・ああッ!?!」

が眼をやるとそこには顔を青くした俺

あ、ちゃんと気づいてくれたか

「す、済まん！」

侘びの言葉と共に技をはずすトゥルーデ

「ふう・・・さすがに今回は死ぬかと思った。」

「完璧に極まってたね、さすがトゥルーデ！惚れ惚れするほどきれいな締め方だよ。」

「ぐ・・・」

「ところで伯爵、こんな時間に食堂に来るなんてどうかしたのか」

時刻は現在午後9時を回っている。

一応この食堂は夜勤の隊員も利用するので24時間いつでも開いてはいるのだが、夜戦ウィッチでもない伯爵がこの時間に来るなんて珍しい。

「フラウと同時期に入った第3中隊の子達いるでしょ？あの子達と一緒にディナーをね。」

「ああ、あの子達が……」

一度だけ見かけた少女達の姿を思い出す

そつえば三日前に伯爵が何やら話しかけていたような

「……相変わらずだな、クルピンスキー。少しはその女と見たらすぐさま声をかける癖どうにかしたらどうだ？」

「何言ってるんだい。かわいい子がいたら食事に誘う、常識じゃないか」

なに当たり前のことを聞いているんだといった風に返す伯爵

「じいじは……」

さすがは伯爵、ヴァルトルート・クルピンスキー。

無類の酒好き女好きの享楽主義者で楽道家。

その行動にはブレがない。

「それで？ いったい何の話をしていたんだい？」

「ああ、それはな……」

……

……

……

「　　というわけだ。クリスがさびしい思いをしていると思っ
たらいてもたってもいられなくてな」

「なるほどね・・・それで勢い余って優刀を絞め殺そうとしたん
だ」

「　　そういつ事」

「　　うう・・・」

事のあらましをクルピンスキーに説明する。ついでにちょっとした
ジョークを入れるのも彼女らしい。

「　　そうか・・・うんやっぱり、優刀の言う通り、いつも通りに振る
舞うべきだね」

そしてあっさりと同じ答えが返ってきた。

「　　なんでだ!?!」

「考えてみる。仮にクリスマスちゃんがさびしい思いをしているとして、なんでトゥルーデに黙っているんだよ。」

「私を心配させないためだ」

「でしょ？ それなのにトゥルーデがいかにも心配してますって顔したら余計心配かけさせまいとしてさらに無理するに決まってるじゃないか。」

「そ、それもそうか。なら、私はどうすればいい」

「だから今度休暇で家に帰ったら思いっきり甘えさせてやれ。普段構ってやれない分思いっきり、な」

そうやってコルンを一気に飲み干す

「そう、か……そうだな、そうだ。思いっきり甘えさせてやるんだ！」

先ほどまでの沈没していた表情から一転、あふれんばかりの笑顔になるトゥルーデ

「そういうことだよ。まったく、トゥルーデッては本当にクリスチヤン命だねえ。」

「なんだ、悪いか」

少しづつの悪そうにしてそっぽを向くトゥルーデ

「いやいや、家族を大切にするのはいいことだよ。それに、そういうことなら私が相談に乗ってあげるのにな、優刀」

「俺に同意を求めるなよ・・・伯爵の事だからどうせ、？ベットの上で聞いてあげるよ？的な感じだろ？」

「べー…！…ベットのう上でと！！？」

その意味を正しく理解したのか顔を真っ赤にさせるトゥルーデ。

「さすが優刀、よくわかってるじゃないか！」

「なんだかんだで、付き合いが長くなっただけだからな」

適当に返す

「みんなが寝静まった夜に一人悶々と悩んでいるトウルーデに優しく、「どうしたんだい？」って語りかけてあげるんだ。最初はなかなか悩みを打ち明けられないトウルーデだけど真摯に聞いてくれる私に少しずつ悩みを打ち明けてくれるようになる。そして己が悩みをすべて打ち明けたトウルーデにこう一言、「大丈夫だよ、私がついてるからね」って」

「ぎゃーっ！！やめるーっ！！人でヘンなこと妄想するなーっ！！」

「何言ってるんだいこれからじゃないか！．．．それから二人の距離はだんだんと近づいて行く。いつしかトウルーデは私のことを自然に目で追いやるようになり．．．．私がほかの女の子としゃべっているのを見るとなんだか胸がざわついてくる。ああ、この胸のもやもやは一体なんだろうか？」

「優刀も見えないで止めるー！！」

「すまん、こうなった以上は俺も無理だ」

そうこうしている間に伯爵の妄想は進み……

「……そしてついにその日がやってきたんだ!!」

「わあああ!! もうやめてくれ!!」

「薄暗い部屋の中、二つの影がついに一つに……そして「天誅
うう!!」「ぐはあ!!」

突然、伯爵の脳天に何かが振り下ろされ、伯爵を襲う。

テーブルにひれ伏す伯爵

その後ろには

「はあっ!はあっ!はあっ! まったく、このエセ伯爵! 目を
離すとすぐこれなんだから!!」

部隊の新人教育係のエディータ・ロスマンが立っていた。

「よ、エディータ」

「ろ、ロスマン……」

「や、やあ……エディータ」

「まったく!!いつまでたつても帰ってこないから、探しに来てみれば!!」二人していったい何やってるのよ!!」

その小柄な体格からは考えられないほどの貫録を見せるエディータ

「ごめんよエディータ、淋しい思いをさせて」

強烈な一撃を食らったにも拘らず、すぐさま復活した伯爵は怒られている事などどこ吹く風、といった風にそう囁く。

「このエセ伯爵は・・・優刀も一緒にいたなら彼女を止めてよ！」

「いや、俺にこいつを止めるのは無理。」

俺がこうなつた伯爵を止める？

はは、そんなの無理に決まってるだろ？

だってこんなに面白いんだから、止めるなんてもったいない。

「まったくもう・・・」

その言葉に呆れているエディータ

「トウルーデもごめんなさいね、うちの二人が迷惑かけて。」

「い、いや二人には相談に乗ってもらっていたんだ」

「そうなの？優刀はともかく、伯爵に相談はねえ・・・」

伯爵を白い目で見るエディータ

「エディータ、何気に酷いね」

「ま、まあ、とにかくありがとう。二人とも助かった。気分が楽になっただよ」

「それはよかった」

「また何かあったらいつでも相談に乗るよ？」

「なっ！？ まったく、貴様というやつは・・・」

「ほら、二人とも行くわよ。」

「ああ」

「それじゃお休みトウルーデ。また明日」

「ああ、お休み。また明日」

そういって食堂を出て、各々の部屋へと戻って行った

数日後……

「……………では失礼します」

そう言って、その重たい扉を閉める。

「……………」

やっと終わった

今日の戦闘の報告書を大急ぎでまとめて司令に何とか今日中に提出
することができた

時刻は午後8時30分

ふと窓から外を見ると日はもうすでに落ち辺りは漆黒の闇に包ま
れている

これでようやく休める………ってこれと同じ光景を先日見たよ
うな？

まあ、いつか

それよりもさっさと自室へ帰ろう

そうして自室への進路を取る。

ギョッ

「……………へ？」

突如、何者かに制服の端を掴まれる

その主を確かめようと振り向くと……………

「……………」

「……………ば、バルクホルンさん？」

トゥルーデがいた

しかしその表情は暗く、この世の終わりの様な顔をしている。

「……………」

「……………え〜っと、一杯付き合おうか？」

「……………コク」

場所を移動して食堂に、いつものように片隅を占領して向かい合
って座る。

ちなみに今日はコルンじゃなくてキュンメルのソーダ割り。

いつも同じものを飲んでいると味気ないので今日は少し変えてみ
た。

「……でどうしたんだ？確か今日は休暇で実家に帰っているん
じゃなかったのか？」

確か昨日の朝、彼女が大きな風呂敷もって基地を出ていくのを見
たよ。うな気がするのだが……

「……ああ、確かに帰った。久々に取れた休暇だから、クリス
の好きなお菓子もいっぱい買って、欲しがっていたW も買って

「いったさ」

ええ〜〜

もしやあの風呂敷包みの中に一杯お菓子が入っていたのか？

さすがにあれだけの量を持っていったらさすがにクリスマスちゃんも引いただろうに

シスコンここに極まる・・・

「・・・そして、やっとの思いで家に着き、クリスマスを驚かせてやるうとこっそり庭の方へ回ったんだ」

「お前はストーカーか・・・」

「そして庭からリビングの方を覗きクリスマスの姿を見つけた・・・けれど、そこにいたのはクリスマスだけじゃなかった」

「ご両親もいたのか？」

「・・・いや、二人とも共働きで昼間は家にいない」

「じゃあ、いったい誰が・・・まさか、泥棒か!？」

「そつだ……」

そつ言つて彼女は身を震わせる……

その姿を見て、なぜ彼女が落ち込んでいたのか理解する。

クリスちゃんを危ない目にあわせてしまったことを後悔している
のだろう……

もし自分が早く帰っていれば彼女に怖い思いをさせなくて済んだ
かもしれない……そつ思っているのだ。

生真面目で、責任感の強い彼女の事だ、そつ思っているに違いな
い。

「……トウルデー、君の所為じゃない」

そつして彼女の肩に手を置く……

そう、彼女の所為じゃない。

悪いのはその泥棒だ……………

今の彼女はとても壊れそうで……………

だから少しでも慰めてやりたくて……………

その言葉を口にしよつとする……………

「あの泥棒……………人がいないことをいいことに、クリスマスとツイスターゲームなんかして楽しそうにしてたんだ……………クリスマスもク

リスだ、あんなどこの馬の骨とも分からないやつとあんなに楽しそうに……くそおおおおっ！！」

「……はい？」

一瞬、思考が止まる

「私は耐え切れず「クリスその男は誰だ！！」と叫びながら飛び出した……」

その間もトウルデーは話し続ける。

「おつするに、事のあらまはこうだ

彼女が家に帰ると、クリスちゃんは学校の同級生と遊んでいた・
・
・

それだけだ・
・
・

他に言いようがない・
・
・

「うわ〜」

そっから先の事は大体想像できた

大方、トゥルーデが今日は自分がクリスと遊ぼうと思っていたの
に先に同級生と遊ばれていた。

それにシヨックを受けたトゥルーデは何も考えずにそのまま出て行った。

クリスちゃんと同級生は突如現れた謎の人物に驚く。そしてクリスちゃんはそんなわけのわからない行動をとったトゥルーデに対して……

「……………？お姉ちゃんなんて大嫌い！もう絶交？と言われた、と」

「うわあああああんっ！！！！」

その場に崩れ落ちるトゥルーデ……………

「はあ……………」

盛大な溜息を吐く

なんか余計に疲れた……

もうとっとと帰って寝たいが、そうもいかないだろう。

こつなつた彼女は朝まで止まらない。

今夜は徹夜決定だな……

彼女を慰めるために気合を入れるべく、そばに置いてあったコリ
ンを飲み欲し……

「わかった今日は付き合ってる……だから飲め、思いつき
り」

そう言ってミルクを差し出す。

それを一気に飲み干し、トウルーデは

「うわああああああんっ！！！！ クリスウウウウツ！！！！」

・・・・・・その夜、食堂から聞こえる一人の少女の泣き声
は夜が明けるまで続いたという・・・

いかがでしたでしょうか？

なにぶんこういったコメディチックな話は初めて書いたので楽しんで頂けたのなраいいのですが……

ちゃんと、コメディになってましたでしょうか？

気分転換にだいぶ前に書いていざ投稿しようとしたら、まだお姉ちゃんがきちんと出ていない状態です、そのままお流れになっていたのを今回ちょうど良かったので載せました。

本編ではあまり活躍していないお姉ちゃんですが次の話で活躍してもらいたいと思います。

ではまた次回！！

E p - 1 8 e n t s c h e i d e n d e K a m p f v o r h e r i g e

どうもシユウ禅です。

ついに始まるクラカウ奪還作戦・・・

それではどうぞ!!

クラカウ奪還作戦前日……

ついに明日、クラカウ攻略作戦が欠航されるという事で基地全体が異様な緊張に包まれていた。その中で俺はフェデリカに呼ばれ、同じように呼び出されたトゥルーデと共に格納庫にいた。

「フェデリカ、量子変換システムが使えるようになったってというのは本当か？」

俺は呼ばれた用件……量子変換システムのストライカーユニットへの搭載が可能になったという知らせを聞きに入る。

「はいはい、もうそんなに焦らなくなっただってモノは逃げないわ……はいこれ」

そう言っ て彼女は手の平にあるものを差し出す。

手の平にあるものを凝視する

「……イヤホン？」

「ええ、そう」

彼女の手の平にあるのはハンズフリーマイクロフォンという通信機に使われるイヤホンマイクだった。

通常、機械化航空歩兵が使用するイヤホンは耳にスッポリと入るマイク内蔵型の円形タイプであったはずだが、現在この片耳に掛けるタイプのイヤホンは使われていない。

というのも、このタイプはデザイン性が良くまた円形のイヤホンに比べて音質もよかったのだが、非常に外れやすく高機動戦闘などしよものならすぐさま外れてしまうので現場からはかなり不評だったのだ

なぜそんなものがこんなところに？

「ふふ…言っておくけれどこのイヤホン、ただのイヤホンじゃないのよ?」

「とうとう?」

フェデリカが自信満々に説明を始める

「いい?このイヤホンはね、装着者のイメージを感知するシステムを搭載しているの。これによって装着者のイメージを感知、そのイメージに合った武器を構成するの」

「よくそんな小さなサイズに収まったな」

「元々そんなに脳波感知システムは大きい訳じゃないし、量子変換システム自体もストライカーユニットに搭載できるくらいのもので、そこまで大きなものじゃなかったから割とすぐに出てきたわ」

そう言っつて、フェデリカは格納庫にある簡素な机の上におかれた箱状の物を見せる

大きさは片手で楽に持てるサイズ。

おそらくそれが量子変換システムなのだろう。

「これ一つで汎用機関銃二つ分くらいの容量があるわ・・・後はこれをユニットに乗っけるだけでOK」

「しかしフェデリカ、本当に使えるのか？」

今まで黙っていたトゥルーデが当然の疑問を口にする。

彼女の言い分ももつともだ。

戦闘の最中に使っていて武器を呼び出そうとして無反応は洒落にならない。

「ええ、もちろんよ……ちょっと見てて」

そういつて彼女は背後にあった自身のユニット、ファロットG5 5チエンタウロに飛び乗る。

彼女の頭から使い魔であるイタリアングレーハウンドの耳が出てくる

「はいこれ持ってて」

そしてひょいっと彼女のISの待機状態である赤いバングルを放り投げて渡してくる

そして、

「…インターセプター」

彼女がそう呟くと彼女の手に光の粒子が集まり、形を成す

光が剣の形を成すまでの時間は1秒とかならなかつた

「……ね？」

形成された小剣をこちらに見せてくるフェデリカ。

どうやら使用する分には問題がなさそうだ。

「フェデリカ、皆が使えるようになるまでどれくらいかかる？」

「そうね……普通に出し入れするだけなら一時間もあれば何とかなるはずよ。実戦で使えるようにするにはもうちょっとかかると思うけど……まさか使つつもり？」

フェデリカの言葉にうなずいて肯定する

「……………ぶつつけ本番は避けたいところだけど、今回は長丁場になるからな。継戦能力が上がるなら使いたいドックファイトとかの最中に使わなければ問題はないだろ？」

「まあ、それはそうだけど……………」

「それに、フェデリカも使用を考えていたんだろ？」

「まあね、今回はどうしたって長期戦なんだからたぶん使っちゃ言い出すだろうなって思っで、とりあえず作れるだけ作っておいたけど全員分は無理だったわ」

そっいつて息を吐く

「今のところ用意出来たのは七つに増量パッケージが二つ。全部取り付けるのに二時間もかからないわ」

「じゃあ頼む、乗っけられるだけ乗っけといてくれ。」

「了解、ついでにバルクホルンのユニットにもつけておくわね」

「だったら余計に必要なじゃない。今ならついでに増槽パッケージも付けて？あれ？も付けるわよ？」

そう言って奥においてあるものを指さす。

そこには二対の大きな剣があった。

大きさは2 m程度、その幅広い刃は見るからに重そうで叩き付けたときの破壊力は想像に難くない。

「また随分と大きな剣だな」

「カールスラント製IS近接戦闘用兵装、BWS-02よ」

フェデリカは説明を続ける。

「元々カールスラントがISの装備として開発したものらしいんだけど……見た目通りに破壊力は抜群で取り回しが不便で外した時の隙も大きいからなどの欠点があつて、結局お蔵入りになった代物よ」

「BWS - 02……」

その姿を見て息をのむトウルデー。

相手を破砕する……それに特化したデザインというべきかその刀身はなかなか肉厚で、視る者を圧倒する迫力がある。

無骨な中にも洗練されたデザイン……彼女が好きそうなデザインだ

「どう？ 使ってみたくない？」

どうやら脈ありと見たのかフェデリカは彼女に誘うように囁く

「いや、しかし……」

しかし、それでもなお、彼女は首を縦には振らないでいる。

いつもなら決断は早いほうなのに、今日に限ってはどうにも齒切れが悪い……

そこでふつとあゝとを思い出す

「 ああ、お前そう言えば機械音痴だったな」

グサッ!!

そんな音が聞こえた。

「え！そうだったの!？」

フェデリカが信じられないといった風に呟く。

それはそうだ。

なにせトウルデーはフラックウルフ社製のストライカーユニットのテストパイロットを務めているのだ。

同じテストパイロットであるフェデリカからすれば彼女が機械音痴という事実の方が信じられない。

「うっ……」

肩を落とすトウルデー。

「トウルデー、あんまり落ち込むな。人間誰にだって得手不得手があるぞ……」

そんな彼女の肩を慰めるようにたたいてやる。

「まあ、機械音痴なのは驚いたけどそれはさておいて……大丈夫よバルクホルン。そんなに難しい操作はないから私が教えてあげる。こっちに来て」

フェデリカは気を取り直しトゥルーデに自身のチェンタウロを履かせ、扱い方を説明する。

「いい？ まずはあなたが使いたい武器をイメージするの。そうね……まずはさっきのインターセプターをイメージしてみて」

「わ、分かった……」

トゥルーデは目を閉じてイメージを描く……すると

彼女の前に光が集まり、剣が形成される

「おお……」

「ね、簡単でしょ？」

「なんだ、やればできるじゃないかトゥルーデ」

「あ、ああ……」

顔を赤くするトゥルーデ

「なにせよフェデリカ、頼んだぞ」

「ええ、任せておいて」

そういつてにっこりと笑うフェデリカ。

その場を彼女に任せて俺は明日の作戦に必要な書類を提出するた
めにその場を後にした。

「納得できませんっ！！！」

異様な緊張に包まれたJG52基地から南へと下ったところにある陸軍駐屯地、そこに用意された執務室で明日の作戦の細かなところを確認していたロンメルは目の前で怒り狂う少女の姿を見て深く息を吐く。

腰まで長くのばされた銀に輝く美しい髪、端正な顔立ちである彼女は間違はなく美少女と言ってもいいが、その左目を覆っている漆黒の眼帯が彼女の異質さを表していた

「何が納得できないのかね？　ラウラ・ボーデヴィツヒ少佐」

そんな彼女の姿を見ながら呆れたように言葉を返すロンメル。

「なぜ、我が部隊が後方の予備部隊なのですか！！ 納得できません！」

「……………なぜだね？」

「我々はカールスラントに十機あるISのうち、三機の所有を許された精鋭部隊です！であるにもかかわらず、今回我々の任務は前線でネウロイと戦う事ではなく後方で指をくわえて他の者の戦いを見ていると言われたのです。納得できるわけがありません！！」

彼女の訴えにロンメルは再び深く息を吐く。

作戦というものは全てにおいて念密に計算されて立案される。

与えられた任務、私の保有する戦闘力、作戦地域の地形や気象、敵情などの情報を総合的に考慮し、具体的な攻撃目標や陣地配置などを決めて実施される。その一つ一つに無駄なものなどなく、考えうる状況全てに対応し、作戦を成功に導くために考え抜いて考え抜いて立案され、決行される。

「用件はそれだけかね？だったら早く立ち去ってくれないか？」

まだまだやることは山ほどあるんだ、君の妄言に付き合っ時間がないのだよ」

「な!？」

ロンメルは鬱陶しいといわんばかりに退出するように促す

ロンメルも別にたかが一佐官が身の程を弁えずに直訴しに来た事をとやかく言うほど器量の狭い人物ではない。

直訴しに来た内容が考えるに値する意見であればもちろんその意見には耳を貸す。それくらいの度量は持っているつもりだ。

しかし自身が活躍したいからという極めて個人的な欲求で作戦変更を一部隊の隊長が作戦の総指揮を執る人物に直訴しに来るとは……そんなバカげた話に付き合ってやるほど彼も暇な人物ではない。

「しかし!！」

それでもなお食い下がろうとするボーデヴィツヒ

その姿を見て更にロンメルは呆れ、深いため息を落とす。

目の前にいる少女のなんと器量の狭いことか……軍人の資質を問いただしたくなる。

もしこのような者が自分の旗下の少佐であれば即刻全ての権利を
はく奪し、一兵卒からやり直させている所である。

所詮はISという兵器の恩恵にあやかっただけのモノという事が……

その一言で全てが片付いてしまうのだから笑い話にすらならない。

「……………くだいな少佐。これはすでに決定したことだ。それで
も前線で戦いたいというのであれば……………いいだろう、戦わせてやる。
その場合はISは今ここにおいて行け」

「っ！それでは意味がありません！我々はISで戦果を挙げ無け
ればいけないのです！」

「ふ……………ISで戦果を挙げることにどれだけの意味がある？そ
れすらも解らない貴様に作戦に参加する資格など無い。…とつとと
出ていけ少佐、これは命令だ。」

退出するようにせまるロンメル……………そこへ

「……………失礼します」

突如その空気を断つように執務室に毅然とした声が響く

その声と共に入室する女性

すらりとした長身に良く鍛えられているが過肉厚ではないボディライン。狼を思わせる鋭い釣り眼のカールスラントの軍服を着た扶桑出身と思われる黒髪の美女であった。

「……………ブリュンヒルデー織斑千冬か」

ロンメルはその女性の名を呟く

入室してきたのはIS世界大会ーモンド・グロツソー第一回優勝者、織斑千冬であった。

「教官！」

ラウラは千冬の登場に歓喜の声を上げ、ロンメルは千冬の顔を見付ける。

「……………何か用かな？ 織斑教官」

ロンメルやラウラが教官と呼んだように、今現在彼女は代表を引退してここカールスラントでIS部隊の教官の職に就いている。

その教官と呼んだロンメルのその声には険を含んでいた。

しかし、それを気にした風でもなく彼女はその整った口を開く

「…………私の教え子が大変失礼いたしました。数々の失礼な振る舞いお許しください」

頭を下げる千冬

「…………別に気にしていない。それよりも何か用件があったのではないかね？」

さつさと用件を言えとばかりに言い放つロンメル。

その姿は温厚で常に紳士然とした態度をとる普段の彼とは思えない態度である。

「……………お願いがあっってきました」

「何かね？」

そう言ってまっすぐロンメルを見据える千冬。

「どうか、彼女たちを前線で戦わせて上げてください」

そう言って深く頭を下げる千冬。

「……………教官」

ラウラは敬愛する教官のその姿を申し訳なさそうに見つめる

その誠心誠意頭を下げる千冬の願いをロンメルは……………

「………言いたいことはそれだけかね？」

冷たい視線で見下ろし切り捨てる

「………どうかお願いします」

切り捨てられても尚、頭を下げ続ける千冬

「……あの時の事を忘れたわけではないだろうな」

「っ！」

ロシメルのその言葉に体を強張らせる千冬

「あの日……撃墜数欲しさにクラカウの避難民を見捨て、ネウロイの勢力圏内に無謀にも侵入したのはどこの部隊だ？」

「!!！」

その言葉と共に辺りを尋常じゃない覇気がつつむ。

「……………私が教導した部隊？ シュヴァルツァ・ハウンズ？ です」

その覇気に気圧されそうになりながら何とか言葉を絞り出す千冬

クラカウから避難民を撤退させる作戦に彼女の教えていた部隊の一つが参加していた。しかし、その部隊は戦闘が始まると避難民の護衛を放棄した挙句、ネウロイを深追いついてさらに彼らの活動を活性化させるという取り返しのつかない失態を犯したのだ。

「あの部隊の所為で一体どれだけの兵が傷つき、民間人を危険に晒したと思っている？」

「もしあの日、？彼ら？がいなければ今頃カールスラントも奴らの勢力圏内に入っていただろう」

そしてロンメルはラウラを睨み付ける

「……あれから半年経ったが君の教え子は変わらず傲慢のようだな」

「私は！あのような屑たちと違います！！」

ロンメルのその言葉にラウラは必死に否定する。

「何が違うとこのかね？ISで戦果を上げたい……そんな個人的な要望で作戦の配置替えを行わせようと作戦指揮官の所に乗り込み声を荒げる……撃墜数を稼ぎたいといって避難民を護ることを放棄した奴らと何が違うとこのだ？」

「っ！！」

ロンメルの非難に何も言えず押し黙るラウラ

ロンメルはそんな彼女は気にも留めずにいまだ頭を下げ続ける冬に視線を戻す。

「織斑教官……君は何をこの半年教えていたのだ？」

そのロンメルの容赦ない言葉に何も言い返せない千冬……

ロンメルはうつむく彼女の耳元に顔を寄せ

「ブリュンヒルデという称号に酔い、たった一人の家族にすら見放された君に誰かを教え導くことなど出来はしなかったという事か」

「っ！……！」

そう呟くとロンメルは立ち上がり机の荷物をまとめ、部屋を後にしようとしてドアに手をかける。

「今の君たちにこの作戦、ひいてはこの戦争に参加する資格はない・・・帰るたまえ。」

最後にそういつとロンメルは俯く彼女たちを置いて部屋を後にした。

ロンメルが去った後も顔を上げることなくうつむき続ける千冬。

「申し訳ありません教官……私の所為で」

「・・・」

ラウラの言葉に返事を返すことも視線を向けることもなく部屋を後にしようとする千冬。

「教官!?!」

「……………帰るぞボーデヴィツヒ」

そう一言つぶやき部屋を後にする千冬。

「……………教官」

その去る背中をただ見ていることしか出来ず、顔を俯かせる

「……………私は認めない……………あの男が教官の?弟?
などという事を……………絶対認めない」

そして顔を上げる。

その瞳には決意と深い憎悪の炎が宿り、ここにはいないその者に
殺意を抱く

「？————？！貴様は……………この私が必ず殺す」

・
・
その怨みを込めた決意の声は暗い夜の闇に溶けていく……………

そして……………

それぞれの思いを胸に抱き、そして夜は明ける

「……ちつ、皆準備はいいか？」

俺は目の前に並ぶウィッチ達に声をかける。

「ええ、もちろん。」

皆を代表して答えるのは武子。

彼女の言葉と共に皆頷いて返事をする。

「……皆、ありがとう」

そう言って頭を下げる

「いろいろ苦しい事、つらい事あったけれど皆に出会えて本当に良かった。」

「何言ってるんだい優刀、それじゃお別れの挨拶だよ」

その姿を見た伯爵がおかしそうに笑う。

「それに、お礼を言うのは私たちの方よ」

そう言って微笑むのはエディータ。

「そうだな・・・ボスのおかげでこんなにも面白い奴らと一緒に空を飛べたんだからな」

大將がいつもの気だるげな態度で笑みを浮かべる

「おいおい、これじゃ本当に今生の別れみたいじゃないか」

今までのやり取りを見ていたラルが呆れたように笑みを浮かべる

「え！？この部隊今日で解散なの！？」

ラルの言葉に本気で驚くフラウ。

「大丈夫ですよ、まだ解散なんてしませんよ。……ね？マルセイユさん」

フラウをあやす様にマルセイユに同意を求める下原

「ああ、こんなに気の合う仲間はいないからな！解散なんてさせるか！！」

その言葉に強く頷くマルセイユ

「ふふ、そうね。こんなに面白い子達が揃った部隊は他にないわね」

そういうと更識は扇子をパツと開く・・・そこには？最高？と書かれていた。

「ま、とういう訳でこの部隊はあなたがいたからまとまったのよ。貴方が嫌って言っても解散なんてさせないわよ？」

そう言って微笑むフェデリカ。

「そういう事・・・だからありがとう。この部隊を作ってくれて」

そう言って微笑む武子。

「皆・・・」

皆のその言葉に目頭が熱くなるのを感じる。

そこへ・・・

『…義勇統合戦闘飛行隊は誘導路へ、滑走路手前で待機』

「ドラツッへーっ了解」

管制塔から指示が入り、俺たちは出撃するために誘導路へと向かう。

滑走路には発進台が並べられており、そこでは土田班長達整備班が次に発進する俺たちのストライカーユニットを準備していた

「少佐、準備できました！」

「ありがとう班長」

「後武運をお祈りしています」

そついうと班長は敬礼して離れていく。

「義勇統合戦闘飛行隊へ……離陸を許可する。後武運を……！」

「ドラッへー了解……よし、みんないくぞ……！」

「……了解……！」

その声を聴き俺は号令をかける

「義勇統合戦闘飛行隊、発進する……！」

あれえ・・・？

なんかロンメル将軍が悪役っぽくなってしまった気が？

．
．
もっと紳士で騎士道精神あふれる人だったはずなんですけどね．

まあ、言いたいこと書けたので良しです。

最後になりますがご意見ご感想お待ちしております。

感想が来たら作者の気分がレベルアップ、不思議なアメなんて目
じゃないくらいに作品が成長するかもしれません。

ではまた次回！！

Ep.19 Strategianfang(前書き)

二日連続投稿!!

というわけでついにクラカウ奪還作戦始まります。

ではどうぞ!..

「うわぁ・・・すごいね隊長、飛行機がいっぱいだよ」

カールスラント上空を南方にあるクラカウに向かって飛行しているとフラウは珍しいものを見るかのように見回している。

彼女の言う通り、今自分たちの周りには今回の作戦に参加するために各基地から飛び立った戦闘機がちらほらと飛んでいる。

「F-35ライトニング？にEF-2000、ガリアのダッスオ
ー・ラファール……、おいおい扶桑のF-2Aまで参加するのか？」

大将が飛んでいる戦闘機の多様さに驚いている。

それはそうだ・・・何せ今周りを飛んでいるのが四半世紀ほど前に空を飛んでいた戦闘機だ。

普通に考えれば航空博物館で展示されていてもおかしくないような代物ばかりである。

「まるで戦闘機の大見本市ねえ……」

その光景の特殊さにエディータがどこか呆れたような言葉を漏らす。

すると……

『はっはっはっは!! おいおい嬢ちゃん達、見本市はねえだろ
うっ……』

突然、インカムから男性の者と思われる笑い声が聞こえてきた。

その声と共に一機の戦闘機が後方から接近してきて横に並ぶ。

その戦闘機はF-22「ラプター」……

かつて世界最強の戦闘機と言われ、大空を支配した戦闘機が今自分たちの横にいる。

『はははあ！ 久しぶりだな坊主、元気にしてたか？』

「その声……冬后さん!？」

黒く染め上げられたラプターに視線を向ける。

キャノピーにはこちらに向かって手を振る男の姿が

彼の名前は冬后蒼哉

扶桑国空軍に所属するパイロットであり、扶桑海事変では一般航空歩兵でありながら航空型ネウロイを単機で10機撃墜した伝説のEースパイロットで、漆黒に塗られた機体と騎士のパーソナルマークから「黒騎士」と呼ばれ讃えられている。

「お久しぶりです冬后少佐」

今回の作戦の為にリバウ航空隊から派遣された坂本がうれしそうに挨拶する。

扶桑海事変の時から兄貴分である冬后さんに会えたのがうれしかったのだろっ、普段は見せないような笑顔を見せている。

「少佐もこの作戦に参加するんですか？」

『おうよ、何せ欧州の未来がかかっているこの大一番、参加しないわけにはいかないだろうよ』

だははっ と豪快に笑う冬后さん。

相変わらずお気楽な人だなあ

「冬后さんが参加するなら心強いです」

『ははははっ！まさか扶桑の白き龍にそう言われるとはな。ま、この作戦が終わったら一緒に酒でも酌み交わそうや！』

「了解です」

冬后さんは敬礼をして離れていく

そこへ……

『 諸君 』

毅然とした声が響く

『 忠勇なる世界各国の兵たちよ…今回の作戦の指揮を執るカール
スラント陸軍のロンメルだ…まずは各国より支援に来てく
れた皆に祖国を代表して厚くお礼申し上げます。本当にありがとう…』

……今滅亡の危機に瀕している世界の中で、君たちの様な勇猛なる者たちに出会えたことを誇りに思う　　そして君たちと平和な世で出会えなかったことを悲しく思う。ただ、現在我々は存亡の危機に瀕していることもまた事実。世界中の人々が一致団結し、迫り来る脅威に対峙せねばならない。諸君らにおいてはその一致団結の先端となりて黒き異形の敵を粉碎し、未来への一条の希望となつてほしい。』

そこで一旦息をつき、そして言葉を続ける

『　　半年前、我々はクラカウで苦汁をなめさせられた。護るべき場所も、人も護れずにただ逃げることしか出来なかった。あれから半年……今日この日、我々は再びかの地へ向かう……あの美しいクラカウの町を黒き異形の魔の手から解放し、人々に再び平和をもたらすために……』

そして將軍は高らかに声を上げる。

『行こう！皆の平和を取り戻しに！』

『行こう！皆の笑顔を取り戻しに！！』

『さあ諸君！奪われた我らの美しい大地を取り戻そう！！』

ワアアアアアアッ……………

「さすがはロンメル將軍だな」

通信機越しに陸軍兵たちの歓声が聞こえる。

どうやら今のロンメル將軍の演説で兵たちの士気が上がったようだ。

かくいう俺も胸の奥からナニカ熱いものが込み上げている

そして次に無線機から聞こえてきたのは凜とした女性の声

『空にいる全ての諸君！聞こえるか？ 今回、航空部隊の総指揮を執ることになったカールスラント空軍、アドルフイーネ・ガランドだ。作戦を改めて説明する』

ガランド中佐は続ける

『今回、我々の作戦目標はクラカウ上空に鎮座する超大型ネウロ

イ『山』の撃破だ……まず、クラカウ周辺に展開する航空型ネウロイを殲滅。その後支援戦闘機部隊による対地攻撃を行い、味方陸戦部隊とクラカウ上空の安全を確保。そして部隊をクラカウ直上の航空型をひきつける囮部隊と『山』に直接攻撃を仕掛ける挺身部隊の二部隊に分ける』

『囮部隊はクラカウ上空部隊に攻撃を仕掛け、敵の注意を牽きつけて『山』から引き離す。・・・その間に挺身部隊は『山』に攻撃を仕掛け撃破しろ……何か質問は？』

ガランド中佐のその問いに皆無言で肯定の意志を示す

607

『よし……ではこれより作戦を開始する、諸君！奴らに教えてやるんじゃないか、人間は貴様らの様な虫に負けはしないと！』

「「「了解！」「」」

此処にいる皆が叫ぶ。

『中佐！4時方向にネウロイの反応を感知！！・・・その数、数えきれません！！』

「坂本、下原！確認できるか？」

「はい！高度5,000m、距離30,000mに敵確認！」

「大型8、中型15、小型は・・・ざつと70！！ 勲章の大盤振る舞いだ！！」

「中佐！！！」

『こちらでも補足した・・・戦闘機部隊、さつそく出番だ！』

ガランド中佐の号令と共に戦闘機たちが前に躍り出る。

『ネウロイ、目視内射程に入りました！』

『よし！攻撃開始！！』

『メビウス1、FOX3!!』

『ガルーダ1、FOX3!!』

ガランド中佐の号令と共にミサイルが一斉に発射される。

ミサイルは白い尾を引いて黒き軍勢に一直線に突き進む

ドオン!!

轟音が響き、優刀達の所にも爆風によって飛ばされた空気が優等の頬をなぐ。

「全機オールウェポンフリー全兵装自由！攻撃開始！！」

一斉にネウロイへと呐喊する

「よしラル行くぞ！！」

「ああ、久々のロツテ復活だ！派手にいくぞ！！」

優刀も二番機のラルを引き連れてネウロイの大群の中に飛び込む。

狙うは中央に坐する大型ネウロイ

そこに向かって一気に突撃する。

その前に立ちふさがる多数の小型のネウロイ

しかしその小型を前にさらに加速する優刀

減速する必要などない、なぜなら……

「ふ!!」

後ろに彼女がいるからだ。

ラルは彼に攻撃を仕掛けようとするネウロイに素早く魔力を込めた銃弾を放つ。

その攻撃を食らって落とされるネウロイ

優刀も自らの射線に飛び込んできた敵機に機銃を斉射、そのまま次に飛び込んできた敵機に一気に接近……

「はあ!!」

M G 5 2を量子変換システムで収納し腰に差した扶桑刀を一閃、その刹那の一連の動作で敵機を両断する。

消えていくネウロイの白い破片の中を一気に突っ切る。

その後を飛行するラル。

大型をやらせはしないと二人の行く手を次々に小型機が遮り、二人に向けてビームを放つがその中を二人は気にも留めてないようにすり抜けて突き進んでいく。

「なめるなっ!!」

再びMG54をその手に展開した優刀は前方に向けて一斉射。バランスが崩れ隙を見せた敵を背後のラルが打ち抜く。

そのまま優刀は扶桑刀を構えて一気に大型へ……

大型は優刀を近づかせまいと幾重ものビームを放つがすべて見切りネウロイに迫る

「もらった!!」

魔法力を込めた扶桑刀を逆袈裟で一気に振りぬく

その一撃で優刀は300mはあろうかというネウロイを一刀のもとに切り伏せる。

勢いを殺すことなくそのまま次の敵へと向かう

「全く、いつ見ても凄まじいな」

ある時はラルがサポートに回り、ある時は優刀が彼女を援護する……

二人の息の合ったコンビネーションを見たジェンタイルが呟く。

「…マルセイユ、遅れるなよ？」

「もちろんだ大将、背中には任せてくれ!!」

大将の言葉にマルセイユはうなずき、共に突き進む。

ジェンタイルは眼前に立ちはだかる中型に狙いを定めて猛禽の如く襲い掛かる

そのジェンタイルに背後から襲い掛かるうとする小型にマルセイユは一連射、わずかな銃弾でネウロイを木端微塵にする。

撃ち落としたネウロイに目を向けることもなくマルセイユはジェンタイルの援護をする為に後を追う

その間もジェンタイルは目の前の中型に向けて銃弾を放ち続ける。

そしてついに中型のコアを露出させる。

「これで終わりだ」

ジェンタイルは手に持つM249を即座にレミントンM870に変え、コアへと放つ

その強力な一撃を食らったコアは見る影もなく粉碎され、あたりに白い破片をまき散らす。

「……ふむ、使えるな」

一連の動作で量子変換システムの有用性が実証され、その結果に満足そうに呟くジェンタイル

そして再度M249を展開、今度は更に左手にグレネードランチャーを展開する。

「さて、今の私はすごぶる機嫌がいいんだ……墜とされた
い奴はかかってこい」

「やれやれ、大将ったらあんないい笑顔で物騒なこと言うね」

「で、でもジェンタイル中尉らしいですね」

ジェンタイルの暴れまわる様を見て、クルピンスキーはおかしそうに、下原はいつものように困ったように笑う。

「じゃあ、私たちは四人の残りのお掃除と行くところか？」

「はい！」

その場から左右に飛び退く。二人がいた場所に左右から飛んできたビームがぶつかり爆発する。

クルピンスキーと下原は一瞬でビームを放ってきた二機の敵の側面に回り込み……

「これで終わり(だよ)です!」「」

同時にトリガーを引く。

二人の攻撃を食らったネウロイは成す術もなくおちていった。

武子や、ロスマン……その他のウィッチ達も縦横無尽に活躍し、次々とネウロイを墜としていく。

それに負けじと戦闘機乗りたちもネウロイに挑み、勝利を収めていく。

戦場に次々と白い破片が舞う

この蒼穹に白い破片が舞ったびに人類は勝利へと近づいている……

今、この戦場にいる誰もがそう信じていた

しかし彼らはまだ知らない

この戦いはるか上空から見つめる黒き影の存在を・
・
・
・
・

Ep-19 Strategiefanfann (後書き)

ああ・・・やっぱり戦闘シーンって難しいです。

書いていてとても楽しいんですけどねえ・・・

それよりもロンメル將軍の演説の方が難しかったです。

これで少しは彼の悪役っぽいイメージが払拭出来ればいいんですが

最後になりますがご意見ご感想お待ちしております。

感想が来たら作者の気分が上がって何かいいことあるかもしれないな
いす

それではまた次回！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4483x/>

INFINITE WITCHES ー無限の蒼穹を駆ける白き龍ー

2011年11月26日23時49分発行